（表紙）

貞久公　自貞和二年
師久公　至觀應元年

前編　舊記雜錄　卷廿二

「國史道鑑公」

「貞和」二年丙戌、南朝正平元年、夏五月、　公令伊集院道忍還院家侵地、置名主等如故、拠伊作家譜、六月朔日、　公賜比志島氏族人書曰、別府次郎兵衛尉政貞下人犬袈裟女、自敵城逃歸、言凶徒會河邊郡高城、近日將寇、君其發兵來援、拠道鑑公旧譜、高城遺墟在川辺地頭館東北二十一町野崎村、一名松尾城、　秋、伊集院道忍復反、島津道惠・二階堂行仲據城自守、澁谷氏築城野崎村、以爲外援、七月三日、凶徒屯貝柄崎以逼野崎城、拠伊作家譜、吉利郷有地名野崎、在今小松右近別館北六町許、貝柄崎在阿多地頭館北十六町余、宮崎村与田布施接界、当書為貝殼崎、而原文作貝柄崎、柄字読為加良、如足柄山是也、然以此字為殼字之義、則失之矣、　伊集院道忍攻日置若松城、城中多死傷、八月二十七日、夜遂陥之、明日又侵日置莊内、島津道惠邑、又攻日置下司宗太郎忠弘、遂拔其城、於是道忍悉有北郷・河南・河北之地、同上、若松・吉利地名、見伊作家譜所載地図、小松右近別館北一町余有若松馬場、　九月四日、澁谷氏棄野崎城而去、道惠・行仲勢孤、又聞伊集院道忍・鮫島彦次郎等將來攻、告急於奉行所、同上、二十一日、　公與郡山頼平書、使修郡山城、以備不虞、拠道鑑公旧譜、郡山郷有故城墟、閏月十数所、頼平所修、不詳的何城、四日、幕府賜宗久・行仲書、以勞守城之勤、拠伊作家譜、二階堂氏家譜、「□月六日、高師直与畠山直顕書、使公領薩摩国河辺郡・大隅国本庄、如建武三年冬十一月二十一日、賜　公教書、使擊伊集院道惠・鮫三月十七日下文」「忍カ」島蓮道　蓮道即彦次郎入道、等、拠道鑑公旧譜、此書無名及花押、下教書有直義花押、豈亦直義書乎、拠足利直義賜島津道惠教書、使與守護人俱擊道忍等、拠伊作家譜、此書無名、然有直義花押、其為直義書明矣、

三年丁亥、南朝正平二年春正月「大」七日、　公賜比志島彦一書曰、昨日南方凶徒引數百人入隆信城、我師寡弱、恐弗能克、君其率兵來援、拠道鑑公旧譜、隆信蓋谷山隆信、二十日、賜比志島氏族人書、亦如之、同上、二月「大」十三日、「先是、春日侍從為凶徒所討、公賜野田又太郎・因之東国宮方大失勢力、見古文書、公弼考云、常楽記所謂春日侍從□邦朝臣也」重久篤兼書曰、前日以十一月二十一日教書徴兵、至於今日、曾無一人至者、何故、宜速寡兵來會、毋出今月、拠田代上田屋敷百姓主膳・穎娃左京附衆中鎌田四兵衛文書、　伊作三郎左衛門尉久氏、仕幕

府爲近習、幕府遣諸將擊楠正行、久氏請行弗許、固請、許之、送至東寺、餽扇爲贐、正値九日、扇畫菊花、因作和歌曰、己己乃津乃、久仁與利美與波、遠左末利天、女天太幾己止遠、之良幾久乃波奈、書諸扇以賜久氏、久氏拜賜、以贈其兄島津忠親、忠親即大隅宗四郎、用爲記念、

[□月廿八日、嶋津三郎左衛門在洛、奉尊氏教書、山名伊豆□司時氏□赴天王□]

秋九月十一日、死於天王寺之戰、久氏、道惠之次子也、

[見古文□云、拠島津系図、伊作家譜、按参考太平記、貞和三年、楠正行屯天王寺、]

[将軍遣細川陸奥守顕氏擊之、八月十四日、顕氏至藤井寺、九月十七日、]

[正行引兵襲之、顕氏敗走、十一月二十五日、将軍復遣顕氏及山名伊豆守時氏擊正行、時氏屯住吉、顕氏屯天王寺、二十六日、時氏与正行戰於瓜生野、時氏敗走、保天王寺、天王寺合戰月日与此異、]

[正二四]

四年戊子、南朝正平三年、春正月十二日、足利直義賜　公書、使與畠山直顯俱討國中凶徒、因言今月五日、殺和田・楠以下數百人於河州佐良良北四條、吉野益孤、不日敗之、

[山史、□日、□将師直、□尊氏旗与曾我島津阿保薬師寺等、二万余騎□之]

[拠道鑑公旧譜、按参考太平記、貞和四年正月五日、高師直與和田・楠、戰於四条縄手、擊敗之、楠正行・正時・和田新発意・新兵衛等死、年月日与直義書合、太平記原本云、貞和五年蓋誤、和名類聚河内鑑有讃良郡、読曰左羅羅、河内鑑名所記、四条縄手有楠正行・正時墓、縄手或作畷、]

二月九日、筑紫探題一色入道道猷名範氏、称少輔太郎、與島津道惠書、使擊薩摩凶徒、拠伊作家譜、秋八月二十九日、賜

[直義ヨリナラン]

公教書、使擊楡井四郎賴仲以下凶徒、拠道鑑公旧譜、賴仲、信濃源氏之族也、拠齢岳公旧譜、冬十月二十七日、

光明天皇讓位於崇光天皇、拠太平記、十一月十一日、公賜重久篤兼・野田又太郎・比志島孫太郎貞範等書曰、將擊楡井賴仲、卿等募兵先期來會、拠鎌田四兵衛・田代上田家敷百姓主膳・加治木家臣比志島久右衛門家蔵文書、公擊楡井賴仲、

[収局不詳、貞範、彦一之弟也、拠比志島隼人系図、]

五年己丑、南朝正平四年、春正月二十六日、　公賜比志島彦一書、使發兵、拠道鑑公旧譜、秋八月十二日、高師直・師泰、圍幕府及足利直義於近衛東洞院第、拠太平記、四郎左衛門尉

[四郎左衛門尉即下野四郎、]

時久・右衛門兵衛尉忠賴、踰垣而入、上飲食、忠賴、忠氏之子也、拠島津支流系図、山田聖栄自記、

[「秋、直冬出込備後主河尻肥後守幸俊家、大宰少弐以其女妻之、筑紫多応之日、於是宮方・将軍方・直冬方、三分九国戰争不已、太平記」]

九月二十八日、高師直遺公書云、兵衛佐殿奔鎮西、教書使　公誅之、冬十一月二十三日、　公報師直書曰、謹聞命矣、

拠道鑑公旧譜、師直書及公報書無年、按太平記、右兵衛佐直冬為中国探題、居備後輌、師直使中国地頭御家人討之、九月十三日、杉原又四郎将兵襲之、直冬奔肥後、実貞和五年事也、参考太平記、右兵衛佐直冬、毛利家本、作左兵衛、皆非、北条家金勝院南都本、作右衛門、

二十八日、國分平次郎友重攻執印左衛門大夫又三郎、改称左衛門大夫、友雄於水引城、拠二階堂氏家譜、国分平八郎系図、友重、友成之玄孫也、国分友成見第一巻承久三年注、

[今水引郷五代村有故城墟、名屏風山、田島城在地頭館北十四町余、五代村、即郡村高辻帳水引村、]

十二月二十七日、幕府賜島津道惠教書、使討足利直冬、拠伊作家譜、

[後村上帝以和州吉野郡穴太為皇居、]

観應元年庚寅、是年二月改元観應、正月猶是貞和六年、南朝正平五年、春二月二十七日改元、拠和事始、秋八月十八日、伊集院道忍等圍郡山賴平

[三月二日北小路玄恵卒云々]

於郡山城、凡三日、小山田景範・景範子又二郎高範・比志島貞範・貞範弟彦次郎範家・吉田清秋・猿渡藤三郎信重引軍救之、道忍等退、既又濟師來攻、賴平棄城走、（拠比志島隼人・猿渡喜右衛門・諏訪甚六家臣加治木半左衛門家蔵系図文書）信重、實信之五世孫也、（拠猿渡喜右衛門系図、猿渡実信、見第一巻文治二年、）直冬已至筑紫、郡縣多應之者、（拠太平記、）畠山直顯亦叛幕府、附直冬攻新納院高城、陷之、（拠道鑑公旧譜、沙弥観恵・沙弥聖源文和二年正月禀文、）高城領主近江守（四郎左衛門改称近江守）、時久、時在京師、比其反也、轉客高江郷、幕府追錄東洞院之功、（新納時久、赴東洞院之難、見去年、）封諸救仁院、其後時久居松尾城、（拠島津支流系図、時久居松尾城、年闕、拠下二年畠山直顯下榆井頼仲所領志布志城、此年領志布志城者榆井頼仲、二年領志布志城者畠山直顯、然則時久居志布志城、当在二年以後、但其年之遠近不可知已、松尾城故墟、在志布志地頭館北一町許帖村、）戍東福寺城、以備之、六月朔日、別府次郎兵衛尉政貞所嘗使僕犬袈裟女、逃自敵城、歸公告實曰、將以近寇、於是公又飛檄徵滿家兵、（按公賜比志島氏書、二月十二日、五月十八日二通年無、而六月一日書載貞和二年、以此参考、文意接続如一歳事、且拠五月書、言忠国等為公告急、則其在降公時明矣、忠国属公在此年月、見佗旧書、因併置此、以備後考爾、）

2210

『兼重傳』

正平元年丙戌（北朝貞和二年）、間歳兼重及中院法印等會揖宿郡、謀築要嶮據絶敵路、乃率水兵發山川港、　公聞知之、二月十二日、賜比志島彦一書曰、我師寡弱恐弗克之、願其率兵來援、○南方人會于高城（河辺郡）、謀乘黒夜襲東福寺城、前此伊集院忠國及市來入道等降聽　公命、今窺知之、乃飛報麑島、五月十八日、　公以故賜比志島彦一書、令徴兵村、

2211

『比志島文書』

『中院法印於太平記可校考也』

中院法印并兼重以下凶徒等、取乘兵船、取要害、可打塞路次之由、相巧之、既發揖宿郡山河津候之由、自方□（ミカ）告來候、仍惣軍勢定御奉書候訖者、餘無勢候、到來此狀候者、不替時被馳寄候□（者カ）悦入候、恐々謹言、

『嘉貞和二年』　二月十二日　　道鑒（貞久）（花押）

比志嶋一族御中

2212

「市來崎氏文書」

奉讓与

薩摩國山門院三百五十丁、限永代、山門六郎當知行不有（可脱カ）相違、於末代奉讓与所也、可爲子々孫々之地也、仍執達如件、

正平元年三月廿八日　　平家高（花押）

2213 『比志嶋相馬蔵』

南方凶徒等、此暗夜仁可忍東福寺之城之由相巧候旨、自『暦応四辛巳四月、公陷之、八月十五日、攻平城』伊集院助三郎并市來入道方告申候、就其者、常如此申候間、雖無心候、此暗夜之間、一族□寄合候て、軍勢三人被差遣、被致警固候者、悦入候、恐々謹言、

『疑貞和二年、此秋伊集院助三郎忠国入道々忍復叛公云々』五月十八日　道鑒（花押）

『藍平』

比志嶋彦一殿

2214 「元久公御譜中」

元久

又三郎　陸奥守

貞治二年癸卯誕生於大姶良、母伊集院長門守忠國女也、

2215 「近世略御系図」

元久

初孝久　又三郎　陸奥守

貞治二年癸卯五月廿日見于仲翁禅師祭文中、誕生大姶良、母伊集院長門守忠國入道道忍女也、逝去年月不詳、法名外欽公大姉、

2216 『比志島相馬家蔵』

凶徒等打集河邊郡高城、可寄來陣々之由、此間風聞之處、只今午□別符次郎兵衛尉政貞先年所召仕下人犬袈裟女、自敵城逃來、所告申白狀如此、爲存知、寫遣之、所詮、不廻時日、各可被馳越當陣也、仍執達如件、

貞和二年六月一日　沙弥（貞久）（花押）

滿家院人〳〵御中

2217 「越前島津譜中」「七代忠兼譜中ニ在リ」

（尊氏）（花押）

下　嶋津周防三郎左衛門尉忠兼

可令早領知播磨國布施郷公文職事

右、爲勲功之賞、所宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如件、

貞和二年六月廿一日

2218 「在御文庫二番箱他家文書中」

薩摩國可令知行給候、恐々謹言、

貞和二年八月十二日　治部權大輔判

謹上　中納言法印御房

2219

「御文庫三番箱中」

（別紙）「きた方の名主直人の連書（署）のきしやうもん案」

うやまて申、きしやうもんの事、

右、元ハミやかたほうきし候によて、たま〳〵いさくとの丶御たいくハんかちへさへもん入道とのにむけまいらせ候て、しよしにつけ候て、二心はらくろかいしん、わか身としても人をかたらい、をもてをかへてもゆめ〳〵あるましく候、もしこのてう〳〵いつわり申上候ハ丶、日本六十よしゆうの大小の神きミやうたうの御はつを各〻まかりかうふるへく候、仍きしやうもん如件、

貞和二年八月廿八日　　さたつく在判

あきすみ　　あつすけ

ひろすみ　　よしとみのりさた

さいゐん　　ミやうちのこれひろ

たうゆう

2220

「正文樺山嫡家蔵」

（端裏書）「伊作庄河北名主直人等連（署）書注進状案」

注進

薩摩國動乱之間、院家御領伊作庄河北仁、御敵等構城塀於所に、田尻・坂本・今田已上三箇所仁、構城塀楯籠之間、庄内荒所仁罷成候之處、嶋津左京進入道〻惠帯（宗久）梨原法眼下狀、去年四月七日、中山城仁打入、被差置代官、直人名主相共仁、彼三ヶ所之城於被攻落候之處、日置北郷河北者、大隅助三郎（忠國）入道〻忍令押領候之間、今年五月中仁自守護方名主各如元しすゑられ候處、同八月中仁、助三郎入道〻忍又成御敵、追落日置下司宗太郎忠弘之城、同北郷河北河南一圓仁被押取候了、就其伊作庄河北仁、御敵等近日可寄來之由、及治定候之間、爲全庄内、道惠代官、名主直人相共、中山城楯籠候、如此奉爲　領家、道惠被致忠節候事、無子細候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

貞和二年九月　日　　藤原種秀

藤原惟弘

沙弥道願

沙弥西念

沙弥良心

進上　御奉行所

2221

「兼重譜中」

2222

「伊作家文書」
（端裏書）
「注進状案」

注進

八月、伊集院忠國復應官軍、二十七日、攻若松城、（在日置郡、）夜遂陥之、（見二階堂行仲等注進状、）

（伊集院忠国）大隅助三郎入道〻忍下向之間、又成御敵、押寄當國日置若松城、致合戰之刻、若松之親類若黨等數輩被討、八月廿七日夜落城候了、同廿八日、（宗久）道惠日置所領押取、打塞路次之間、難通大將在所候、次澁谷一族等、此間爲當城合力構行、件領内野崎村仁要害楯築處、凶徒等率大勢、去七月三日就于取彼城近所貝柄崎仁向城、今月四日卯尅澁谷一族等不残一人弃城引歸了、依之當城爲無勢之間、鮫嶋彦次郎入道・助三郎入道以下御敵等、來六日大勢可寄來彼城之由、必定云〻、而澁谷一族等弃城之条、頗不少不審、雖然、可合力之旨、嚴重可被成下御教書候哉、將又、澁谷下總六郎、不可隨石見權守所勘之由、令申候間、可被成各別御教書候哉、次大隅國平山左近將監號社家仁、不向谷山城上者、可合力池部城之由、同欲被仰下、而如先〻言上、於山南諸方御敵等中仁、爲當城一所之間、彼城令没落者、依可及御大事、所令言上也、而當時國合戰之躰、曽不可靜謐候、其故者、兩大將以三ヶ國勢、差向方〻被責者、不可有子細候處、被寄一方之間、西方御敵等、任雅意令蜂起者也、所詮、被替當時之躰、被分所〻城墺仁勢者、不可有幾候、就中當城御上洛以後、於數輩御敵等中、既迄于十ヶ年楯籠候間、於于今者、失兵粮術計候間、近日苅取作毛、可致合戰之由、治定上者、討死之条勿論也、然則、國退治之段者、不及申、先當城合力事、急速被成下御教書、欲成軍忠勇、路次難儀之間、以切紙令言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

貞和二年九月四日　　紀伊權守行仲（二階堂）上　裏判

沙弥道惠上　裏判

進上　御奉行所

「此文書草稿トミヘ、文意通セサル多シ」

「伊作家二代宗久譜中ニ案文在巻本トアリ」

2223

「伊作宗久譜中」「貞和二年ニノセタリ」

「写在巻本」

（端裏書）
「かちへさへもん入道殿御方　かくけん」

いしゆゐんのすけ三郎（忠国）入道殿御かたきになり、いさくの

しやうかわきたに、二三日のほとに、うち入へきよしちゝやう候、御存ちのことく、このしやうふせいニ候へハ、なんきいてき候ぬと存候、御かうりよく候て、このしやうをかたくもち、りやうけの御ねんくをまたくして、きやうしんつかまつり候はゝ、おほやけわたくしニつけ候て、めてたく存候、このしやうを御かたきにとられ候てハ、かた〳〵の御大事にもなるへく候、このやうを、御こゝろへ候て、御ひろうあるへく候、恐々謹言、

（貞和二年）九月十日　　かくけん在判

かちへさへもん入道殿御方

2224

「在伊作家文書中」「伊作家二代宗久譜中案文在巻本トアリ」

（本文書ハ二三二〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

2225

「道鑑公御譜第三巻中」

「正文在郡山勘右衛門」

滿家郡山城事、取誘之、無猶暖（油断）之儀、可被致用心候也、仍執達如件、

貞和二年九月廿一日　　沙弥（貞久）御判

郡山弥五郎殿

2226

『長谷場氏文書』

契約申

右、依飫肥北郷山西弁濟使職事、申成院家御下文、可宛賜道慶之旨擧候上者、相互捨身命、致無二軍忠、就公私可奉見継候、此事によて、如此申一諾候うへハ、人いかやうに教訓申候とも、全以不可用候、但御敵靜謐之後者有限御年貢以下、無懈怠、鶴一殿方に可被進濟候、若此条僞申候者、

日本國中大小神祇冥道、殊當所十一所大明神御罰を各可蒙罷候、仍契約之狀如件、

貞和二年九月廿二日　　道阿（花押）

2227

「尊氏」（花押）

嶋つの左京しん（宗久）入道・おきの入道の子とも、いまゝてこらへてちうをいたす事、しんへうに候、おはりのくにハ（羽豆崎城）つかさきのしやうもおとされ候ぬ、ゑちうのふもんくら（普門）人もかう人ニまいり候ぬ、こなたさまハみなせいひつして候、猶〳〵ちうをいたすへし、又新田かしそくもいけとられ候てきられ候ぬ、いまハいよ〳〵ちからをそへて忠をいたすへし、きよかんあるへし、このあひたのしん

くこそ、かへす〳〵しんへうに候へ、

「貞和二年」潤九月十四日　（礼紙切封）

小野盛貞（花押）
沙弥道慶（花押）
源　正信（花押）
藤原實純（花押）
藤原久純（花押）【六郎久純カ】

2228

『正文長谷場氏蔵』

契約

一一乗院御領依面〻拜領仕候、可興行事、
一於拜領地、他人競望之時者、不廻時日、契約衆中奉寄合、捨身命、以自粮米可申見継候、此上者、互一諾輩知行分、不可有望之儀者也、
一同心知行分煩出來時者、面〻致合力、可全所務事、
右、如此申契約候上者、若和讒凶害仁出來時者、不可叙用之、直可散不審候、但此中違事候時者、衆中加評定、可依他分之儀者也、若此條偽申候者、
日本國中神祇冥道、殊　春日大明神御罰お各可罷蒙候、
仍契狀如件、

貞和貳年十月五日

沙弥了心（花押）
沙弥純阿（花押）

『野辺六郎左衛門久盛二男美作守カ孫八トモ』
小野盛政（花押）
『野辺孫七盛忠二男野五事カ』
小野政範（花押）

2229

野辺六郎左衛門久盛
- 盛忠　イ肥後守　野辺孫七
  - 愛壽丸　イ刑部少輔泰盛孫太郎トミュ
  - 政範　野五
  - 鶴壽丸
  - 女子五人
- 盛政　同孫八　イ美作守
- 盛秀　イ民部少輔

2230

『池端氏蔵』

うけとる一さいきやうのそうせんまいの事

合八合者

右、『佐多』さたのむらのうち、『池端殿』いけはたとの御わきまへ、女子二人あとのふん如件、

ちやうわ二ねん十月十六日

『切紙』ミねいちうけうすけよしはん

2231

『道鑑公御譜中』

薩摩國河邊郡大隅國本庄事

任去建武三年三月十七日御下文之旨、可被沙汰付嶋津上總入道〻鑒代之狀、依仰執達如件、

貞和二年十一月六日　　武藏守在判『高師直』

畠山修理亮殿（直顯）

「御譜ニハ「和イ」「貞永トアリ」

2232

「道鑑公御譜中」

「写在官庫」

薩摩國合戰事、度〻注進狀披見早、大隅助三郎入道〻忍・鮫嶋彦次郎入道蓮道以下輩、与同于凶徒云〻、不日可加對治、次澁谷一族以下、捨軍陣歸宅云〻、爲事實者、太不可然、重可致嚴蜜催促、尚以不承引者、就重注進、可收公所帶、此外一向不應催促族、子細同前、將又、谷山城所〻合戰、先懸輩等軍功事、同聞食畢、先以神妙、凡向後鎭西事、所被仰少輔太郎（色範氏）入道〻猷也、存其旨、急速可對治之狀如件、

貞和二年十一月廿一日　　御判（直義）

嶋津上總入道殿（貞久）

（今川了俊裏判カ）（花押）

2233

「正文在文庫伊作家文書」「伊作家二代宗久譜中正文在手鑑トアリ」

薩摩國合戰事、注進狀披見畢、大隅助三郎入道〻忍以下、与同于凶徒云〻、相談守護人、不日可對治之狀如件、

貞和二年十一月廿一日　　（直義）（花押）

嶋津左京進（宗久）入道殿

2234

『入來院氏文書』

讓与　所領等事

『重基ノ養子』平次五郎重勝所

一所　相模國澁谷庄内清太入道西在家壹宇

同藤意内立野伍町但、四至堺者見本證文、

一所　美作國河會郷内下森上山村

一所　筑前國佐波良郡内長尾并比伊郷内柏原兩村定円知行分

一所　筑前國長渕庄畠地

一所　薩摩國入來院内清色郷五分三北方

右、於所〻者、定円重代相傳所領也、然間、相副御下文并次第手継證文等、限永代重勝所讓与也、於有限御公事者、守先例、可致沙汰、仍讓狀如件、

貞和貳年十一月廿六日　　『入來院氏四代重基』沙弥定円（花押）

2235 『入來院氏文書』
（端書）「安文」

譲与　所領等事

所平次五郎重勝

一所相相模國吉田庄内澁谷曽司郷、同藤心屋敷田畠立野等

一所上野國大類田畠在家等

一所美作國河江（金）庄内中安駮尾田畠屋敷山野荒野等

一所薩摩國市比野屋敷田畠山野荒野、同大根田屋敷田畠山野荒野等

右、所々者、亡父靜円（公重）重代相傳之所領也、而惣領長徳丸死去之後者、任靜円之置文之旨、定円所令知行之處、舎弟次郎三郎入道定重不慮之外令押領間、属先御代関東右馬頭殿（御）□手、番申訖、

而去年（康永三）五月六日定重令死去之間、任靜円置文、定円所令知行也、仍任正慶二年潤二月十五日定円譲狀并此狀、重勝可令領知者也、至諸御公事者、任先例、可令勤仕、聊不可令違代々置文、仍譲狀如件、

貞和貳年十一月廿六日　　『入來院氏四代重基』沙弥定円在判

2236 『入來院氏文書』
（端書）「鎮西御事書案文」

鎮西事、々書如此、守彼狀、可致沙汰之狀如件、

貞和二年十二月七日　　（直義）御判

宮内少輔（一色範氏）殿

鎮西沙汰條々

一寺社事

守先例、可致興行沙汰焉、

一所務相論以下事

尋究子細、可令注進之、

次検断事、於地頭御家人等事者、同可注進之、至非職之輩者、可令尋成敗之、

次雑務事、同前、

一異賊防禦構以下事

任先規、可致計沙汰矣、

一國司領家年貢對捍地事（貞和二・十二・十三沙汰）

就貞永式目、有其沙汰、地頭以下領主不應裁許之日、雖改補所職、本所乃貢失墜之条、背理致欠、仍自今以後、及下知違背之期者、收公彼職、補新司之時、可分付前司未濟五分一相應之地於本所也、次後年々貢事、

無同時之裁断者、相論亦不可休之間、勘合毎年〻貢分限、彼是共限永代、分付下地本所之後、一向止地頭之所役、相互可全知行、但於今年以前分者、近年擾乱諸人窮困之間、以寛宥之儀、至所職者、不能改補、便補前後年貢、可去渡下地於本所之子細同然焉、若背此法、於割分之地、領主等致違乱者、任先例、可被收公彼職也矣、

次依他罪科、被召所領輩事、未進相積之由、雑掌經訴訟之刻、地頭等不慮被没收件所領者、新給人治定時、可分付下地之子細、相同初段焉、次得替地事、縱雖不宛賜替、有他所領者、本知行之年貢致沙汰之条、勿論也、何况宛給其替者不及豫儀、宜令弁償也矣、

次一旦領主事、或稱裁(許)計未定之地、或号析所并領地、領主依申子細、動施行猶豫之間、渉年月之後、本所年貢亦失墜云〻、太(不脱カ)可然、向後云未進、云現在分、可懸課當知行之仁也焉、

次非分押領輩事、仰其名字難成施行欤、領主治定之程、先仰専使、令検納有限年貢、可勘渡本所雑掌矣、

次武家領之神用并領家職所職等年貢事、不可違本所乃貢、仍子細同前焉、

一諸國狼籍條〻

攻(故、下同ジ)戰防戰事

縱雖有確論之宿意、經上訴、宜仰裁断之處、任雅意、及闘殺之条、雖遁其科、所詮、於攻戰者、雖懐本訴之道理、不可遁濫吹罪責、何况於無理之仁哉、自今以後堅可停止之、若尚違犯者、准本條、悉召上所領、可處遠流焉、

次与力人事、可召上所領、無所帯者、可處遠流之子細同前、至防戰者、爲非領主者、可爲攻戰同罪、若爲理運之仁者、隨事躰、可有其沙汰矣、

不帯補任裁判公検(験)、不待使節之遵行、無左右致乱入狼籍之条、造意之企、太以無道也、不可不誡、向後堅可停止此儀、若有違犯之族、云本人、云与力人、可收公所領三分一、無所帯、可處流刑也、縱雖不遣奉書、未及喧嘩、先馳向其場、追出彼輩、沙汰付本知行之後、可注進子細之旨、可仰守護人焉、

次使節遵行地事、本領新恩不可差別、嚴密可致其沙汰之旨趣同前矣、

苅田狼籍事

任先例、爲検断之沙汰、加嚴制、可注進子細、所犯治

定者、可分召所領五分一也、無所帯者、可處流刑焉、
次与力人事、子細同前矣、
号一揆衆致濫妨事
近年或押領他人之所領、對專使妨遵行、或爲散私宿意、
率黨類及合戰云々、造意之企、難遁重科、所詮、就守
護并使者注進、須處罪科、但隨事躰、可有輕重矣、
次使節難澁咎事、可分召所領五分一也矣、
山賊海賊事
糺明出入之在所、有領主同意儀者、於其所者、永可令
雖補(改カ)地頭職、至本所寺社領者、靜謐之程、可被補地頭
哉否、須經　奏聞焉、
一同守護人非法条々
大犯三ヶ条付、苅田狼籍、使節遵行、外、相綺所務以下、成地頭御
家人煩事、号公役對捍、稱凶徒与同、無左右令管領同
所領、与恥辱、及牢籠事、
得當知行人語、下地遵行難澁事、
或分取訴論人之所領、或押領國中闕所、構表裏沙汰事、
成縁者之契約、致無理方人事、
号請所、假名字他人、令知行本所寺社領事、
稱國司領家年貢譴納、号佛神用催促、放入使者於所々、
追捕民屋事、
号兵粮并借用、責取土民財産事、
誘取他人借書、令苛責負人事、
以自身所課、令分配一國之地頭御家人事、
依從人等狼籍、市店凌(遲)庭事、
構新関、号津析、取山手河手、成旅人煩事、
以前条々、非法張行之由、近年普風聞、雖爲一事、有
違犯之儀者、忽可改易守護職、若正員不存知、爲代官
結構之条、證跡分明者、則可召上彼所領、無所帯者、
可處遠流之刑矣、

2237

『兼重傳』

二年丁亥、北朝貞和三年、　正月六日、南方諸將率數百人入隆信
城、七日、　公賜比志嶋彦一範平書、令徵援兵以備其難、
二十日、南方兵進入谷山城、　公聞其將逼立塞於隣、賜
比志嶋族人書、令速來援　公師寡故也、五月、中村彦五
郎入道覺純或作覚澄、本姓矢上氏、領鹿児島郡内郡本中村等、因号中村、疑此彈正忠秀純属類也、中村・郡本・田上等、皆係霧島郡司庶族邑、後公領之、見文和三年五月一色入道下知状、拠此覚純為矢上高純庶族、從可知也、且其領郡本等、見比志島氏蔵書、蓋今唐湊等係其旧邑、書曰当世田七段疑此也、内應誘官軍、二十九日、官軍因襲取濱崎
城、遂遮敵路、六月三日、澁谷弥四郎重名來戍東福寺城、

五日、澁谷下總六郎太郎亦引兵來助東福寺城、六日、四國中國水兵竝進與　公軍戰、澁谷弥四郎及河西兵庫入道道現・市來崎六郎次郎等援　公軍却之、九日、又島津三郎兵衞等攻濱崎城、河西七郎義清・舍人彦三郎等被疵、遂復之、十七日、　公賜六郎次郎等書、賞其功也、（此云水兵、疑此兼重及中院法印等所領兵也、事見上正平元年二月、）

2238

『比志島氏文書』

新春御慶賀自他申籠候了、猶以幸甚珎重〻〻、不可有盡期候、抑自今日三日始迄于六日、日〻ニ合戰無障候、隨而昨日申剋南方凶徒等數百人打集谷山城候了、近日可攻御方城之旨相巧候、就其者、此間者太略御方勢歸宅之間、當陳無人數候、雖難儀候、時剋不廻、御越□（候カ）者喜入候、恐〻謹言、

『貞和三年』正月七日　　道鑒（花押）

比志嶋一族御中

比志嶋一族御中　　道鑒

2239

『仝』

自去四日凶徒等寄來當陣□合戰、仍昨日申剋南方凶徒等率數百人勢、打入隆信城訖、隨而敵到城可攻陣〻之由、自方〻告申之處、御方軍勢太略歸宅之間、既所及難儀候、不廻時剋、馳越可被致合戰、仍執達如件、

貞和三年正月七日　　沙弥（貞久）（花押）

比志嶋彦一（範平）殿

「此一通道鑑公御譜中ニ在リ」

2240

『比志島氏文書』

南方凶徒等今日酉剋率數百騎勢、打入谷山城訖、内通人□告申者、今明日之間、可取城於近所云〻、不廻時剋、馳寄可被致合戰、仍執達如件、

貞和三年正月廿日　　沙弥（貞久）（花押）

比志嶋一族御中

『此文書、道鑑公御譜中ニ在リ』

2241

『戴重久篤兼譜中』

貞和二年丙戌十一月二十一日、　幕府（疑是直義）、賜　公教書、使以募兵擊伊集院道忍・鮫島蓮道（彦次郎）等、〇三年丁亥、公得教書、屢檄兵不至、於是二月十三日、　公賜篤兼書

曰、嚮奉教書、雖詢徵兵、至於今日無有至者、宜速募兵來會、毋必踰月、

2242 「重久氏文書」

薩摩國凶徒誅伐事、任去年十一月廿一日御教書之旨、先度催促之處、于今遲參甚無謂、所詮、相催一族、今月中可被馳寄當陣、猶以過彼日限、於令不參者、任被仰下之旨、可注進所帯、將又可取寄陣〻之間、具足等事、注文一通（別紙在之）、急速致用意、可被持參之、仍執達如件、

貞和三年二月十三日　　沙弥（花押）（貞久）

重久孫八（篤兼）殿

2243 「仝」

四月、野邊孫七盛忠聞四國中國海賊艤三十餘艘、自目井浦（在飫肥南郷内）、入内之浦、（在肝付郡）、恐會賊兵、乃馳使報　公、於是二十七日、　公賜篤兼書、使速來會以追伐之、

野邊孫七盛忠以使者所馳申也、仍書狀如此、不廻時尅馳寄當陣、可被致合戰、仍執達如件、

貞和三□（五カ）月廿七日　　沙弥（花押）（『道鑑』）

□（重久孫八カ）殿

2244 「重久家蔵文書」

四國中國海賊等三十餘艘、自飫肥南郷内目井浦奔通肝付郡内之浦□（王）崎之間、定可相加凶徒欤、急速可致用意之由、

2245 「正文在西俣氏」

凶徒野心輩爲誅伐、令同心比志嶋彦太郎以下一族馳參、抽軍忠之条、尤神妙也、弥可被勵戰功之狀如件、

貞和三年二月一日　　沙弥（花押）（『道鑑』公）

比志嶋一族

西また弥平治との

2246 「御系図伊久一流」

伊久

上總介　大夫判官

貞和三年丁亥二月朔日誕生、

七代薩州太守上總介師久長子也、

2247 『入來院氏文書』

讓与　所領事

若王丸所

筑前國相良郡内下長尾水田貳町柒段同刑部次郎屋敷云〻、

右、所領者、依爲弘安合戰勲功、令相傳之間、養子若王丸所讓与也、至諸御公事者、任先例、可令勤仕之狀如件、

平重勝（花押）

尼顯心

沙弥定圓（重基）（花押）

貞和三年三月六日

2248

「御文庫中伊作家文書」

（本文書ハ二一七一号文書ト同文ニツキ省略ス、康永二年ノ誤リナルベシ）

康永六年（ニ）三月廿六日

「康永六年ハ貞和三年ニ当レリト、康永四年ハ貞和ト改元也」

2249

「伊作家宗久譜中」

「正文在手鑑」

このあひたしやうにこもりてしんく候らん事、かへす〳〵おとろきおほえて候、たひ〳〵申され候せいの事、三條殿（直義）へさいそく申候ほとに、いそきさた候ておほせらるへきよし御返事候、あひかまへていま一こらへこらへられ候へく候、東國もハやかすかのしうたれ候（春日顯国）て、せいひつして候、いまもそのへんハかりにて候へハ、猶〳〵せいの事、さいそくしてむけらるへく候、又三郎左衛門いとまをつよく申候へとも、たうしハことに人すくなく候うへ、しよし御よう人にて候ほとに、ふつとかなふましきよし申て候、猶もおしてくたりなんとし候ハ、、かたきにしゆんして、しやうより申さるゝ事も、きゝつくましきよしを申ふくめて候、そのやうを心え候て、それよりもよく〳〵おほせふくめられ候へく候、それより申さるゝ事も、三郎左衛門これに候て、はしりまハり候によりてこそさたもきうに候へハ、そなたのちからにて候、このやう心えられ候へく候、

『貞和三年歴』（康永三年）四月二日　（尊氏）（花押）

左京進（宗久）入道殿

2250

『池端文書』

『国衙』

うけとるこくかしやうさい物ならひにてうかく米の事

合正税物百六十六文

てうかく米二舛三合八夕

右、さたのむらのうち、いけはたとのゝ御ふん、女子二人分うけと

るところ如件、

貞和三年五月四日　　二郎判官末元判

2251

『田水町人友田氏蔵本』

『写在島津図書家来阿久根猪右衛門』

中村彦五郎入道覺純令与同凶徒、引込敵於濱崎城、打塞路次之上、四國中國海賊等依相加谷山凶徒、合戰及難儀之處ニ、最前馳寄被致合戰忠節之条、殊以神妙、且可令注進之狀如件、

貞和三年六月十七日　　道鑒（貞久）御判

市來崎六郎次郎殿

2252

『入來院臣寺尾氏蔵』

澁谷弥四郎重名申合戰（軍忠）之事

於貞和三年五月廿九日夜、薩州鹿兒島院御敵方（等）、忍取濱崎城之間、六月三日、最初馳越東福寺城、相伐（待）御方軍勢之處、同六日卯剋、熊野海賊以下數千人、海陸共寄來之（誤為無勢脱カ）間、捨身命防戰刻、凶徒等數輩□（令打取）追返了、此等子細、御祗候人澁谷孫七同時合戰之間、令存知者也、次同九日（脱アルベシ）散々合戰早、然早預御□（一見状為備後証恐々カ）言上如件、

承了□

（二三五五号文書ト比較校訂セリ）

2253

「和泉實忠譜中」

貞和三年丁亥、南朝正平二年、先是肝付八郎兼重・中村彈正忠秀純等據東福寺城及濱崎城、一名尾頸小城、竝在鹿兒島郡、以寇於　道鑑公、公以故使令弟島津師忠等、帥兵攻之遂陷兩城、為曆應四年四月事、廿六日拔東福寺城、廿八日拔浜崎城、使　世子齡岳公居東福寺城、而使中村彦五郎覺純等戍濱崎城、覺純本姓矢上、蓋高純別族居中村、因以易氏、時乞和降、故充戍衆、至是五月、叛　公竊内應谷山軍、時會熊野水軍來侵緣海、二十九日、與合其師夜襲取濱崎城、遮援軍途、六月三日、澁谷九郎重興・弥四郎重名各將兵來、援東福寺城、五日、澁谷下總六郎三郎・市來崎六郎次郎・河西兵庫入道道現及弟七郎義清伊勢司人等、亦續援城兵、六日、昧爽水陸數千人竝進攻東福寺、重興・重名及野本孫七野本或作渋谷、乃助城兵、殊死拒戰斬首數級、悉却之、因是九日、　公使忠氏將兵攻濱崎城、遂復取之、義清兄弟有戰功、原文載左、

2254

『水引宮内村武兵衛家蔵』

伊勢國河西兵庫入道道現申軍忠事

矢上彦五郎入道覺純、令与同凶徒、引入御敵於濱崎城、依打塞路次、及合戰難儀之間、去ル六月五日、澁谷下總六郎太郎手、打寄東福寺城致合力之處、同六日、率凶徒數千人、寄來東福寺城之間、致散々合戰抽軍忠畢、同九日、押寄濱崎城致合戰之刻、舍弟七郎義清被疵、（左右指矢目）中間彦三郎（左膝節矢目）如此合戰抽軍忠、逐落濱崎城之条、當御手人々并嶋津下野三郎兵衞同所合戰之間、被存知者也、然早預御一見狀、爲備後代亀鏡、恐々言上如件、

貞和三年七月四日　　承了判

2255

『入來院氏文書』

澁谷九郎重興申軍忠事

於貞和三年五月廿九日夜、薩州鹿兒島院御敵等、忍取濱崎城之間、六月三日、最初馳越東福寺、（城脱カ）相待御方軍勢之處、同六日卯刻、熊野海賊以下數千人、海陸共寄來之間、雖爲無勢、捨身命防戰刻、凶徒等數輩令打取追返了、仍郎徒藤四郎（餘脱カ）額切疵被疵早、此等子細、御祗人野本孫七（同カ）同時合戰之間、令存知者也、次日九日、相向紫原後巻、一族相共及散々合戰早、然早預御一見狀、爲備後證、恐々言上如件、

承了（花押）

2256

『長谷場氏文書』（端裏書）「三条殿御教書」

春日兼一乘院領、嶋津庄日向方飫肥北郷收納使并弁濟使職事、宛賜鶴一丸之處、水間榮證法眼・同子息藏人太夫守政、名字於号白河源藏人、稱武家御教書、被成畠山修理亮直顯奉書之由、注進之間、相尋飯尾左衞門太夫・布施彈正忠之處、曾無其儀由、令申上者、爲謀書旨、渡邊弁狀分明也、然早致所務、可備進御年貢、猶以不叙用者、与力人等交名急可注進、就其武家可訴申由、所御氣色候也、仍執達如件、

貞和三年八月十八日　　永成奉

鶴一丸代殿

2257

『長谷場氏文書』

春日社兼當門跡領嶋津庄日向方飫肥北郷收納使同弁濟使鶴一丸代久幸申、榮證法眼并子息藏人太夫忠政等、所務

押領事、琳乗法眼状副重申状、如此、子細見状候欤之由、一乗院前大僧正御房御消息所也、恐々謹言、

『年間未考』（貞和二年カ）八月六日　　法印覺快

謹上　上杉伊豆守（重能）殿

2258　『仝』

嶋津庄日向方飫肥北郷收納使并弁済使代官職事、申付之處、忠政以下悪黨等押領狼籍地下之由、其聞候之条、以外事候、所詮、當郷者、春日御供嚴重料足地候上者、忽致所務、被收納年貢等、可有進済候也、仍執達如件、

『年間未考此候考』（貞和二年カ）八月七日　　琳乗

鶴一殿

2259　「權執印文書」

出仕不仕事、度々被仰下候之處、于今不出之条、何様事候哉之由、今年七月六日重御教書如此者、可被申左右候、仍執達如件、

貞和三年八月七日　　▨進（ヨメス）（花押）

御前検校法橋（永賢）御房

2260　「京進請文案」

去月六日御教書、今月七日御施行、謹拜見仕候早、抑出仕事、就于治病更發仕候、長居之段、難治候之上、近年疲勞之間、師弟相並参候之条、不合期仕候次第、度々雖令言上候、爲御代始之由、被仰下候之上者、可令参勤候、於愁訴事者、追可令言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

貞和三年八月十八日　　御前検校法橋永賢

2261　貞和三年丁亥

九月十一日、伊作三郎左衛門尉久氏尊氏に属し天王寺の戦に死す、

2262　「伊作家譜中久氏親忠弟譜中」

尊氏將軍家近習之幸臣也、是以有所賜于老父宗久法師之數通簡牘、已記于宗久之譜中、故略于此矣、

尊氏將軍家欲誅伐於楠正行、發軍勢、久氏亦属將軍方、九月九日、將進發、于時尊氏卿於東寺賜扇子於久氏、珍戴再三而後、披見之則施菊花之畫圖、且有自書之詠歌曰、九ツノ國ヨリ御代ハ治リテ目出度コトヲ白菊ノ花ト云々、以此扇子贈薩摩州、所獻舍兄下野守忠親也、而後

同月十一日、久氏者於天王寺遂戰死畢、

2263

「正文」

伊作三郎左衛門尉久氏、高氏將軍之御代在京、攝津國天王寺合戰之時、京方之負戰之由承ニ給リ、可ニ罷ニ下リ御ニ暇、雖ニ被レ申候一、御暇不レ出間、久氏押下向ノ時、忝高氏東寺迄御成候、御留雖レ候、無ニ承引一罷下時、御扇菊畫一書、如レ斯之一首之歌曰、九ツノ國ヨリ御代ハ治リテ目出度キ叟ハ白菊ノ花、トアソハシテ、此御扇給テ、久氏翌日ニ打死、其無レ藏云々、已後。ニ此扇ヲ舍兄。野下守方下(島津親忠)給也、于時應永廿五年中秋廿四日、早天ヨリ籠蒙、且ハ爲レ家、又ハ一家之氏族源藤之移リ、皆一末ノ法ノ之露、一河之流ト爲レ知、日ニ影西傾、白日雲遮ラル、齡ワ槿華ノ如レ向レ日、書レ之筆跡外見憚多云々、嗚呼面皮厚三寸、愚僧其姓ハ、當家前大隅守忠長(久長)末跡也、遙ニ經ニ數日、自ニ鎭西一東伊勢難波地ヨシアシトダニ云ガタキ後身也、古暫其身置ニ西國一、恨留レ都、毎日儀千度移袖行去、源康頼俊勸(寛)僧都ノ跡ヲ爲ニ一見一、又ハ父母七世舊跡ヲ尋出家ト云、又ハ行脚ト云、寄レ立一夏伊作ニ居テ、彼ノ系圖ノ古人ヲ吊ト云々、定テ此故ニ暫ク迷三ノ道ヲハ出、六根六識ニ迷ワサレ、又眼耳鼻舌身意ニ縛セラレシ叟ヲワキ、一々唯佛与佛悟ヲ皆得給ト云々、仍一句、空横寒月焼不レ焼、

天文十九年庚戌八月廿八日書之　伊作後胤信州書

「右書、去年代者遠矣、然而專言久氏忠功之異于他、故記于此矣」

2264

「見于南山巡狩録追加」

(端裏書)

「いさくとのへまいる」

□(御教)書到来、正文者、〈これニ止候了」

南方凶徒對治事、所差遣山名伊豆前司時氏也、早可發向之狀如件、

貞和三年九月廿八日　『尊氏欠』(直義)御判

『師久公カ』嶋津三郎左衛門尉殿

「此文書、写在嶋津家文庫伊作文書中、師久公御譜中ニアリ、写在巻本トカタ書アリ」

2265

『正文在島津安藝守久雄』「御譜ニハ正文トアリテ名前ナシ」

薩摩國凶徒誅伐事、差遣子息可合力之旨、仰一色少輔(範氏)太郎入道之處、申子細、于今不事行云々、重猶可相談之、且亦如元可相催日向國勢之由、被仰付畠山修理亮(直顕)畢、彼

『中村彦五郎入道覚鈍云々、貞和三六月十七日文書』
仁相共弥可致忠節也、爰今月五日、楠木帯刀(正行)・同弟次郎・和田新發(曾脱カ)・同舎弟新兵衛尉以下凶徒數百人、於河州佐良々北四条、所討留也、此上吉野退治不可有子細之狀如件、

貞和四年正月十二日　「足利左兵衛督」『直義御判』(花押)

嶋津上総入道(貞久)殿

「此文書、道鑑公御譜中ニアリ」

「右ノ正文、旧御番所御文書二番箱中歴代亀鑑之中ニアリ」

2266

三年戊子(北朝貞和四年)、正月、和田・楠與高師直戰於四條畷、河内地楠正行・正時等死之云、

2267

「正文在文庫伊作家文書」「伊作宗久譜中正文在手鑑トアリ」

薩摩國凶徒事、近日殊令蜂起云々、早可被致軍忠、仍執達如件、

貞和四年二月九日　「一色少輔太郎入道道猷判」(範氏)

嶋津左京進(宗久)入道殿　沙弥(花押)

2268

『比志島氏文書』

院内比志島名を□ようせうの間、上原殿ならひに義範後家とのゝ兩人の御はからいとして、比志嶋名水田山野三分いち、貞範にわけあたゑ給候、建武三年御狀のおもむきにまかせて知行つかまつりところ也、彦一(範平)殿とあいたかひに、いちゝ同心の思をもて、しよりやうと申、同心と申、公私いこんはらくろあるましく候、もしこの条いつはり申候ハヽ、あおきたてまつり候　日本國佛神の御はちを、貞範か身にまかりかうふるへく候、よて子々孫々までも、さおいあるへからさるけいやく狀如件、

貞和二年二月卅日　比志島(貞範)(花押)

2269

「載于重久篤兼譜」

貞和四年戊子六月、楡井四郎頼仲據志布志城、在救院、畠山修理亮直顯帥兵向之、於是　公亦將以十八日、發向隅州、乃□日、　公賜篤兼書、使速來會于守護所、

2270

「重久氏文書」

□黒楡井四郎頼仲、楯籠日向國救仁院内志布志城之間、畠山□修理亮罷向之由、□日所被馳申也、仍□被合若□致遅□來十八日道鑒可發向隅州、□以前可于馳寄守護所□、仍執達如件、

貞和四年六月□　　沙弥(貞久)(花押)

重久孫八(篤兼)殿

2271

『写栗原又案所贈』

御譲位之御用途

女房装束料

合七拾三貫九百八十七文事

甲斐國波賀利本庄分

四拾六貫四百八十七文　武田兵庫助請

同國波賀利新庄分之内

久保田三十五町八段分

鶴牧田貳拾壹町五段分

貳拾七貫五百文　島津大夫判官請

右、九月十日以前、早々運上可有之由、依仰執達如件、

貞和四年七月十一日　　武蔵守(師直也)奉之

『九十七代　光明院様御譲位、貞和四年十月廿七日ナリ』

2272

『入來院氏文書』

薩摩國凶徒事、可寄來池邊城之由、依有其聞、可合力之旨、先度被仰處、不事行云々、何様事哉、急速馳向、可被對治、仍執達如件、

貞和四年八月十七日　　宮内少輔(一色直氏)(花押)

澁谷九郎(重興)殿

2273

「写在文庫」

「御教書案」(端裏書)

薩摩國合戰事、条々注進狀之趣披見畢、楡井四郎頼仲已下与同之凶徒云々、不日可加退治、次於平山左近將監者、相催庶子可合力之由、所成下御教書也、其外一向不應催促之輩、爲事實者、太不可然、所詮、云交名、云所領分限、就注進可處罪科、將又、度々軍忠同被聞食了、殊神妙、向後弥可致嚴蜜沙汰之狀如件、

貞和四年八月廿九日　　御判(直義)

嶋津上總(貞久)入道殿

「道鑑公御譜中ニモアリ」

2274

「正文在文庫伊作家文書」「伊作宗久譜中正文在手鏡トアリ」

薩摩國爲凶徒退治、被差下之處、有上洛之聞、爲事實者、太不可然、所詮、相談守護人、可致嚴蜜沙汰之狀如件、

貞和四年八月廿九日　　(直義)(花押)

嶋津左京(宗久)進入道殿

2275

『入來院氏文書』

薩摩國凶徒□(已下近日)殊蜂起云々、且嚴蜜致軍忠、且可有池邊城之合力也、仍執達如件、

貞和四年二月九日　　沙弥(一色範氏)(花押)

澁谷九郎(重興)殿

(旧記編者、二月ヲ十一月ト誤写、採録順ヲ誤テリ)

2276

「写在西俣氏」

薩摩國合戰事、今年八月廿九日御教書如此、爲楡井四郎賴仲退治可發向、來廿八日以前、可被馳寄自麑嶋、仍執達如件、

貞和四年十一月十六日　　「道鑑公」沙弥(花押)

比志嶋孫太郎殿

西俣弥平三殿

河田助太郎殿

2277

「載重久篤兼譜」

四年八月二十九日、幕府賜　公教書、使以幕兵擊楡井賴仲、十一月、　公將以二十八日發向隅州、乃十一日、賜篤兼及野田又太郎等書、使各率兵來會之、十六日、　公復賜篤兼書、使率族人先來于大隅守護所曰、勿敢後期、

2278

「重久氏文書」

薩摩國合戰事、今年八月廿九日御教書如此、爲楡井四郎賴仲退治可發向、來廿八日以前、相催一族、可被馳寄于大隅守護所、仍執達如件、

貞和四年十一月十六日　　沙弥(貞久)(花押)

重久孫八(篤兼)殿

2279

『比志島氏文書』

元弘以後新恩地以下年貢事、今年八月五日御奉書去十二日到來、御奉書并注文等如此、早任被仰下之旨、於滿家院内名主分御年貢者、不日可被進濟之、所詮、來月十日以前、可被申是非散狀、若令違期者、可申注進、仍執達如件、

貞和四年十一月廿一日　　「道鑑公」沙弥(花押)

滿家院一族御中

「此文書、道鑑公御譜中ニアリ」

2280

『比志島氏文書』

薩摩國合戰事、任御教書之旨、度〻催促之處、于今不參、何様事哉、所詮、來月廿日以前、相催一族、可被馳寄于鹿兒嶋、仍執達如件、

貞和五年正月廿六日　　沙弥（貞久）（花押）

比志島彦一（範平）殿

「道鑑公御譜中ニ在リ」

2281

『正文在權執印』

（端裏書）「□殿家御教書　貞和五六月廿三日到来　御使元俊（左衛門尉尚義）」

當宮今年七月安居僧供頭□（可カ）有御勤仕也、且社家之大營、且爲遐迩之御役之間、御坊領平均被宛課者也、仍當庄分參拾伍貫文、隨御使筑後左衛門尉尚義所勘、來六月十五日以前令京着之様、可致其沙汰也、兼又御使在庄之間、尉□（厨雑カ）事、上洛衣裳草手等殊存別忠、可沙汰与之旨、依領家之仰、執達如件、

貞和五年二月　日　　沙弥道義奉

新田宮所司神官沙汰人百姓中

2282

「藤野氏文書」

去年女房裝束新足拾貫文内未進分貳貫文事、爲下郡藤五郎・伴吉四郎給物、可被致沙汰由候也、仍執達如件、

貞和五年四月十一日　　時朝（花押）

「あいはら」

「栗原下総守」

嶋津大夫判官殿跡

「師久公御譜中正文有之トアリ」

2283

『入來院氏文書』

一所ひせんの國佐加下御領よしまつのありしけ内

田地貳町并屋敷一所（ときりかそのゝかへり）

同國さかの下御領中（よたかり）一丁廿六つほ

かのへおほたかり八反十二つほ等事

右、所領等者、祖父宗眞（重棟）并母堂尼宗女か永代相傳之所領也、而重勝か讓得之間、仍虎一（重継）丸ゆつりあたふところ也、爲後日讓狀如件、

貞和五閏六月廿三日　　平重勝在判

『重勝ハ四代重基ノ嗣子、実同氏孫五郎重知ノ嫡子也』

2284

讓与

所子息虎一丸(重継)

一所薩摩國入來院内清色南方、四至堺可任本證文者也、

一所美作國河江(合)庄内本郷下村西方

一所相模國澁谷曽司郷内藤意田在家立野参町、屋敷付荒野

一所筑前國比伊郷修理免禪俊比丘尼跡

右、所領等者、母堂顯心重代相傳所領也、而重勝所讓得也、仍子息虎一丸ニ、限永代、相副手継證文御下文、讓与者也、巨細之旨見置文、不可有違乱妨、仍爲後證讓狀如件、

貞和五壬六月廿三日　　平重勝在判

2285

讓与

所子息松差丸

一所薩摩國入來院内清色南方、四至堺任本證文者也、

一所美作國河繪(合)庄内本郷下村西方

一所相模國曽司郷内藤意田畠在家立野参町、屋敷付荒野

一所筑前國比伊郷修理免禪俊比丘尼跡

右、所領等者、重成重代相傳所領也、而子息松差丸ニ、次第調渡(度)相副手継證文御下文、限永代、讓与所也、巨細之旨見置文、有違乱妨時者、任本證文者也、仍爲後證讓狀如件、

貞治七　八月六日　　刑部少輔重成在判

2286

讓与　所子息松差丸

一所薩摩國入來院内市比野名主職

一所同入來院内清色南方内本村北方

一所肥前國佐嘉下御領よしまつのありしけの内田地二町

并屋敷壹所(ときりかそのゝかハり)

同國佐嘉下御領内よたかり壹町廿六つほ

かのへおほたかり八反十二つほ等事

右、所領等ハ、重成重代相傳所領也、而子息松差丸ニ、次第調渡(度)相副手継證文御下文、限永代、所讓与也、巨細之旨見置文、有違乱妨時者、可知行本證文者也、任仍爲後證讓狀如件、

貞治七　八月六日　　刑部少輔重成在判

2287

『入來院氏文書』

（本文書ハ紙継目ノ順序ヲ謬ル、イマ「入来文書」ニ従ヒ訂正ヲ加フ）

置文條々

一子息虎松丸（重門）・舎弟虎一丸（重継）両人譲与所領事、
四至堺見本證文矣、
一諸御公事、任先例、そのさたをいたすへし云々、
一定円（重基）・顯心のおきふミにまかせて、そのむねをそんちすへし、次庶子等事、北方ニおきてハ、虎松かはからひたるへし、南方ニおきてハ、虎一かはからひたるへし矣、
一虎松無子孫者、虎一仁つくへし、虎一無子孫者、可持虎松云々、女子仁おいてハ、壹町壹箇所壹期分もつへし、兩人分同前、
一於養子者、少分もゆつるへからす、
一雖有帯重勝譲状族、惣領并二郎北南於面々ゆつりあたふるもの也、於此内有對論族者、重勝跡於不可知行云々、
右、於二人跡者、守器用仁一人仁ゆつるへし、其外者一期分たるへし、至子々孫々、守此旨、可令知行、若於背此旨輩者、重勝於不可知行（『跡ノ字脱ヵ本マヽ』）、仍置文狀如件、
貞和五年閏六月廿三日　　平重勝（花押）

2288
『入來院氏文書』

譲与
所　子息虎松丸（『入來院氏六代重門幼名』）
一所　薩摩國入來院内清色北方、四至堺可任本譲狀、
一所　筑前國柏原水田屋敷
一所　筑後國永渕屋敷
同國みな木の屋敷
一所　相模國澁谷曽司郷内ふちこゝろの屋敷立野等事
右、於所領等者、親父定圓（重基）重代さうてんの所領也、而重勝ゆつりうるとこ（ママ）ろなり、仍子息虎松丸仁ゑいたいをかきりて、相副定円・重知手継證文等、ゆつりあたふる者也、守此狀、可令知行、仍譲狀如件、
貞和五年閏六月廿三日　　平重勝（花押）

2289
『入來院氏文書』

譲与
所　子息虎松丸（重門）
一所　美作國河繪（会）庄内下森上山大足
此内一期分所僧二人跡靜重後家分金子村
一所　薩摩國入來院内一野・河床等事
右、任親父重知譲狀、舎弟九郎重興与子息虎松丸半分津

〻可令知行、而於定圓・重知跡闕所者、一向虎松丸可知行、仍巨細見置文、爲後證讓狀如件、

貞和五年閏六月廿三日　　平重勝(花押)

一所　入來院内市比野地頭職

一所　入來院内倉野村

一所　同九重村　一所　入來院内柏嶋四分壹

重勝(花押)

2290

「越前島津氏七代忠兼譜中」

(尊氏)
(花押)

下　嶋津周防三郎左衛門尉忠兼

可令早領知播磨國布施郷地頭職岩□四郎左衛門尉跡事

右以人、所宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如件、

貞和五年七月二日

2291

「仝上」

來十二日、於高倉殿可有弓場始、早爲射手、可被參勤之狀、依仰執達如件、

貞和五年八月八日　　(上杉朝房)左馬助(花押)

嶋津周防三(忠兼)郎左衛門尉殿

2292

「權執印文書」

奉寄進

新田八幡御寶前

薩摩國高城郡内田地五段久留原事

右、當社者、慈悲万行之名構、朝家無雙之靈神也、然間以彼田地、限永代、令寄附當宮處也、仰願者心中懇祈、身上愁腸、垂哀憐(垂カ)乘加被給、殊別爲金輪聖主寶作(祚カ)延長、國土泰平諸家豊饒也、仍奉寄狀如件、

貞和五季八月十二日　　平重躬(花押)

2293

「元久公御譜中」

嚴親氏久公追老年歎曰、和泉右衛兵衛尉忠賴諸道武勇不隱天下器量人也、貞和五年己丑八月、高師直・師泰專奢侈、亂主從之禮、下圍御所之時、與伯父(叔トナリ)新納四郎左衛門尉時久俱超築地、入御所中、致忠節施名譽、忘其忠貞勲勞、太守貞久公及令弟離數輩之伯父及親戚、屬西征將軍宮方、居于豊後卒于當國、其子能登守氏義亦居其地、已死去矣、後來之子孫終其身於佗邦、非當家瑕瑾乎、庶幾

元久招寄渠於當國、加于一門之列可乎、由是元久徴又四郎久親豊後、令渠居求仁院志布志、而畀百町領知於求仁郷深川村者也、

2294

「新納氏元祖時久譜中」

新納院没落之後、在薩摩州高江、其後賜日州救仁院移居于此、是亦先是執事高武藏守師直兄弟専奢侈恣國政、是以　尊氏卿之令弟左兵衛督直義（号錦小路三条殿）密欲誅伐師直兄弟之陰謀已露顕、由是貞和五年己丑八月十二夜、師直兄弟却催大軍、進欲圍三條殿者甚急也、　尊氏卿招直義於近衛東洞院之御所、欲決安否於一所、師直兄弟亂君臣之禮義、専血氣之小勇、不顧後來之嘲哢、引率雲霞之軍衆、圍御所之四面、時久属直義之旗下、雖所以其夜候三條殿之有勇士衆列、直義潜不知入御所之籌策、各不得已、而加外圍之軍中、雖然與甥之和泉右衛門兵衛尉忠頼倶、主忠信廻奇謀、通意於御所中、自負果器竊超築地、以進獻之、上自　將軍家兄弟、下至近習伺候之男女、感其深情無襟袖之不霑云々、由是所以賜夫地也、

2295

「和泉氏二代忠直譜中」

忠直

初忠頼　又八郎右衛門兵衛尉

將軍家尊氏卿之舎弟左兵衛督直義、（号錦小路三条殿也）欲誅戮執事高武藏守師直、此事既露顕、故却而師直貞和五年己丑八月十二夜、率軍衆欲圍於三條殿者太急也、　尊氏卿謂師直・師泰、専過分之奢侈、亂主從之禮義、因茲召直義於近衛東洞院御所、欲決安否於兄弟一所、師直兄弟不慮是非、引率雲霞之軍勢、所以圍於御所之四面者、未知其幾重也、丁此時、叔父四郎左衛門尉時久（新納元祖）、與忠頼倶從　上總介入道道鑒、有外圍軍中、更作行器盛饗飯、與兵器倶負提、而超越築地、入于御所中、令進獻於行器畢、其深情強勇異國本朝無可比類者、自　將軍家至近習伺候之上女等、無襟袖之不霑者也、

2296

「載于南山巡狩録追加」

（本文書ハ二二九一号文書ト同文ニツキ省略ス）

2297

『兼重傳』

正平四年己丑（北朝貞和五年）、　八月、　公遣石井中務丞帥兵來下大隅、立塞以伐我黨、十三日、（或為十二日、未知孰是）、兼重將兵往圍石井

於其塞、中務兵寡力困、乃告急於　公、　公率偏師、往爲後援、乃十八日、賜比志島範平書、令率其族、徑發從之曰、毋必遷時、

2298

『比志島相馬藏本』

去十□(三)日、石井中務丞寄下大隅取向城候之處、兼重(肝付)以下凶徒等、取卷彼城、及難儀候之由、馳申候之間、可致後卷候、惣軍勢者、若遲々もあるへく候間、以手勢可致後卷候、即時ニ被馳寄候者、就公私悦入候、御一族達にも、同申候、相構〳〵、即時被馳寄候者、殊悦入候、恐々謹言、

「貞和五」八月十八日　　道鑒(貞久)(花押)

比志嶋彦一(範平)殿

2299

「伊集院忠國譜中」

「正文在清水衆野田主馬」

嶋津長門入道々忍雖令合躰、彼道忍依属凶徒、被馳参御方之條、尤以神妙、殊可有忠賞、弥可被抽貞節之狀如件、

正平四年九月廿日　　(花押)

野田左衞門次郎殿

2300

『正文在島津安藝守久雄』

兵衞佐(直冬)殿被落下九州之由、其聞候、就之自　將軍(尊氏)家被下御自筆御書候、案文進之候、若被餘手事候者、任法可有計御沙汰候、且自関東近日御上洛之間、重可被仰候也、恐々謹言、

「貞和五年也」九月廿八日　　「高ノ」武藏守師直(花押)

謹上　嶋津上總入道(道鑒公)殿

『道鑒公御譜ニハ、四年ノ場ニ載セタリ』

2301

『道鑒公御譜中正文在官庫』

兵衞佐(直冬)殿事、今年十月十一日將軍(尊氏)家御教書如此、早速可馳参之旨、可被相觸大隅薩摩兩國地頭御家人等、仍執達如件、

「按、此年四月十一日右兵衞佐直冬、為西国探題赴備前」貞和五年十一月十四日　　「一色直氏カ」宮内少輔(花押)

嶋津上總入道(貞久)殿

「右ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中歴代亀鑑ノ中ニ在リ」

2302

『高尾野士出水氏文書』

爲奉息兩殿(尊氏・直義)御意、所打立也、急速馳参、可致忠節之狀如件、

貞和五年十一月十九日　　御判

出水三郎入道殿

2303

爲奉息兩殿御意、所打立也、急速馳参、可致忠節之狀如件、

貞和五年十二月廿四日　　御判

杉三郎入道殿

『裏判』
（花押）

2304

『藤野本四拾四通之一』

九月廿八日御書、今月廿一日到來、謹拜見候訖、任被仰下候之旨、可致其沙汰候、委細令申入御使候、恐々謹言、

『貞和五年ナルベシ、同年九月廿八日、高武蔵守師直ヨリ道鑑公江被進候御書』

十一月廿三日　　沙弥道鑒

「此文書、道鑑公御譜中ニハ四年ノ場ニ載セタリ」
前ニ載ス、合セ見ベシ

2305

「右ノ文書裏ニ左ノ通御譜ニ在リ」

被成下牛屎一族御書事、先規無其例候之處、今始一烈御沙汰、失面目候、其子細面拜之時委申候了、可預御披露候、恐々謹言、

十一月廿二日　　沙弥道鑒

謹上　廣津藤三郎殿

2306

「野邊氏文書」

（尊氏）
（花押）

武藏國榛澤郡野邊郷行貞爲□地頭職并日向國櫛間院地頭職事等者、以子息愛壽丸爲惣領、讓与早、委細之旨彼讓狀并置文別紙在之、次恩賞事、建武以來軍忠抜群之間、爲津戸出羽入道奉行、被經御沙汰、已被渡于所付方乎、亦彼落居以後、重軍忠猶異他、仍度々御教書御一見狀以下軍忠支證讓狀等、不残一通、所副渡也、早被申沙汰、於拜領之地者、爲惣領之上者、同愛壽丸可令知行、更不可有他妨、仍爲後日讓狀如件、

貞和五年十二月八日　　小野盛忠（花押）

2307

貞和五年九月、中國探題兵衛佐直冬來奔九州、亦應南朝、十二月二十七日、尊氏賜島津左京進宗久入道惠書、使誅伐之曰、陰謀發覺、宜赴其所速以戮之、

2308

『載写本』

「正文在文庫伊作家文書」「伊作宗久譜中正文在手鏡トアリ」

兵衛佐直冬事、隠謀既露顯了、早令發向彼在所、可誅伐之狀如件、

貞和五年十二月廿七日　『尊氏公』（花押）

嶋津大隅左京進（伊作宗久）入道殿

2309

『大口郷小苗代薬師如來文書』

大隅國菱刈院入山村薬師田八町貳反、無公役之事、

貞和六年正月七日　「直義」（花押）

不代相傳云々、其上者可爲公役候、仍如件、

入山五郎三郎殿江

2310

『兼重傳』

正平五年庚寅、北朝貞和六年、二月改元觀應、直冬之至九州也、兼重乃擧族應之、如畠山直顯亦附直冬連和我黨、兼重將復以振兵威、未幾病卒於觀應・文和間、注略ス、

2311

「道鑑公御譜中」

『正文在之』

去十六日入洛候了、仍師直以下掛丹波路没落之間、自同十九日馳向當國木崎候、此等之次第、定被聞食候欤、早々御上洛候者、殊可爲目出候、兼又、嶋津上（貞久）總入道所領讃州櫛無保と申候所を、御手人中令管領候之由、歎申候、無相違之様、計御沙汰候者、悦入候、上（貞久）總禪門屬兵衛佐（直冬）殿候之旨、承及候、隨而子息三郎馳（師久）參御方候了、年來申承候子細候之間、如此令申候、委細之旨、彼代官可令申候欤、恐々謹言、

『観応二年欤』　正月廿二日　『細川讃岐守殿親父』（石塔頼房）散位頼房（花押）

謹上　陸奥守（元久）殿

2312

『長谷場氏文書』

讓与　兵庫允久純所

早可令領知薩摩國鹿兒嶋郡内田薗等事

在水田壹町内

坂本名長谷場伍段　西七杖井尻加藤九郎入道作ヨリ山下限焉

甘子木村内比牟田伍段矣、

在長谷場薗貳ヶ所内山口谷下溝ヨリ西限

右、於水田薗者、以矢上五郎時證・阿妙・阿實讓狀、純阿重代相傳所領也、而久純爲次男之間、相副阿妙狀、所讓与也、然早全知行、兄弟成水魚之思、地頭米藍佃公方役、隨分限、可令勤仕、仍爲永代相續、以自筆讓狀如件、

貞和六年二月十五日　沙弥純阿（花押）

2313

『仝』

定　置文条々

一國衙領家御年貢任御下知之旨、隨水田分限、寄合兄弟可弁償事、

一地頭米藍佃毎年不闕可致其弁事、

一公方所役無懈怠可勤仕事、

右、守此旨、兄弟相互成水魚之思、迄于子々孫々、不可有相違、若雖爲段歩、於沽却他人者、此家門中可知行也、至背此旨仁者、不可有純阿子孫、仍置文之狀如件、

貞和六年二月十五日　　純阿（花押）

2314

『高岡士河上氏文書』

爲奉息兩殿御意、所打立也、急速馳参、可致忠節之狀如件、

貞和六年二月十八日　　【尊氏将軍之長庶子】（花押）

河上平次郎殿（家忠）　　【西国之探題兵衛佐直冬朝臣】

2315

「載重久篤兼譜」

六年庚寅（二月改元觀應）、四月、　公聞賴仲・兼重等寇于大隅、乃十一日、賜篤兼書、使速徵兵來會伐之、

2316

「重久文書」

凶徒楡井四郎賴仲・肝付八郎兼重等、可寄來大隅國之由、治定之旨、自方々所告申也、致用意、如然之時者、不廻時剋、馳寄彼所、可被致合戰、仍執達如件、

貞和六　四月十一日　　□（沙）弥（貞久）（花押）

重久孫□（八殿）

2317

「正文在西俣氏」

大隅國野心輩事、爲誅伐所打立候也、急速馳参、可被抽軍忠之狀、仍執達如件、

貞和六年卯月十六日　　修理亮（花押）（「畠山直顯ノコトヲ也」）

滿家西俣弥平三殿

2318

「市來崎文書」

馳参御方可致軍忠、有忠功者、早可有恩賞者、征西大將軍宮御氣色如此、仍狀如件、

正平五年四月廿五日　　勘解由次官（花押）

山門彦七郎殿

2319

「市來崎氏文書」

薩摩國山門院東方高小野里内、小長田五段卅、并小山田八段卅事、祖父にて候道惠の手より、市來崎彦七郎殿方に、彼田地を永代御相傳之由承候了、仍爲後證狀如件、

貞和六年四月廿九日　　孫二郎（花押）

2320

『比志島氏文書』

敵等上山之城を取候ハんとて、去夜忍て大勢谷峯城へ押集て候、かようさりとるへきよし、方々より告申候之間、此城とられ候て後ハ、一期浮沈たるへくと存候、只今辰時自身上山ニ馳向候、被相催一族候て、不替時被馳越候者、悦入候、尚々此城とられ候てハ、合戰の前途を可失候間、馳向候、相構急々可有御越候、又孫太郎（貞範）殿方へ申候、即時被馳越候者、悦入候、恐々謹言、

五月廿三日　　道鑒（花押）

比志嶋彦一（範平）殿

2321

「道鑑公御譜中」

「正文從弥寝右近重永出」

嶋津庄大隅方寄郡田數七百十五町八段三丈内

一道鑒當知行分

下大隅郡　九十五町九段

大祢寝院　四十町五段四丈

鹿屋院　八十五町九段

串良院　九十町三段二丈

西俣村　廿四町六段二丈

曽小川村　十二町六段四丈

以上六箇所田數三百四十九町九段三丈

一寺社御寄附分　但道鑒拜領九ヶ所之内

横河院　三十九町五段二丈　安楽寺天満宮御寄附　建武三年二月日

百引村　十三町四丈　博多聖福寺御寄附　同年同月日

小原別符　二十三町三段三丈　當国大智寺々院興行析所　貞和二年三月日

以上三箇所田數七十八町九丈

一同寄郡内他人拜領分

肝付郡　百卅町二段三丈　一色入道殿拜領　貞和二年五月日

菱苅院　百卅八町一丈　當郡名主等拜領之　建武三年五月云々　本ノ儘

筒羽野村　四十八町五段一丈　島津大隅式部小三郎義久　拜領建武二年二月日

以上三箇所田數　二百六十八丁二反二丈　三百十六町七段三丈

惣都合田數七百十五町八段三丈

右、嶋津庄　日向大隅　薩摩　三箇國本家一乘院寄郡、地頭加徴米

者段別五舛也矣、

「右上書」「官符宣□注文案　観應元六ノ廿四」

2322

『比志島氏文書』

西俣并郡山城事、今朝東俣より馳申へく候、就其者、郡山城さりともひとさゝへハ候ハんすらんと存候之處、無其儀落候事、就公私歎入候、昨日も田上凶徒等大勢打出候之間、谷峯ニ差置候子共以下降逢合戰候了、御城事かたく可被持由事、尤本意候、就是非、それの御城ニ敵打かゝり候ハヽ、是の事難儀候とも軍勢を可差向候、なにさまにも、御城のわるく候ハんする所ゝ、早く可被取誘候、今朝進狀候つる、相構〳〵、御城をかたく可有御持候、事の不審者夜も夜中も可承候、返ゝ此御文悦入候、恐ゝ謹言、

八月廿一日　　道鑒（貞久）（花押）

比志嶋彦一（範平）殿

「薄墨ニテ」「貞和六年八廿四日」

比志嶋彦一殿　　道鑒

2323

「諏訪氏臣加治木伴右衛門蔵」

今月十八日薩州郡山城江大隅助三郎入道以下凶徒等寄來之時、十八九廿日、致散ゝ合戰之處、親類小山田彦五郎左ウテ被射貫、・若黨藤丸左衛門次郎左ノチノ下被射、・同森五郎三郎左大モ被射貫、・中間弥三郎左ノ大モ被射、・同藤三郎左スネ被射、此等子細、比志嶋孫太郎・同舎弟太郎・猿渡藤三郎等同所合戰之間、被見及畢、爰率凶徒等大勢、令取用害七八ヶ所、押巻城候之間、依無人數無力引退候訖、所詮、御方志候之上者、爲凶徒退治、被向御勢候者馳参、重可致軍忠候、然者給御判、爲備後證、粗言上如件、

観應元年八月廿一日　　大藏頼平

承了（貞久）（花押）

2324

「猿渡氏系図」

信重

藤三郎

郡山ニテ高名ヲ極ル、一見狀明白也、文和四年九月三日、櫛木野ニテ宮方ト合戰打死、

2325

『比志嶋氏文書』

相構〳〵御城をかたくもたれへく候、その御城にを

いてハこれより可申合力候、
東またの城に、かたきよせて候事、承候了、かさねて申候しことく、それの御城ニくんせいをこむへく候あいた、只今やかて〳〵人をまいらせ候程ニ、その時くハしき事ハ申すへく候、恐〻謹言、

八月廿三日　　道鑒（貞久）（花押）

比志嶋孫太郎殿

比志嶋彦一（範平）殿　　道鑒

2326

「比志島氏文書」

□合戰ちうをいた□
□〻早〻けんし□お
こなうへく候也、

昨日土橋城かつせんニついての使者▒（ヨメス）、弥以今夜丑時到來、自是使福崎入道下人同時到來、委細承候了、度〻かつせんニついて、御敵引退之由事、殊悦入候、是も昨日申時きこへ候し間、やかて打立候、重たるさうニしたかい、明日早旦ニうちたち候之處、如此うけ給候、返〳〵悦入候、是非付候て、やかて重可承候、尚〻是□用立候之間、其さうニしたかい候て、うしろまきをいたすへく候、又入せいともハ、さためて今夜入候ぬらん、もし遲〻候仁候者、不残かのしやうに可馳籠之由、即時可被仰候、又自是も明日者、人をつかハすへく候、このふミすなわち、きいれとの〻方へ可被遣候、恐〻謹言、

九月六日寅時　　道鑒（花押）

□殿　　道鑒

2327

「正文在源三郎久清」

『樺山家文書』

長門國有光五郎左衛門跡、沙汰付于嶋津三郎右衛門尉資久、可執進請取之狀如件、

觀應元年（『庚寅』）九月十二日　　『高師泰』越後守（花押）

大和藏人殿

「樺山資久譜中ニ在り」

2328

『戴山田譜』

爲奉息兩殿御意、所打立也、急速馳参、可致忠節狀如件、

貞和六年九月廿二日　　（直冬）（花押）

山田諸三（忠経）郎殿

2329

「在御文庫二番箱他家文書中」

一先度被仰下候御事書之旨、寺社并地下之各〻ニふれ申候之處ニ、めん〳〵にいきを申され候、

一當年御領内、七月卅日、同八月廿二日之大風ニ大そんまうにて候、御年貢一も不参候事、公私歎入候、けはいの脚力はかりにてハ、そんまうの事申ひらきかたく候間、たま〳〵田所上洛候へハ、定御尋之時、委細可被入申候欤、

一覺眼之子息衛門次郎、たま〳〵まかりのほり候けるに、庄家之事も注進可申候處ニ、おとなしくして罷立候事、於向後者なんきの次第にて候、如此事せんきニまかせて沙汰をいたすへきよし、被仰下候ハすしてハ、かう〳〵のていニあるへくや候ハんすらんと存候、

一下司孫四郎入道歎申候道願おさへもち候水田并薗事、せん下司弥四郎入道跡なり候うへハ、子細あるへしともそんせす候、とも〳〵上の御はからいたるへく候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

貞和六年十月廿八日　　惣公文重阿(花押)
田所成躬(花押)
下司道知(花押)

2330

「写文庫中伊作家文書」

師直・師泰誅伐事、早馳参御方、可致軍忠之状如件、

觀應元年十一月三日　　御判(直義)

嶋津左京進(宗久)入道殿

「伊作家二代宗久譜中案文在巻本トアリ」

2331

『入來院氏文書』

爲奉息兩殿御意、所打立也、急速馳参、可致忠節之状如件、

貞和六年十一月廿日(卅)　　(花押)(直冬)

澁谷九郎(重興)殿

2332

『写在山田七郎右衛門久通』

令追討師直・師泰、爲奉息兩殿御意、所打立也、急速馳参、可致忠節之状如件、

貞和六年十二月廿日　　(花押)『足利兵衛佐直冬』

嶋津孫三郎殿

「川上頼久譜中ニ在リ」

収納使永覺(花押)

2333

「正文在西俣氏」

於國致忠節之条、尤神妙也、弥可抽戦功之狀如件、

貞和六年十二月廿七日　（花押）『尊氏ノ長男足利直冬ナリ』

滿家院西俣殿

（表紙）

貞久公
師久公　自觀應二年
伊久公　至文和元年
氏久公

前編　舊記雜錄　巻廿三

貞和五　觀應二　文和四
『貞和二年ヨリ正平二十四年』

自觀應二年辛卯『即正平六年也』
至文和元年壬辰

2334

『越前島津氏七代忠兼譜中』

（花押）

下　嶋津周防三郎左衞門尉忠兼

可令早領知江石見左衞門大夫跡并播磨國布施郷下職等（司脱カ）事

右、爲勲功之賞、所宛行也者、早守先例、可致沙汰之狀如件、

觀應二年正月廿四日

2335

「國史道鑑公」

「觀応」二年辛卯、南朝正平六年、春二月十三日、下文以下野三郎右衞門尉資久爲日向州臼杵院地頭職、賞戰功也、（拠島津支流系図、臼杵院係上椙左馬助旧邑、日向有臼杵郡、今属他国、）復領莊内島津・樺山・早水・寺柱之地、子孫因稱樺山氏、（同上、此事無年、因上文事、而類記之、莊内今無島津地名、郡村高辻帳、樺山・三俣院村名、今属勝岡郷、早水・寺柱二村並属莊内中郷、）初肝属兼重使其弟五郎九郎居大姶良城、城下郷豪曰濱田氏、曰横山氏、曰完目氏、曰大姶良氏、四族合謀、陰附公室、五郎九郎襲横山城拔之、濱田某戰死、完目某挺身逃亡、匿於道側竹林中、狙擊五郎九郎殺之、榆井頼仲聞之、引志布志兵至、攻大姶良城陷之、（拠鮯岳公旧譜、山田聖栄自記、志志目正兵衞系図文書、浜田・横山・完目・大姶良、皆五郎大夫義光之族也、各以其邑為氏、完目或作志志目、或作志志女、義光見第一巻建仁三年注、大姶良城、名内城、遺墟在大姶良郷大姶良村、北去地頭館一町余、横山城故墟在横山村、東去地頭館十二町許、）使大姶良新兵衞・横山彦三郎等守之、三月二十七日、禰寢清成・清増・清種、從畠山直顯、攻大姶良城、夏四月三日、（池端平左衞門・根占越右衞門文書、作四日、）拔之、（拠小松氏・池端平左衞門・根占越右衞門家蔵文書、按四族陰附公室、完目某殺肝付五郎九郎、於是榆井頼仲引兵、

取大姶良城、使大姶良新兵衛・横山彦三郎守之、三月二十七日、祢寝清成等攻大姶良城、観此、則四族附公室、完目其殺肝付五郎九郎、為是歳三月以前之事明矣、而齢岳公旧譜、山田聖栄自記、以為齢岳公時事、恐謬、十日、禰寝清成・清増・清種等、圍榆井頼仲弟又四郎頼重於百引郷加瀬田城、「六月一日、模良王八代ノ高田ニテ、染革ノ別板ヲ彫シメ料用トナシ玉フ、所謂正平革ナリ」日、足利直冬與島津道惠書、使領伊作日置荘領家職、同上、建武三年、公下加瀬田城、其後加瀬田城守将及頼重取加瀬田城、年月不詳、秋七月四敷月不克、拠伊作家譜、按道惠曰為伊作日置二荘地頭職、未嘗応直冬也、而直冬以道惠為領家職、使食是且食是年租入、年租入者、蓋招誘之耳、十一日、池端平左衛門文書、作十日、禰寝清成・清増・清種、攻榆井頼仲黨與於鹿屋院高熊又作高隈、城、明日抜之、拠小松氏・池端平左衛門・根占越右衛門家蔵文書、郡村高辻帳、高熊村属肝属郡串良郷、今建為高隈郷、而分其地、為二村、曰上高隈、曰下高隈、上高隈村有故城墟、名白石松尾城、在地頭館西五町余、二十五日、頼仲家臣細山田三郎・風早十郎・牧瀬源太、下大姶良城、而據之、肥後次郎左衛門・石堂彦次郎等、屯鷹栖城、以為之外援、禰寝清成・清種等、攻鷹栖城、不克、同上、鷹栖郡村高辻帳作高洲、属鹿屋郷、八月三日、轉戦于姶良荘井上城、殺頼仲黨與島津田三位房等數十人、又陥加瀬田小城、又陥高山城、此夜遂陥加瀬田城、同上、井上城遺墟在姶良地頭館北二十三町有余下名村、高山郷新留村有故城墟、名弓張城、土人相伝、榆井頼仲所拠、在地頭館東西四町許、四日、復陥大姶良城、又陥鷹栖城、同上、十二日、畠山直顯率禰寝清成・清種・清増等、攻志布志城、明日下之、同上、志布志城薩松尾城、時係榆井頼仲所領、十五日、幕府下文使　公領大隅國寄郡、下大隅郡・大禰寝院・鹿屋院・串良院・西俣村・曽小川村等地、拠道鑑公旧譜、下大隅郡即今垂水郷等地、大祢寝院薩大根占郷、鹿屋院已見第一巻建久五年、串良院即郡村高辻帳串良郷、西俣村属大姶良郷、曽小川村属東国分郷、並見高辻帳、九月十五日、足利直冬遣禰寝清成書、使属尾張左馬助義冬立軍功、拠小松氏文書、　公遣　齢岳公及左衛門尉資忠、詣筑前金隈、（ココニ頭注アリ、文末ニ記ス）助一色右馬頭範光軍、範光範氏子、二十八日、齢岳公從範光有戰功、本田左衛門次郎入道道意・伊集院彦五郎入道迎齋・中條六郎・池上四郎兵衛尉光□戰死、齢岳公亦被數創、初建武中、　公宿衛京師、與伊地知彈正少弼季隨同班、既而季隨有罪下獄、　公請於幕府而出之、季隨由此徳　公、欲以有報、而未得路、乃適薩摩、是日自呼島津又三郎氏□而死、以報於　公、齢岳公乃得免、拠道鑑公旧譜、島津支流系図、秩父十郎兵衛系図、金隈合戦事不見太平記、続本朝通鑑、大日本史等書、齢岳公被創、壓下戦死事見旧譜、明年四月十三日、利義詮賜公及齢岳公書、不詳範光与某人戦、窃惟事勢、当是南朝諸将、然無可考、且南朝将与探題相抗衡者、莫如菊池、然菊池武光撃一色直氏及弟範光于筑前走之、在後延文三年、非是歳事、而島津世家云、觀應二年九月、菊池武光侵筑前、齢岳公属一色範光、戦於金隈、不知何拠、今不取、又按諸県郡高城人桑波田孫四郎系図、本院大臣時平曽孫藤原昌成、為伊集院院主紀能成嗣、清景曽孫曰彦五郎清重入道、此云即昌成之六世孫、子孫世領院司職、清景曽孫曰彦五郎清重入道、此云伊集院彦五郎入道迎斎、疑清重、伊地知氏即秩父氏、秩父十郎兵衛系図、秩父氏祖曰武蔵守将恒、村岡五郎良文之孫也、始以秩父為氏、伝五世至荘司重能、改為畠山氏、伝四世至時季、又改為伊地知氏、時季子兼季、復為畠山氏、兼季子季清、復為伊地知氏、季清子即季随也、季随復為畠山氏、尋復伊地知氏、伝十三世、至勘助重直又称秩父氏、　冬十月二十五日、足利氏

與南朝和親、左中將具忠奉

後村上帝綸旨、使尊氏討直義、（拠道鑑公旧譜、参考太平記、大日本史、足利直義与兄尊氏不協、遂降南朝、南朝納之、使討尊氏、尊氏亦降南朝又納之、賜詔書、使討直義、）十一月二日、下文以定山公爲肥前早湊村地頭職、賞勲功也、先是下野守忠氏爲丹後田邊荘・肥前早湊村地頭職、至是、割早湊村、以與　公、（拠定山公旧譜、）七日、足利義詮廢崇光天皇、去觀應年號、奉正平年號、（拠大日本史、）初三郎左衞門尉忠光（師忠改名忠光）食采於鹿兒島伊敷村、又領隅州佐多、八日、禰寢清成攻佐多城、會忠光在伊敷村、使其子某等守之、清成遂陷之、其後忠光復取之、子孫遂以佐多爲氏、（拠佐多豊前系図小松氏文書、）十三日、幕府遣　公書、使討直義曰、宜其率族人、從官軍共立戰功、（拠道鑑公旧譜、官軍謂南朝軍、）幕府賜島津道惠書、賞軍功也、（拠伊作家譜、）足利義詮薦　定山公爲廷尉、十五日、以書告之、（拠定山公旧譜、公為廷尉旧譜日闕、）

「正月五日後村上帝自六太移賀名生」

文和元年壬辰、（南朝正平七年、是歲九月、北朝建元文和、按前年十一月、去觀應年号、用正平年号、至此年八月、北朝無年号者十月、然至九月建元文和、是歲即文和元年也、而続本朝通鑑、則大書曰正平七年、以為觀應已廢、文和未建、故用南朝年号、）其説未確、　春正月二十一日、足利直冬賜二階堂行雄薩摩國河邊郡地頭郡司職（得宗旧領、）智覧院地頭郡司職（島津式部三郎、郡司四郎入道旧領、）潁娃郡郡司職（潁娃三郎旧領、）賞功勲也、（拠二階堂氏家蔵文書、智覧院即今給黎郡知覧郷、）閏二月十六日、南朝絶足利氏、（拠太平記、自去年十一月至是、和親僅五月、是年七月一日、畠山直顯遣姫木弥四郎書曰、島津上総入道道鑑奉肥後宮令旨、率薩摩兵拔大隅隈本城・栗野北里城、是時筑紫將士、或応南朝、或応北朝、或応直冬、而直顯為直冬党、故其書如此、然是月南北和親既敗之後、公專事北朝、而直顯七月一日書云、公奉肥後宮令旨者何也、豈去年十一月以後、是年閏月以前、有承令旨、而直顯乃追言之者耶、公拔二城、俱見於直顯之書、他無所考、後醍院喜兵衞系図、肥後宮即征西將軍宮也、延元二年、如肥後国、諸家大概記、姫木氏出自税所氏、其先居嚼吻郡姫木城、因以為氏、）

夏四月十三日、足利義詮賜　公教書、答閏月十三日注進狀也、（拠道鑑公旧譜、此書無名及花押、然太平記云、是年四月、足利義詮囲後村上帝於八幡、而書中言是時自將攻八幡山、則其為義詮之書明矣、）亦賜　齡岳公教書、褒嘉金限之戰功也、（拠齡岳公旧譜、亦賜島津道惠教書、賞軍功也、拠伊作家譜、）二十五日、足利義詮賜本田熊鬼丸・伊集院又五郎・中條彌六・池上彌四郎感狀各一通、褒嘉其父死事之功也、熊鬼丸、道意之子、又五郎、迎齋之子、彌六、六郎之子、彌四郎、四郎兵衞尉之子也、（拠道鑑公旧譜、本田道意・伊集院迎斎・中条六郎・池上四郎兵衞尉、皆死金限之戰、幕府賜三郎右衞門尉資久日向宮崎郡・肥後見去年、）山鹿荘等之地、（拠島津支流系図、宮崎郡係戸次丹後守旧邑、山鹿荘係筑後守頼尚旧邑、）賜左衞門尉資忠日向州荘内北郷之地三百町、賞金限之戰功也、（同上、）畠山直顯・伊東八郎奪據穆佐院及島津荘、（穆佐院時為御台所湯沐邑、鎌倉以来、謂將軍家夫人為御台所、東鑑元久元年十二月十四日、坊門前大納言信清之女、為將軍家御台所、是也、）二十九日、賜島津氏宗人教書、使與一色道猷俱擊畠山直顯・伊東八郎等、（拠道鑑公旧譜、島津荘事不詳、觀應元年、畠山直顯取新納院、見上、直顯党於兵衞佐殿、戰御台御領及島津荘近江守時久所領新納院、見文和二年沙弥昌連披露狀、蓋追言觀應元年以前事、拠此則島津荘疑指新納院、小林人永里弥一兵衞家蔵肥後国永

里孫四郎隆信建武三年八月六日申状云、攻伊東藤内左衛門尉祐広於日向八代城、改選諸家系譜、建武二年、伊東祐広戦死、祐広子曰下野守祐氏、祐氏初称八郎左衛門、拠此、則伊東八郎当是祐氏、但拠隆信申状、則建武三年、祐広未死、而諸家系譜云、建武二年戦死者謬、

賜伊地知彦七季匡教書、亦嘉其父死事之功、季匡、季隨之長子也、拠道鑑公旧譜、秩父十郎兵衛系図、伊地知季隨死事、見去年、五月十三日、賜一色道猷教書曰、去十一日、克八幡山凶徒、其俾九州人聞知、拠道鑑公旧譜、参考太平記、觀應三年閏二月南帝屯八幡、足利義詮攻之、五月十一日、南帝去八幡、還吉野、月日与此合、去十一日、去猶過也、十一日已過、故云去十一日、資治通鑑、晋紀太康元年、王濬曰、偽中郎将孔摠、説去二月武昌失守、水軍行至、註、二月已過、故云去二月、元康九年裴頠上表曰、註、去元康四年大風、右用去字、義与和語同、二十二日、公使伊地知季匡領鹿兒島郡田上村半分代官職、同上、六月五日、足利義詮賜　公教書、使與一色道猷俱擊畠山直顯・伊東八郎等、又賜新田宮執印氏教書、亦如之、拠道鑑公旧譜、執印久馬家蔵文書、十八日、一色道猷遣　公書曰、承前月十三日教書云、已克八幡山凶徒、今贈教書案、其俾國中地頭御家人聞知、拠道鑑公旧譜、秋七月二十四日、畠山民部大輔「直冬党也、南山史」重隆重隆郎直顯之子、引軍至大隅國、税所介以下迎降、　齡岳公將兵擊之、不克、拠齡岳公旧譜、文和三年三月五日進上状、太平記、畠山直顯之子曰民部少輔、金勝院本作民部大輔重隆、大系図、直顯之子曰右馬助宗泰、未知孰是、今姑従金勝院本、税所治部右衛門系図、税所氏之先、出自教実親王、親王十世孫曰曽於野七郎大夫敦茂、領大隅国税所総検校職等、因以為氏、子孫世襲其職、称税所介、　初戸次・豊前太郎賴時奪豊後州井田郷、矯稱一色入道有配分状、　公訟於幕府、乃命有司案之、悉得賴時誕妄之狀、賴時者大友氏之族也、二十七日、幕府命沙彌及大友孫三郎、令戸次丹後守歸我井田郷、（頭注）「此日武家改正平年号、用観応三年々号」拠道鑑公旧譜、暦應元年十二月二十七日武蔵守執達状、四年年卯月二十二日宗栄状、閏月一日武蔵守執達状、觀應三年七月二十七日沙弥執達状、沙弥不詳何人、旧譜朱注於傍曰、管領宇都宮遠江入道、未知所拠、俟考、大友孫三郎具簡子、戸次丹後守即豊前太郎頼時、入田次左衛門系図、具簡子曰刑部太夫氏時、始称孫三郎、頼時始称豊前太郎、後改丹後守、幕府賜公井田郷、見建武元年、八月十七日、足利義詮立大友具簡、見元弘三年、並係上巻、「十八日齡岳公帰」

後光嚴帝、拠大日本史、九月十八日、幕府賜　定山公　齡岳公教書各一通、使誅直冬以下凶徒、拠定山公・齡岳公旧譜、齡于薩州」　齡岳公討大隅日向凶徒、因遣一色道猷注進狀、二十八日、道猷上諸幕府、拠齡岳公旧譜、公討大隅日向凶徒、蓋手具注進状、而状文不伝、其詳不可得而知也、「十一月十二日足日改元、拠和事始、冬十月三日、足利義詮與　公教書曰、利直冬鎮西戦不利、走匿長州豊田城、除寄書於菊池小式等、園太暦」得六月二十七日注進狀、遣二子討凶徒、籌策儘好、拠道鑑公旧譜、　與　定山公教書曰、得六月二十一日注進狀、擊大隅薩摩凶徒、籌策儘好、賜　齡岳公教書、亦如之、拠定山公・齡岳公旧譜、初禰寢清成取大姶良城、事在去年、置兵守之、十二月三日、榆井賴仲夜攻下之、遂據其城、四日、禰寢清成・清種・清増・三位房清有、從畠山直顯軍奉行野本藤二行秀、圍大姶良城、不克、拠小松氏・池端平左衛門・根占越右衛門家蔵軍忠状、清有、清成之弟也、拠清有軍忠状、小松氏古系図、清成無子、以清有為嗣系図、新撰系図、則以清有為清成之親子、与軍忠状古系図不合、清有或称孫次郎、又称右馬助、見系図、　初幕府賜孫三郎左衛門尉

賴久大隅桑郷、事見上巻暦應五年、十二日、下文以賴久領加世田別府半分地頭職、以易桑郷、拠島津支流系図、

（頭注）（前一行説メズ）同左京太夫直氏、同右馬助範光及ヒ草野松浦以下ノ者トモ、師直カ下知ニ随ヒ九国ニ□玉フ、足利直冬ヲ討取ヘシト彼地ニ攻ヨス、直冬モ是ヲ聞、小弐・大友カ兵ヲ伴ヒ防戦セラル、ニヨリ、数日ニ及ヒテ勝ヲ決セス、

【元】此年九月大廿九日、肥後国ノ早馬京着シ、去年当国ニ下着アリシ足利直冬、今ハ近国ヲ打ナヒケ、其威遠近ニ振ヒ、宅磨別当太郎高直モ是ニ組シタル上ヘ、川尻ト心ヲ合セ、鹿子木大炊介貞照ヲ攻候也、討手ヲ下サルヘシト云々、十月十七日、九国ノ一色カ許ヨリ飛脚京師ニ至来シ、大友・小弐・松浦・草野、足利直冬ニ与党シ、其威振フ処ナリ、早ク討手ノ勢下向アルヘシトソ告タリケル、園太暦・祇園修行日記

此月足利直冬鎮西ニ旗ヲ挙テ、直義入道ト牒シ合セ京ニ入ラント企、園太暦

正平七年壬辰六月五日、先ニ鎮西ニ於テ足利直冬、伊東八郎等ヲ語ラヒ、所々ヲ乱妨シ、尊氏ノ御台所ノ御領日向国穆佐院ヲ押領シケレハ、一色カ方ヨリ直冬方ノ者トモヲ追討スヘキヨシ、今日其沙汰ニ及フ、古文書

2336

「正文在樺山源三郎久清」

（尊氏）（花押）

下　嶋津下野三郎右衛門尉資久

可令早領知日向國臼杵院地頭職、上福左馬助跡事

右、爲勲功之賞、所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

觀應二年二月十三日

「樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

2337

「越前島津氏譜中」

八代
忠親
次郎　靱負尉

觀應中、屬　尊氏卿抽戰功、卿賜感牘、錄于左、

2338

（尊氏）（花押）

下　周防次郎忠親

可令早領知甲斐國花崎郷、依田将監跡事

右、爲勲功之賞、所宛行也者、早守先例、可致沙汰之狀如件、

觀應二年二月十六日

2329

『入來家臣武光氏文書』

讓与　小三郎兼者所

薩摩國高城郡本万徳名惣領職（同弁済使職、）
同國同郡吉枝名惣領職
筑前國七隈郷一分地頭職（田薗畠地、正應配分状ニ分明也、）
薩摩國宮里郷權次郎名惣領田薗等
同郷清水寺別當職免田薗山野等
薩摩國三番在廳職國領薗貳ヶ所（北薗石走）也、
牛屎書生職、日置南郷書生職、

右、所領所帯等者、重兼重代相傳所領也、而間、相副安堵御下文御下知御教書已下代々手継狀等、所讓与兼者也、至後々將來、無他妨可知行、舎弟等令分讓於田薗者、御公事配分之外、不可致違乱、仍讓狀如件、

貞和七年三月十八日　　重兼（花押）

2340

「写在御文庫二番箱他家文書中」

（花押）

ゆつり渡所領事

八郎行春所

右所領ハ、さつまの國あたのこほりきたかたの内いけへの村、行存さうてんの所領たるあひた、八郎にゆつるところなり、このところハ、次郎まこたる間、ゆつるといへとも、とんせいする間、八郎になかくゆつる也、しゝさかいハ、せんれいにまかせてちきやうすへき也、後日のためにゆつり狀如件、

貞和七年三月卅日　　行存在判

2341

『肝属兵庫助秋兼譜中』

正平六年辛卯、（北朝觀應二年、）初足利兵衛佐直冬之至九州也、畠山修理亮直顯等多迎降者、秋兼亦及父擧族附之、以和直顯、而未幾父兼重歿、叔父五郎亦尋兵死、當是之時、榆井四郎頼仲據有志布志城、所謂信濃源氏之族也、乃乘其虚、侵我肝属、取大姶良城・加世田城（竝見上、）高熊城（属郡之串良郷今立一郷、即高隈也、）等、分之戍衆、使其弟又四郎頼重戍加瀬田城、使其臣岡富三郎次郎及大姶良新兵衛（入道道心、）横山彦三郎等戍大姶良城、至是三月二十七日、畠山直顯率禰寝彌次郎清種等、攻大姶良城、四月四日拔之、十日、攻頼重於加世田城、二十五日、得丸六郎五郎良世等又攻之、良世弟得丸孫七新平被疵有功、五月三日、良世等又攻之、得丸新平（ナウクン）圍人彦三郎等蒙疵、於是七月十一日、（或為十日、）清種等又攻高熊城、明日拔之、二十五日、頼仲遣其黨風早十郎・細山田三郎等、復取大姶良城、據而戍之、薩摩人肥後三郎

兵衞尉・石堂彦次郎等帥兵衆、來築鷹栖城、屬郡之鹿屋鄕即今高洲、亦爲外援、直顯乃使清種等、攻鷹栖城不拔、賴仲又別遣島津田三位房・饗庭九郎等、屯井上城在姶良、亦援之、八月三日、清種等與之戰於井上、斬三位房等數人、又陷崩城、未考、夜陷加瀨田城、四日、復攻大姶良・鷹栖兩城皆陷之、十二日、直顯帥兵、攻賴仲於志布志城、明日拔之、○十五日、幕府尊氏以鹿屋院・串良院・西俣村等地、爲道鑑公食邑、賞其功勞、蓋削我郡内也、○九月、以得丸六郎五郎良世・牧山孫四郎爲小原地頭職、

2342

『載山田忠經譜』

嶋津大隅式部諸三郎忠經謹言上

欲早且依傍例、且任當知行實、預安堵御下文、備末代亀鏡、薩摩國谷山郡内山田・上別府兩村地頭職事、

副進

一通　関東御下知

一通　親父宗久法名道慶讓狀

一通　鎭西御下知

二通　綸旨同決断所御下知

二通　御教書

右、地頭職等者、忠經父祖代々相傳當知行無相違之条、所進之文書等炳焉之上者、早預安堵御下文、弥爲致忠節、粗言上如件、

貞和七年四月　日

2343

「入來家臣豊田氏蔵」

薩摩國入來院倉野地頭豊田長壽丸代中木庭五郎次郎貞清申、馳参大宰府、致宿直警固、付御着到候上者、賜御證判、可備後證亀鏡候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

貞和七年卯月　日

進上　御奉行所

承了(花押)

2344

『入來院氏文書』

薩摩國入來院地頭澁谷九郎重興申、馳参太宰府、致宿直警固、付御着到候上者、賜御證判、可備後證亀鏡候、以此旨、可有御披露、恐惶謹言上、

貞和七年卯月　日

進上　御奉行所

承了(花押)

2345 『頂峯院文書』

御領内圓満、并忠資同子孫繁昌祈、可被致丁寧也、仍補
『在』
仁狀如件、

觀應二年四月廿日　　「指宿太郎平忠資カ」平忠資（花押）

2346 『種子島氏文書』

武藏守師直以下之輩去二月廿六日被誅伐、天下悉屬靜謐
訖、仍大隅日向凶徒城墻末吉大曲以下十餘ヶ所退治候間、
肥後一族并救仁郷孫太郎以下所被參御方候也、急速馳參
致軍忠者、可抽賞之狀如件、

觀應二年卯月廿二日　　（畠山直顯）修理亮（花押）

『種子島氏』「五世中務左衛門時基」肥後中務大郎殿

2347 『藤野氏本四十四之一　案文也』

惟宗氏代義継申、薩摩國山門院久富名内郡山田地河原田
八段四十、令千俣貳段二十、平地薗壹ヶ所事、如義継訴
狀者、地頭代兼阿加點札於作麥已下云々、仍相尋之處、
如請文者、不實云々、此上者不及子細、兼阿亦爲義継以
姫夜叉女、先年令殺害之由申之間、所有其沙汰也、是非
糺明之間者、先氏女知行不可有相違之狀如件、

觀應二年五月二日　　道鑑

「此御書、御文庫廿二番箱一巻中ニ在リ、御判ナシ」
「道鑑公御譜中ニ載セラル」

2348 薩摩國滿家院比志島彦太郎範平爲致軍忠、令在府候、以
此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

貞和七年五月　日

進上　御奉行所

承了（花押）

2349 『入來院氏文書』

於國致忠節之上、馳參之条、尤神妙也、弥可抽戰功之狀
如件、

貞和七年五月廿五日　　『義詮判』（直冬）（花押）

『直興』澁谷九郎殿

2350 『岩下佐次右衛門家蔵』

於國致忠節之上、馳參之条、尤神妙也、弥可抽戰功之狀
如件、

貞和七年五月廿九日　　（直冬）（花押）

豊田六郎次郎殿

2351 「在岩下佐次右衛門家」

（本文書ハ二三五〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

2352 『入來院氏臣武光氏文書』

馳参之條、尤神妙也、弥可抽戰功之狀如件、

貞和七年五月廿九日　『足利義詮』（花押）/（直冬）

武光三郎（重兼）とのへ

（本文書前欠ナルベシ）

2353 『高岡士河上氏文書』

於國致忠節之上、馳参之条、尤神妙也、弥可抽戰功之狀如件、

貞和七年六月五日　『直冬朝臣』（花押）

河上平次郎『家忠』殿

2354 『比志島氏文書』

於國致忠節之上、馳参之条、尤神妙也、弥可抽戰功之狀如件、

貞和七年六月五日　（直冬）（花押）

比志嶋彦（範平）太郎殿

2355 「載山田忠經」

下　嶋津山田諸三郎忠經

可令早領知薩摩國谷山郡山田・上別府兩村地頭職下知事

右、任関東鎮西度々下知并親父道慶譲狀、可令領掌之狀如件、

觀應二年六月十三日

源（直冬）朝臣（花押）

2356 「載山田友久譜」

下　嶋津式部孫三郎友久

可令早領知薩摩國谷山郡山田・上別府兩村地頭職事

右、任関東鎮西度々下知并親父道慶舎兄忠經正中二年四月十九日・今年四月三日譲狀、可令領掌之狀如件、

觀應二年六月十三日

源（直冬）朝臣（花押）

2357

『入來臣武光氏文書』

下　武光三郎重兼

可令早領知薩摩國宮里郷清水寺免田薗山野、同郷正岡内田地三町屋敷壹所（号権次郎）、筑前國野介庄七隈郷内田地壹町陸十歩、同國比伊郷内屋敷一所、七隈畠地三奈木庄内屋敷壹所、筑後國長渕庄畠地等地頭職事、

右、任文保・元亨鎮西下知、建武四年五月廿日兩通御外題、可令領掌之狀如件、

觀應二年六月十七日

源朝臣（直冬）（花押）

2358

『安養院文書』

（花押）

向嶋西方可存知事、

或号講免薗、或稱道領、依籠置惣領百姓等、御公事闕如之條、以外次第也、所詮、於向後者、隨于其分限置之、於相残之族者、於惣領百姓可令全御公事、若背制符於籠置者、云講免薗、云道領、可被收公也、次大夫太用（マヽ）之時者、彼兩所悉可進之、若募權威無沙汰之時者、可及殊沙汰也、其旨可存知之狀如件、

觀應二年六月十九日

2359

『川上直左衛門所蔵』

□（加カ）世田合戰手負注文

得丸六郎五郎良世分

卯月廿五日

孫七良世舎弟　新平同舎弟

二ケ所モヽアシ　左手

五月三日夜〻打時

新平切疵モヽ　彦三郎中間左手

注文、

觀應二年六月廿一日

承了（直冬）（花押）

2360

『安養院文書』

（花押）

向嶋西方河原越前守間事、雖爲御内御方人、同心成阿弥陀佛當嶋仁引入悪黨等之間、雖可被誅罰、以別儀、可安堵之由、所被仰下也、於向後者、全御年貢、爲御方人之上者、可致奉公之忠之狀如件、

觀應二年六月廿五日　　貞家奉

2361

「正文在文庫伊作家文書」「伊作宗久譜中正文在手鏡トアリ」

薩摩國伊作日置庄領家職事、爲兵粮料所、當年壹作、所預置也、早守先例、致沙汰、可執進年貢之狀如件、

「足利右兵衛佐直冬判正文写」

觀應二年七月四日　（花押）

嶋津大隅左京（宗久）進入道殿

2362

『水引執印文書』

薩摩國新田宮前執印友雄代申、同國市比野村内原田壹町參段、府宿薗壹ヶ所事、件田薗者、時友無違乱之儀候上者、押領之条不實候、此上者、時友安堵事、任先御沙汰旨、可蒙御成敗候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

『右時友裏ニアリ』

觀應二年七月廿四日　惟宗時友（花押）

2363

「正文在文庫伊作家文書」「伊作宗久譜中正文在手鏡トアリ」

大隅薩摩兩國凶徒退治事、急速令發向、可致忠節之狀如件、

觀應二年七月廿六日　（花押）（直冬）

嶋津左京（宗久）進入道殿

2364

『載山田譜』

大隅薩摩兩國凶徒事、急速馳越、可致退治忠節狀如件、

觀應二年七月廿八日　（花押）（直冬）

嶋津大隅諸三（忠経）郎殿

2365

『入來院氏文書』

下　澁谷平次五郎重勝

可令早領知美作國河會郷下村、薩摩國入來院清色郷五分貳參、筑前國下長尾田畠屋敷地頭職事、

右、任亡母尼顯心康永三年三月十八日、亡父重基法師法名定円、貞和二年十一月廿六日讓狀等、可令領掌之狀如件、

『足利義詮将軍』（直冬）

觀應二年七月卅日

源朝臣（花押）

2366

『正文在小根占土池端氏』

大隅國祢寢弥次郎清種謹恐々言上

自最初爲御方、自去建武三年迄于今、奉屬御手、隅州日州薩州所々合戰、度々被疵訖、隨而軍忠之次第、先日預御注進訖、就中、去三月廿七日賴仲与黨人大姶良新兵衛入道々心・横山彦三郎・賴仲若黨岡富三郎次郎入道以下凶徒等楯籠押寄當院大姶良城致合戰、同四月四日令退治

彼城訖、將又、同十日賴仲舍弟又四郎賴重楯籠押寄當國肝付郡加世田城、連日致合戰之處、同國鹿屋院高熊(隈)凶徒等楯籠之間、同七月十日押寄彼城、同十二日攻落之訖、爰同廿五日夜、賴仲与黨人風早十郎・細山田三郎以下凶徒等、忍入大姶良城、引會薩州石堂彦次郎入道・肥後三郎兵衞尉以下凶徒等、引卒大勢、當院鷹栖構城塀之間、押寄彼城致合戰之刻、今月三日賴仲与黨人嶋津田三位房・饗庭九郎以下之輩、率大勢同國姶良庄井上寄來、取向城之間、即時馳向、三位房以下凶徒等討取之、同日押寄崩城攻落之、同夜押寄加世田城令退治訖、又同四日押寄大姶良鷹栖城致合戰、凶徒等數輩討取之令退治訖、仍同十二日賴仲楯籠日向國志布志御發向之間、御共仕、押寄彼城、同十三日令退治訖、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

觀應貳年八月　日　　建部清種(裏花押)

承了(畠山直顯カ)(花押)

2367

『写載肝属譜中』

大隅國祢寢五郎入道〻惠子息又五郎清增謹恐〻言上

自最初爲御方、自去建武三年迄于今、奉属御手、隅州日州薩州所〻合戰、致軍忠訖、就中、去三月廿七日榆井四郎賴仲与黨人大姶良新兵衞入道〻心・同横山彦三郎・賴仲扶持人岡富三郎次郎入道以下之凶徒等楯籠押寄當院大姶良城致合戰、同四月四日攻落之訖、將又、同十日賴仲舍弟又四郎賴重楯籠押寄同國肝付郡加世田城、致合戰之刻、凶徒等同國鹿屋院高熊楯籠之間、去七月十一日押寄彼城、同十二日令退治訖、次同廿五日夜、賴仲若黨風早十郎・牧瀬源太以下數十人大姶良城忍入之間、押寄彼城致合戰之處、今月三日賴仲与黨人嶋津田三位房・饗庭九郎以下數百人凶徒、姶良庄井上寄來、取向城之間、即時馳向、令散〻太刀打合戰、三位房以下凶徒數十人討取之訖、又同日大姶良城合戰、親類六郎次郎被疵訖、隨而同日崩城攻落之訖、又同夜賴重楯籠加世田城同前、次同四日賴仲与黨人薩州石堂彦次郎入道子息肥後三郎兵衞尉以下之凶徒等楯籠押寄大姶良城・鷹栖城致合戰、凶徒等數輩討取之訖、又同十二日賴仲楯籠日向國志布志城御發向之間、押寄彼城、同十三日令退治訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗恐〻言上如件、

觀應二年八月　日　　建部清増

承了(畠山直顯カ)(花押)

2368

『入來院氏文書』

可参御方之由、聞食了、早属申征西將軍宮、可致軍忠、
有殊功者、可有其賞者、
天氣如此、悉之、以狀、
正平六年八月三日　左中辨(花押)
澁谷美濃守舘

2369

『写在雜抄』

「正文在文庫伊作家文書中」「伊作宗久譜中正文在手鏡トアリ」

可参御方之由、被聞食了、神妙、有其功者、可被抽賞者、
天氣如此、悉之、以狀、
正平六年八月三日　左中辨(花押)
大隅左京進(宗久)入道舘

「右上包」
「吉野宮綸旨　將軍御教書二通」

2370

『正文在入來院隼人重治家来岡本八郎右衛門重盛』

可参御方之由、聞食了、早属申征西將軍宮、可致軍忠、
有殊功者、可有其賞者、　天氣如此、悉之、以狀、
正平六年八月三日　左中辨(花押)『左中弁時光カ、見于正平七年』
澁谷九郎左衛門尉舘

2371

「道鑑公御譜中」

『正文在之』

凶徒以下輩、参御方致忠節者、本領等不可有相違之狀如
件、
觀應二年八月十三日　『尊氏』(花押)
嶋津(貞久)上總入道殿

「此正文、旧御番所御文書二番箱中歴代亀鑑之中ニ在リ」

2372

『戴伊地知氏文書』

(尊氏)(花押)

下　嶋津上總介貞久法師(法名道鑑)

可令早領知大隅國寄郡内下大隅郡大祢寢院・鹿屋院・
串良院・西俣村・曽小川村等事
右以人、爲勲功之賞、所宛行也者、守先例、可致沙汰之
狀如件、
觀應二年八月十五日

「此文書、道鑑公御譜中正文有之トアリ」
「此正文、旧御番所御文書二番箱中歴代亀鑑中ニ在リ」

2373

『正文在水引權執印』

2374

『執印文書』

譲与　子息三郎次郎俊正所

薩摩國八幡新田宮御領并五大院内、田畠免田等事、

一高城郡五大院御領内、下津町壹町本号九段坪、（方カ）

一宮里郷鶴王丸名免田、中腹帯六段并志奈尾東部壹段、

本名引状在案文二通渡之、裏加判早、又自名平田免田半分矣、

一北薗當權執印當屋敷地四至北者道円給分、自東南角、直通卯津木殖早、限東西南皆垣根、

一柿本薗一所四至北東者権政所垣根、南者限民部房垣根、西限僧薗境、

右、件田薗等者、良暹重代相傳所領也、然者限永代、所譲与俊正也、宛于色々所役等、以於國庫舛米参斗、毎年仁惣領方可弁之、社頭御勤公事等、惣領可勤仕也、臨時濟惣（物）者、壹町五段分可弁也、又守護方軍忠御公事等者、惣領相共可勤仕之、至于子々孫々、器量子息一人仁可譲与也、不可分譲、若無男子之時者、惣領子孫可知行、惣領又無男子者、俊正子孫爲養子可譲与也、自先祖不可他人譲沽却之旨、所定置也、相互存親子之儀、可令勤仕御公事、若雖爲一事、於背此儀者、可知行（良暹之カ）遲也子孫彼田畠等、仍譲状如件、

觀應貳年辛卯八月十八日　權執印兼五大院政所良暹在判

大隅薩摩兩國爲凶徒退治所發向也、急速相催一族、可被致忠節之狀如件、

觀應貳年八月廿八日　左馬助（花押）【足利】（尾張義冬）

執印又三郎【友雄】殿

2375

觀應二年辛未

九月二十八日、或ハ八日ともあり、伊地知彈正忠季隨（齡岳公に筑前の金隈に従軍して、公の御危難に臨ミ、請て公の甲冑を服し、公の御名を冒し戦死して敵を誑く、因て公不死して国に回ことを得給ふといへり、下の四人も皆同し、本田左衞門次郎入道道意・中條李左衞門入道祐心・伊集院彦五郎入道迎齋・池上四郎兵衞尉光久、

2376

「北郷尾張守資忠譜中」

觀應二年辛卯九月二十八日、筑前國金隈合戦之時、爲又三郎氏久公之從軍、属一色右馬權頭範光之手、致軍忠、依之　太守道鑒公被遂註進、翌文和元年四月二十五日、將軍尊氏公賜感賞並北郷三百町于資忠、是所被賞金隈之戰功也、依茲同年十二月十二日、入部于北郷、以住彼郷内安永薩摩迫、始改號北郷者也、證書左記之、

2377

「齡岳公御譜中」「写在文庫廿二番箱一巻中」

「御譜中ニハ案文税所大介トアリ」

「一色殿一覧之目安」

嶋津又三郎氏久軍忠事

右、去月廿八日金隈合戰之時、氏久致先懸、「御譜懸先ニ作ル」令散々太刀打、自身被疵左肩右手共以切疵云、之上、若黨已下數輩、或打死、或被疵訖、仍注文一通進覧之、然賜御一見狀、爲備後證、目安如件、

『南朝正平六年辛卯』

觀應貳季十月　日

御奉行所

承候早　御判（ママ）「尊氏」

2378

「執印文書」

大隅薩摩兩國凶徒退治事、去月廿一日重被仰付之間、急速南方所發向也、早一族相共可被致忠節之狀如件、

觀應二年十月二日　左馬助（尾張義冬）（花押）

新田宮權（良邊）執印殿

2379

十月、尊氏和降　南朝、爲討直義也、

2380

「載于南山巡狩録追加」

於播磨攝津兩國致忠節云々、尤以神妙、急可馳參京都之狀如件、

觀應二年十月五日　（尊氏）（花押）

嶋津周防与一次郎殿「忠兼ノ一男忠親コトナラン」

「此文書、越前嶋津氏八代忠親譜中ニ在リ、譜中ニハ次郎朝負尉トアリ、与一次郎ノ名ナシ」

2381

『写綸旨案』

入道直義朝臣乖『左兵衛督入道也』

朝意没落云々、早可被追罰、於致軍忠輩者、可有抽賞者、天氣如此、仍言上如件、

『吉野年号不審』

正平六年十月廿五日　左中將具忠判

進上　足利大納（尊氏）言殿

「此文書、道鑑公御譜中ニ在リ」

2382

「和泉忠氏譜中」

觀應二年辛卯、初忠氏補丹後田邊莊肥前早湊村地頭職、至是十一月二日、幕府割早湊村、以　定山公爲之地頭職、而忠氏領田邊莊如故、蓋年老也、

2383

（尊氏）
御判

下　嶋津上總三郎師久

可令早領知嶋津下野守忠氏跡（除丹後国田辺庄定）、事

右、爲勲功賞、所宛行也者、早守先例、可致沙汰之狀如件、

觀應二年十一月二日　（花押）

「二之巻統目裏判（今川了俊）」「三之巻統目裏判（渋川満頼）」

2384

「越前島津氏譜中」

九代
範忠

五郎左衛門尉

兄忠親無子卒、故範忠継家統、

「此文書、師久公御譜中写在二、三之巻ト記セリ」

2385

於播磨攝津兩國、抽軍忠之由、聞食候旱、尤以神妙、弥可致戰功之狀如件、

正平六年十一月十日　（義詮）（花押）

周防犬大殿

2386

『載道鑑公御譜中写在之』

吉野和睦之間、可追討入道直義朝臣之間（旨）、去月廿五日被下綸旨、案文遣之、仍爲治罰彼黨類、所下向関東也、存知定之旨（其カ）、相觸一族等官軍、弥可致忠節之狀如件、

【綸旨載前】

【吉野年号不審】　正平六年十一月十三日　【尊氏御判】　御判

嶋津上總（貞久）入道殿

2387

「正文在文庫伊作家文書」「伊作宗久譜中正文在手鑑トアリ」

爲御方、於所々致合戰云々、尤以神妙也、追可被仰下之狀如件、

正平六年十一月十三日　（尊氏）（花押）

大隅左京（宗久）進入道殿

2388

「載于南山巡狩録追加」「正文在文庫」

廷尉事、所擧申公家也、可存其旨之狀如件、

正平六年十一月十五日　（義詮）（花押）

嶋津上總（師久）三郎殿

「師久公御譜、正文有之ト記セリ」

2389

「市來崎文書」

馳参可致軍忠者、依將軍宮御氣色、執達如件、

正平六年十一月廿七日　　修理權大夫（花押）

2390

『上原氏文書』

下　伊作田兵部太夫道材

可令早領知薩摩國日置弥勒寺付若松名、参拾町宗太之忠弘跡、伊作田村惣地頭職嶋津上総前司入道跡、事

右人、爲勲功賞、所宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如件、

觀應二年十一月廿九日

源朝臣（直冬）（花押）

2391

『入來院氏文書』

令一見了（三条泰季）（花押）

澁谷九郎左衞門尉重興申軍忠事、薩摩國東郷藏人城押寄、今月五日抽忠節之條、大將御目前合戰之間、無其隱候者也、然早爲預御注進、言上如件、

正平六年十二月廿三日

2392

「道鑑公御譜中」

「正文在比志島左京義時」

新春御慶賀自他申籠候了、猶以幸甚珎重〻〻、不可有盡期、抑自今日三日始迄于六日、日〻ニ合戰無隙候、隨而昨日申剋南方凶徒等數百人打集谷山城候了、近日可攻御方城之旨、相巧候、就其者、此間者太略御方勢歸宅候間、當陣無人數候、雖難儀候、時剋不廻御越者、喜入候、恐〻謹言、

「文和元年歟」正月七日　　道鑒御判

比志嶋一族御中

「上包」比志嶋□族御中　　道鑒

2393

「越前島津氏七代忠兼譜中」

（花押）

下　嶋津周防守（忠兼）

可令早領知相模國山内庄内岩瀬郷事

右、爲勲功之賞、所宛行也者、早守先例、可致沙汰之狀如件、

正平七年正月十日

2394

「志布志寶滿寺文書古写」

禁制

□於寶滿寺ゝ内、河并山野致殺生事□『焼切レ』

□依偈仰三寶全政道、就崇敬、神明□

□運命者欤、然者、各可成歸敬之思、處□

□邊任雅意、或漁魚鱗、或殺禽獸太□

□意之企、罪科尤難遁、所詮、限上石跳□

□口、永所停止殺生也、次寺内山野事□

□前、若背此法、令違犯者、没收所帯、無□

□日可令追放其身、至凡下之族者、不日可□

□頭(預カ)之狀如件、

觀應三季正月十八日　　(畠山直顯)修理亮(花押)

2395

『上山寺文書』

なを〳〵たうのしゆりねんころに候ハ、めてたく、『堂』『修』『理』ゆつりハたすむかうのしまうへやまのゑもん五郎とのい『尚』『嶋』『上』『右衛門五郎』らんを申ともからあるましく候、『上』『山』『堂』『地』『居』『屋』うへやまのたうちいやしきの事、それにいられ候ほとに、はんしたのゝ申候、『敷』さんやさかいの事ハ、ひんかしゝなゝハおうちをさかう、にしハ『希』『本』ひやゝつおかきりにて候、よく〳〵さかいの事ゝ『道』『立』ちたてあるへく候、このとうちニよつてさまたけを申さんともから候ハ、、うへやまのこけ『後家』まかりくたり候ハ、、くハしく御さた申すへく候、又まい月十八日御あかしかうとゝあるへく候、ふさたにあるへからす候、くハしくハこの上のことくくハしく申、たうのしゆりほんそう申されへく候、あなかしく、

しやうへい七年うるう二月十日

はかた『博多』よりひのかわのこけあま判

うへやまのゑもん五郎との

むこうのしまよこ山

ひいのかわのこけ

(上包)

うへやまゑもん五郎との

御方へ

2396

正平七年壬辰、北朝文和元年、閏二月、　南朝絶尊氏、

2397

「道鑑公御譜中」

「正文在比志島左京義時」

中院法印并兼重以下凶徒等、取乘兵船取要害、可打塞路次之由相巧之、既着揖宿郡山河津候之由、自方ゝ告來候、仍惣軍勢方へ成奉書候訖者、餘ニ無勢候、到來此狀候者、不替時、被馳寄候者悦入候、恐ゝ謹言、

二月十二日　　道鑒御判

比志嶋一族御中

2398
直冬・賴尚以下凶徒退治事、就綸旨御教書等、所發向也、不日馳參可被致忠、仍執達如件、
正平七年三月八日　沙弥（一色範氏）（花押）
莫祢兵衛尉（政貞）殿

2399
「載南山巡符録追加」「越前嶋津氏七代忠兼譜中ニ在リ」
周防守所望事、所擧申公家也、可被存其旨之狀如件、
觀應三年三月十二日　（尊氏）（花押）
嶋津三郎左衛門尉（忠兼）殿

2400
「越前島津氏八代忠親譜中」
靱負尉所望事、所擧申公家也、可被存其旨之狀如件、
觀應三年三月十二日　（尊氏）（花押）
嶋津次郎（忠親）殿

2401
「莫根文書」
菱刈平良彦太郎重任以下輩、令同心□（島津カ）上總入道〻鑒（貞久）、成御敵上者、重任住宅令發向、可令誅伐之狀如件、
觀應三年二月廿八日　（尾張義冬）左馬助（花押）
莫祢郡司殿

2402
「正文在西俣氏」
直冬・賴尚以下凶徒退治事、就綸旨御教書等、所發向也、不日馳參、可被致忠、仍執達如件、
正平七年三月八日　「一色少太郎入道〻猷」沙弥（花押）
滿家院西俣殿

2403
「載氏久公御譜中写有之」
「朱カキ」「御感御教書」
去年九月廿八日、筑前國金隈合戰之時、或若黨等令討死、或自身被疵条、殊以神妙也、弥可抽戰功之狀如件、
觀應三年卯（『壬辰』）月十三日　「尊氏」御判
嶋津又三郎（氏久）殿

2404
「伊地知氏文書」『写載道鑒公御譜中』
去閏二月十三日注進狀、今月十一日到來、披見了、於大隅國薩摩兩國致忠節刻、筑前國金隈合戰之時、差遣氏久等、抽戰功之条、彼是殊以神妙也、就中、宮方凶徒等楯籠

八幡山之間、取巻之、加退治最中也、靜謐不可有程、早其堺之誅伐御敵等、連〻可申左右之狀如件、

觀應三年卯月十三日　　『尊氏』御判

嶋津上(貞久)總入道殿

「道鑑公御譜ニハ、御感御教書写有之ト片書アリ」

2405

「正文在文庫伊作家文書」「伊作宗久譜中正文在手鏡トアリ」

於大隅薩摩兩國致忠節条、尤以神妙、弥可抽戰功之狀如件、

觀應三年卯月十三日　　「将軍義詮公判」(花押)

嶋津大隅左京(宗久)進入道殿

2406

『入來院氏文書』

筑前國早良郡比伊郷下永尾事、亡父定圓(重基)存生之時、重勝安堵申給旱、任定円・顯心譲狀、拾町分内陸町所避渡也、仍爲後日狀如件、

觀應三年四月十九日　　重勝(花押)

澁谷九郎(重興)左衛門尉殿

2407

『樺山氏蔵』「此文書、樺山家元祖資久譜中ニ在リ」

「尊氏公」御判

肥後國山鹿庄内筑後守賴尚(少弐)跡、同國尻無村、日向國宮崎郡内戸次丹後守跡地頭職事、爲勲功之賞、所宛行也、早守先例、可被致沙汰、仍執達如件、

觀應三年四月廿五日　　『一色少輔太郎入道ヘ歟』沙弥(花押)

嶋津三郎右衛門尉(資久)殿

2408

「道鑑公御譜中」

「見于伊地知文書」

去年九月八日、筑前國金隈合戰時、父本田左衛門尉次郎入道道意令打死之由、嶋津上總入道道鑒所注申也、尤以神妙、弥可抽戰功之狀如件、

『道鑒公御譜ニハ廿八日トアリ』「御譜ニハ廿ノ字イとあり、片書写有之ト記ス」

觀應三年卯月廿五日　　『尊氏』御判

本田熊鬼丸

2409

「道鑑公御譜中」

「仝」

去年九月八日、「御譜中ニハ廿八日トアリ」筑前國金隈合戰之時、父伊集院彦五郎入道迎齊令打死之由、嶋津上總入道道鑒所注申也、尤以神妙、弥可抽戰功之狀如件、

2410

觀應三年卯月廿五日　　『尊氏』御判

伊集院又五郎殿

「仝上」

「載伊地知文書」

去年九月八日、『御譜中ニハ廿八日ニ作ル、写在之』筑前國金隈合戰之時、父中條六郎令打死由、嶋津上總入道道鑒所注申也、尤以神妙、弥可抽戰功之狀如件、

觀應三年卯月廿五日　　『尊氏』御判

中條弥六殿『一本作条』「御譜ハ中条弥六殿トアリ」

2411

「仝」

「仝写在之」

去年九月八日、『同ク廿八日ニ作ル』筑前國金隈合戰時、池上四郎兵衞尉光久令打死之由、嶋津上總入道道鑒所注申也、尤以神妙、弥可抽戰功之狀如件、

觀應三年卯月廿五日　　『尊氏』御判

池上弥四郎殿

2412

『聖栄自記』

氏久御幼少之時は、親之御名代として肥後國迄御上り、名譽之御合戰、數ヶ所之御手負御難儀之處、伊地知御身ニ替、嶋津氏久与名乘打死するに仍、御助り候、御年長ケ今度之在陣ニハ、儀を重家之嗜ニ依而、命輕する所、當座之難儀をも御遁候哉、御内之旁ノ志振舞、小二方ニハ不似と、六ヶ國ノ物語ニ成ける由承傳候、於于今も嗜油断有間敷候、

2413

「伊地知氏文書」『写在官庫』

去年九月八日、『御譜廿八日トアリ』筑前國金隈合戰之時、父伊地知彈正忠季隨打死之由、嶋津上總入道道鑒所注申也、尤以神妙、弥可抽戰功之狀如件、

觀應三年卯月廿五日　　『尊氏』御判

伊地知彦七殿

2414

「道鑒公御譜中」

傳稱、先是尊氏將軍家歸洛於鎭西之後、追退於凶徒、遂本意令靜謐、于時賜貞久歸國之暇、且曰、若有所望宜應請云々、貞久踟躇然答曰、今也退治凶徒、將向一統之代、此外何望之有乎、雖然貴命不可空、爰有一訴訟、伊地知

屈居于獄舍者今已尚矣、得彼之恩免者、何賜如之乎、其故如何、非凶悪之朋黨、爲同番知音云々、將軍家曰、彼之罪科無所欲宥、雖然吾先請達貞久之望、然則不可不達所以蒙恩免也、是以彈正忠下向于鎭西、件之合戰敗軍之時、自稱嶋津又三郎氏久、盡筋力遂戰死、所以道鑒之報厚恩也、

2415

『仝』

北條四郎時政八代之後胤、相模守高時存生之間、號九州探題職、遠江守平英時在鎭西爲成敗、高時滅亡之後不居件職、使大友・小貳・嶋津司九州成敗之權、故筑前州博多之内以稱松口之地占宅地、營屋形令在津、因茲其間號松口殿畢、且亦筑前州今津・本岡・ヒカリ・上妻、豊前州曽井庄、豊後州井田郷、筑後州小鹿庄、件之諸所薩隅日之外所以令領知勤在津也、

2416

『仝』

谷山郡司平忠高爲守護之寇者久矣、殊更鹿兒嶋近所也、敢不可猶豫、是以道鑑引率軍勢令進發、構陣於波平給、給黎・知覧・川邊・別府亦忠高之味方也、即忠高發出軍勢、寄于守護之陣致合戰、于時篠原刑部丞・多胡宗七等令合戰死畢、且亦忠高廻籌策、鹿兒嶋之内以稱牛落之地構一陣、使弟祐玄法師武者致警固塞通路下、此時和泉右衛門兵衛尉忠直馳走、欲自和泉至谷山、然而不得通、於茲忠直使從軍屯青屋松原、單騎忽然進寄陳下、呼出祐玄、已與伏切頸、且一時之間攻破件陣、至于波平之陳、其悦不可勝言乎、委曲在忠直譜中也、

2417

『仝』

道鑒在洛之間、奉請待將軍家尊氏卿於私宅、奔走之餘、百度之有笠懸、道鑒者以爲亭主故、不在射手之列、其外撰上手被定手組、其中一之矢數者高播摩守師冬九十六・嶋津下野守忠氏九十六、和泉右衛門兵衛尉忠直父、其餘者或九十或八十也、將軍家殊以入興之餘、日本一ト爲感言給、

2418

『仝』

令領知信濃國大田莊、故貞久下國之時、請下於當國之本社諏方大明神、爲山門院總社也、此時鷹亦同下給、故鷹狩之時、鷹之鳥以風切之羽、手向于諏方也、他家不知、當家如斯云々、

2419

「和泉氏忠直譜中」

上總入道道鑒欲誅戮谷山郡司平忠高、已結陣於波平、忠高廻籌策、構一陣於鹿兒島之内牛落、使弟祐玄警衛、塞通路及難儀、爰忠直自出水將馳到、雖然往還通路不自由、於茲忠直使從軍止青屋松原、只一騎前到于陣下之濱邊、謂高聲曰、和泉右衞門兵衞尉忠直所以谷山軍陣爲加勢令進發也、此陣者有祐玄警護之聞、雖聽其名者有素、未遂識荆之願、今日不可不見參、一騎俟出陣門之外而已、祐玄亦無猶豫一騎打出曰、不意參會、不可無其興、敢不可打太刀致合戰移時刻、速引組而可決勝負云云、忠直亦謂所以吾好之勝負、而互并轡引組落兩馬之間、忠直大力無隱于天下、故非啻組勝、且亦得祐玄之首、丁此時、陣中之勇士與松原之從軍、同時前寄散火攻戰、陣衆敗北而戰死之外亦散々落行畢、忠直到于波平之陣、令拜謁于　道鑒畢、上自太守、下至諸卒、忠直之名譽、通路之自由、云袷云恰莫不感者、恭以祐玄有餘剛強、不足知謀、是以如斯、到于後世亦謳歌之者也、

2420

「仝上」

屬　征西將軍宮方、在豊後國而於當國卒、

「此谷山郡司ヲ誅戮ノ軍、暦應五年八月ノ軍トハ別ナルヘシ、年間追考スヘシ」

2421

『道鑑公御譜中』「写有之」「畠山匠作可誅伐之由御教書ト朱カキアリ」

將軍家御臺所御領日向國穆佐院嶋津庄事

畠山修理亮・伊東八郎已下直冬与同凶徒等、構城塀濫妨候之間、可令退治之由、所被仰一色少輔(範氏)太郎入道也、可致合力之狀如件、

觀應三年四月廿九日　　『尊氏』(義詮)御判

嶋津人々御中

2422

「野邊文書」

下　野邊野五政式

可令早領知大隅國曽於河村拾壹町嶋津上総入道跡、地頭職・同國郡田村小地頭職貳拾町惣検校入道跡、事

右人、爲勲功之賞、所宛行也者、守先例、可致沙汰之狀如件、

觀應三年四月廿九日

源朝臣(直冬)(花押)

2423 『藤野氏四十四通ノ一』

「校正了」

今月十一日夜八幡凶徒等追落了、且存其旨、且可相觸九州輩之狀如件、

観應三年五月十三日　『尊氏欽』御判

一色少輔(範氏)太郎入道殿

「此古写、御文庫廿二番箱一巻中ニ在リ」

2424 「道鑑公御譜中右文書之次ニ左ノ如シ」

（本文書ハ二四三〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

2425 「道鑑公御譜中」

「正文在比志嶋左京義時」

南方凶徒等、此暗夜仁可忍□東福寺之城之由相巧候旨、伊集院助三郎并市來入□(道)方告申候、就其者、常如此申候之間、雖無心候、此暗夜之間、一族被寄合候て、軍勢三人被差遣、被致警固候者悦入候、恐々謹言、

五月十八日　道鑒（花押）

比志嶋彦(範平)一殿

2426 「在道鑑公御譜中」「正文伊地知縫殿重治」

「伊地知文書」

薩摩國鹿兒嶋郡内田上村半分代官職事、於給分所宛行也、有限於御公事者、任先例、可致沙汰之狀如件、

正平七年五月廿二日　道鑒（花押）

伊地知彦七殿

2427 「道鑑公御譜中」

「正文在比志島左京義時」

（本文書ハ二三三〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

2428 『道鑒公御譜中』「写有之」

將軍家御臺所御領日向國穆佐院嶋津庄事、畠山修理亮(直顕)・伊東八郎已下直冬与同凶徒等、構城塚濫妨候之間、可令對治之由、所被仰一色少輔(範氏)太郎入道也、可致合力之狀如件、

・観應三年六月五日　(義詮)御判

嶋津上總(貞久)入道殿　・

(今川了俊)（花押）　(渋川満頼)（花押）

2429 將軍家御臺所御領日向國穆佐院嶋津庄事、畠山修理亮(直顕)・

伊東八郎已下直冬与同凶徒等、構城塀濫妨之間、可令對治之由、所被仰一色少(範氏)輔太郎入道也、可致合力之狀如件、

『義詮卿』

観應三年六月五日　　(花押)

新田宮執印殿

2430

『藤野氏本四十四通ノ一』

八幡山凶徒没落事、去月十三日御教書如此、案文遣之、早可被相觸分國地頭御家人等也、仍執達如件、

『一色少輔太郎入道ヘ獻』

観應三年六月十八日　　沙弥判

嶋津上總入道(貞久)殿

「此古写、御文庫廿二番箱一巻中ニ在リ」

2431

「道鑑公御譜中」

「正文在清水衆瀬戸口弾兵衛」

嶋津上總入道ヘ鑒以肥後宮令旨、引率薩摩國凶徒并所々悪黨等、遂(逐カ)落大隅國限本城・栗野北里城間、爲退治所發向也、致用意、可抽軍忠之狀如件、

観應三年七月一日(廿カ)　　修理亮(畠山直顯)(花押)

姫木弥四郎殿

2432

和泉忠氏

初實忠　三郎兵衛尉　左兵衛尉　豊後守　下野守

観應三年壬辰七月三日卒、法名観翁、

2433

『調所氏敦恒譜中』

観應三年壬辰、前此足利右兵衛佐直冬(尊氏庶長子、為直義養子、)爲鎮西探題、畠山直顯等亦聽其命、至是七月、直顯聞　道鑒公奉肥後宮(懐良親王)命帥薩兵等、入大隅國攻陷限本城及北里城、在栗野、謀退治之、二十日、直顯乃與敦恒及姫木十郎・姫木五郎四郎等書各一通、使以戒兵皆抽軍忠、二十四日、遂遣其子畠山民部大輔重隆、至大隅國、時蓋敦恒亦偕税所介等迎而降之、(其所与書、蝕滅残欠僅存二三十字、文義不通、然推書体以校比諸、其与姫木氏書如合符契、文意可観足以朱補、故補書、以備考覈、)

2434

『全文書』

嶋津上總入道ヘ鑒以肥後宮(懐良親王)令旨、引卒薩摩國凶徒并所々悪黨等、遂(逐カ)落大隅國限本城・栗野北里城間、爲退治所發向也、致用意、可抽軍忠之狀、執達如件、

観應三年七月廿日　　修理亮(畠山直顯)

調所彦三郎殿

2435

『正文在清水瀬戸口弾兵衛』

嶋津上總入道〻鑑以肥後宮(懐良親王)令旨、引卒薩摩國凶徒并所〻悪黨等、遂(逐カ)落大隅國隈本城・栗野北里城間、爲退治所發向也、致用意、可抽軍忠之狀、仍執達如件、

観應三年七月廿日　　修理亮(花押)(『畠山直顕』)

姫木五郎四郎殿

2436

『正文在帖佐船津村百姓軍右衛門』

嶋津上總入道〻鑑以肥後宮令旨、引卒薩摩國凶徒并所〻悪黨等、遂(逐カ)落大隅國隈本城・栗野北里城間、爲退治所發向也、致用意、可抽軍忠之狀、仍執達如件、

観應三年七月廿日　　修理亮(花押)(『畠山直顕』)

姫木十郎殿

2437

『肝属秋兼譜中』

正平七年壬辰七月二十四日、畠山直顕及子民部太輔重隆、以日隅寄郡兵、爲直冬詢地大隅、大隅巨族税所介等多應之者、秋兼亦以其族属之、

齢岳公自將師于隅州、平山左京亮等属之、連日數戰、直顕乃使別兵遮　公歸路、八月十八日、　公勵衆潰一角還、

○十二月三日、榆井頼仲將薩兵、襲大姶良城取之、四日、直顕使野本藤二行秀、率禰寝道種(即此清種)等、圍大姶良城、曠日不拔、十九日、頼仲乃圍國見城、(遺址今在小根占廨舎丑方二十一町川北村)戰于大手、二十一日、戰于搦手、二十三日、復攻大手、轉向搦手戰于野頸、

2438

『見仝』

一觀應三年十二月三日・同十九日、榆井四郎頼仲國見城大手城戸口并寄來合戰有之、同月廿一日、同人搦手口江寄來合戰有之、同月廿三日、同人大手へ寄來合戰有之、同日、又〻搦手江廻り、外曲輪野首ニおひて合戰爲有之由、申傳候、

2439

『載伊地知氏譜　写在官庫藤野氏四十四通ノ一』

「奉行安盛小太郎(次カ)」

「井田郷御奉書」

嶋津上總入道〻鑒代資光(『酒勾貞阿ノ子』)申豊後國井田郷地頭職事、申狀如此、早退戸次丹後守以下濫妨人等、嚴蜜沙汰付道鑒代、可被執進請取狀、使節更不可緩怠之狀、依仰執達如件、

観應三年七月廿七日　　沙弥(『朱カキ』)在判(「官領字都宮遠江入道」(蓮智))

大友孫三郎(氏時)殿

「道鑑公御譜中ニアリ、写有之ト記セリ」

2440

『志布志寶満寺文書古写』

寶満寺御寄進水田坪付事

厩条内水田注文事

合

西園作

二斗代反冊　一斗代冊

二斗五升代冊

元西園内、今秦二郎丸作一斗代反

以上五反

観應三年七月　日　御代官義政在判「トアリ、写也」

2441

「道鑑公御譜中」

「正文在比志嶋左京義時」

去十□(三)日、石井中務丞寄下大隅、取向城候之處、兼重以下凶徒等取巻彼城、及難儀候之由、馳申候之間、可致後巻候、惣軍勢者若遅々もあるへく候間、以手勢可致後巻候、即時ニ被馳寄候者、就公私悦入候、御一族達にも同申候、相構〳〵、即時ニ被馳寄候者、殊悦入候、恐々謹言、

「貞和五」八月十八日　道鑒(花押)

比志嶋彦一(範平)殿

2442

「道鑑公御譜中」

「正文在比志嶋左京義時」

(本文書ハ二三二二号文書ト同文ニツキ省略ス)

2443

「道鑑公御譜中」

「正文在比志嶋左京義時」

(本文書ハ二三二五号文書ト同文ニツキ省略ス)

2444

『藤野氏文書四十四通之一』

嶋津上總入道々鑒代資光申豊後國井田郷地頭職事、任去七月廿七日御奉書之旨、沙汰付下地於道鑒代候早、仍渡狀如件、

観應三年九月十六日　沙弥正全(請文裏判)

「道鑑公御譜中ニ在リ、写有之ト記ス」

2445

「氏久公御譜中」

「写有之」

「朱ニテ」「将軍家自関東被成下御教書」

父上總入道(貞久)所勞減氣之程、相催分國地頭御家人并同心族、

可誅伐直冬以下凶徒等之狀如件、

観應三年九月十八日　　御判

嶋津又三郎(氏久)殿

2446

「載于南山巡符録追加」

父上總入道(貞久)所勞減氣之程、相催分國地頭御家人并同心族、

可誅伐直冬以下凶徒等之狀如件、

観應三年九月十八日　　御判「義詮ならん」

嶋津判官殿「師久公也」

「此一通ハ師久公御譜中ニアリ、写在閉本ト記セリ、又朱カキニテ将軍家自関東被成下御教書トアリ」

2447

「氏久公御譜中」

「写有之」

「朱ニテ」「一色入道注進状」

大隅日向兩國凶徒退治事、大隅國守護人氏久注進狀謹進

上之、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

観應三年九月廿八日　　「一色少輔太郎入道」沙弥道猷在判

進上　御奉行所

2448

「仝」

「写有之」

「朱カキ」「一色入道殿御施行」

大隅日向兩國凶徒退治事、就注進狀其沙汰旱、仍所遣奉書也、嚴蜜可被加催促、仍執達如件、

観應三年九月廿八日　　沙弥在判

嶋津三郎左衛門尉(頼久)殿

2449

「氏久公御譜中」

「写有之」

「朱ニテ」「坊門」殿御教書　奉行斎藤藤内左衛門尉」

大隅薩摩國凶徒退治事、去六月廿一日注進之狀披見次第、

殊以所感思事、弥廻籌策、可誅伐之狀如件、

文和元年十月三日「壬辰」　　「尊氏」御判

嶋津又三郎「氏久公」殿

2450

『写在官庫』

『奉行斎藤〻内左衛門尉　坊門殿御教書』

大隅薩摩兩國凶徒退治事、去六月廿七日注進狀披見早、依老躰病氣、差遣師久・氏久於彼兩國云〻、籌策之次第、殊以所感思也、狀如件、

文和元年十月三日　　『尊氏』御判

嶋津上總入道（貞久）殿

「此文書、道鑑公御譜中ニアリ」

2451

「師久公御譜中」

「写在閉本」

「朱カキ」

「奉行斎藤藤（両脱カ）内左衛門　坊門殿御教書」

大隅薩摩國凶徒退治事、去六月廿一日注進之狀披見次第、殊以所感思事、弥廻籌策、可誅伐之狀如件、

文和元年十月三日　　御判

嶋津判官（師久）殿

2452

『正本自藤野氏献官庫云』

大隅國寄郡地頭職事、任去年八月十五日御下文之旨、可被沙汰付嶋津上總入道（貞久）〻鑒之狀、依仰執達如件、

文和元年十月十三日　　沙弥（花押）

右京權（一色直氏）太夫殿

2453

『水引執印文書』

故日尊跡事、御口入之間、聊雖申子細候、新田宮御領内卅六坪三反、彦八給分、宮脇薗壹ヶ所事、兼忍方ニ避渡了、於有限社役者、無懈怠可被勤仕候、至于彦八薗者、以後〻年任質券狀、可請出候、但相互不可有違乱之儀、相違之儀、仍爲後日避狀如件、

正平七年十月廿二日　　友躬判

2454

「載和泉家譜中」

肥前國松浦庄内早湊村地頭職嶋津下野守忠氏跡事、任去年十一月二日御下文之旨、可被沙汰付嶋津上總三郎師久之狀、依仰執達如件、

文和元年十月廿六日　　沙弥（花押）

右京權（一色直氏）太夫殿

「此文書、師久公御譜中ニ在リ、正文在巻本ト記セリ」

2455

「野邊氏文書」

2456

於日向國致忠節条、尤神妙也、弥可抽戰功之狀如件、

觀應三年十月廿九日　　（直冬）（花押）

野邊野五殿

「大口高城氏蔵」

このほりそのたしろ□文、ふせた、御てつくり、うはかた卅□一斗九郎二郎しよたゝかいもとあみたにきしん申候、

かわそくの□□くふんならひニししやきうふんの事

合のへくちのミやう

しろ三くわん五百文

一七たんなかた　このうち□んふんハ九郎二郎とのへきうふん

一六たん廿ところ〳〵ニ候、作人（さく）五郎にうたう　一石九斗一升

一八たん　ところ〳〵ニ候、　さく人　三郎太郎　一石九斗五升　九郎二郎殿きうふん

一八たん　ところ〳〵ニ候、　さく人（いまハ二石五升）四郎五郎　一石八斗五升　いや三郎殿きうふん

一三たん卅　おとそう　さく人　三郎五郎　しろ二くわん　いやへいこ殿きうふん

一一たん卅（やまのくちのした）さく人しやうれん　しろ八百文　ふんハ二ねんよりしよたうしやうれん

一五たん大ミやた山中卅　しきふ殿同人しよたう　一石五斗六舛　しろ一貫五百文をなしとしより四郎五郎しよたう

一一たんはりはら　同人　しろ三百文まこ六殿

一二たんやなきのまち　同人　しろ六百文ふんハ三ねんよりしよたうしやうれん

一一たんうとくち　同人　しろ三百文

一一たんわきた　同人　しよたうしやうれん しろ三百文

一二たんわきた　同人いさはらとのゝまこ六殿しやうれんきうふん　しろ七百五文

一一丁ひかた　さく人四郎五郎　しろ一貫二百文

一一丁うちのふなつくた□　このうち五たんハかミの御三くわん（しろ三貫文）きたつゑもん五郎とのゝきうふん

一一たん廿ちのくち　さく人（しよたうしきふ殿）　しろ六百文　これハしなしの四郎五郎殿きうふんいまハ九郎二郎しよたう

一一たん　ゑさきしろ三百文しよたう　同人　これも四郎五郎殿きうふん　をなし物から

一三たんあらまき八百文　九郎二郎とのゝきうふん（せんあミこけしよたう）

一一たんちんしゆてんしやうへいし作人（しよたう）せんあミ　をなし人から しろ三百文

一廿中かきのきのした　同人　をなし人から しろ三百文

一一たんこゑち（こけ殿のち大しひへきしん申しろ百）　さく人　四郎五郎　一斗三升　せんあミから

一一つゑ　かしら　まろたのしろ百　しなしのいや三郎殿（きうふん）　しろ百文

一一つゑ　くち（ことの）　しろ百　同人きうふん（せんほう殿）　しろ百文

一一ちやうたとのふないたたうのはらとのゝ御ふん

御とくふん（をなしく）　きうふんニ八丁五たん中

ミやてらの御きしんのふん

一二たん　すくるの御まつりてん　さく人五郎そうたう
一一つゑ　すくるの九日てん　同人
一廿中　すくるの正月の御くてん　同人
一一たんさかのした　これハこんとひくわんてんニ御きしん候、　同人
一五たんわきた　これハとしころさかこへ御きしん候、　さく人四郎五郎
一一たんわきた　これハとしころうちこつへ御きしん候、　同人
一一たんやまのくち　これハさかこへ御きしん候、　さく人いや四郎
一一たんやまのくち　これハしひに御きしん候、　同人
一一たんやまのくち　これハさくらいのしん御たうに御きしん候、　さく人しやうれん
一三たん卅つゝミ　これハにしたにへ御きしん候、　さく人五郎にうたう
一一丁かりミつ　これハかふりたけのとうゆてんにて候、　さく人しやうれん
一一丁ひた　これハ十丁ほかにて候、ふほうてんにて候、

そうつかう十一丁五たん廿
このうち八丁五たん十ハかミの御ふん、
のこり三丁十ハミやてらニ御きしん候、
一やしきのふん
一所　四郎五郎しろ四百文
一所　しやうれんきぬかた〳〵　御うちへまへをく
一所　三郎太郎しろ三百文
一所　五郎四郎た郎しろ五百五十
一所　九郎太郎しろ二百文
一所　せんあミしろ三百文
一所　しなし四郎五郎とのゝきうふん　あれそのにて候、二百文

右、たいりやくかくのことし、

観應三年十一月十八日

『足利高氏御判』

御判

2457

下　嶋津孫三郎左衛門尉頼久

可令早領知薩摩國嶋津庄内加世田別府半分地頭職事

右、爲勲功賞、大隅國桑郷東西替、所宛行也者、早守先例、可致沙汰之狀如件、

文和元年十二月十二日

2458

薩摩國嶋津庄内加世田別府半分地頭職事、早任今月十二日御下文之旨、可沙汰付嶋津孫三郎左衛門尉頼久之由、可令下知代官給之狀、依仰執達如件、

文和元年十二月廿四日　　沙弥在判

右京權太夫殿（一色直氏）

「此二通、川上頼久譜中ニ在リ、写在二三巻トアリ」

2459

『見雑抄』

大隅國大姶良合戦事、致軍忠、尤神妙、扨（ママ）差遣軍勢也、弥可抽戦功之狀如件、

文和元年十二月廿五日　『氏久ノコト』（畠山直顕）修理亮（花押）

『小原地頭ナリ』得丸六郎五郎殿

『良世ノ弟得丸孫七ト云、觀應中百引加瀬田城攻ニ軍功アリ、應永六年、広久得丸但馬守ニ、姶良庄得丸名此一円ヲ与フ、良世ノ族ナルヘシ』

（本文書ハ底本ニ欠ク、鹿児島県立図書館本ニヨリ補フ）

2460

「半切ロスリハキ切」

奉候畢□武州御代官飛脚無相違下着、日□都鄙不審細々雖（ママ）奉候喜入候、如仰雖無何事候、可申奉候之處、此間者依無吴不審候、無其儀候、此御音信を以入候、兼亦入道狀案文令一見候訖、自日向も連々可申奉之由、被申下候也、常奉候者喜入候、恐々謹言、

「文和年中ナラン」三月廿日　「一色少輔弥三郎」源範親（花押）

（表紙）

貞久公
師久公　自文和二年
氏久公　至同三年

前編　舊記雜錄　卷廿四

「國史道鑑公」

「文和」二年癸巳、南朝正平八年、春二月朔日、一色道猷以　齡岳公爲日向本郷・大隅加治木院地頭職、賞金限之軍功也、拠齡岳公旧譜、文和二年二月一日、沙弥一色道猷執達状、文和四年三月頼兼目安状、本郷、即荘内北郷、見目安状、加治木院、即加治木郷、見郡村高辻帳頭書、市來太郎左衛門尉氏家・東郷藏人道義等凡十五人、皆應足利直冬、定山公　齡岳公擊之、不克、三月五日、二公上書、乞師於幕府、拠定山公・齡岳公旧譜、田代上田屋敷百姓主膳所蔵系図、在國司氏別族、有東郷氏、氏家、時家之子也、拠市來次左衛門系図、市來時家、見上巻建武四年、十日、賜　公教書曰、注進狀具報討賊事、宜趣國中地頭御家人共擊凶徒、拠道鑑公旧譜、賜　齡岳公教書、亦如之、拠齡岳公旧譜、賜大隅地頭御家人教書曰、氏□注文、具報討賊狀、儘好、宜益立功、同上、以上教書三通皆亡、旧譜写録其文、無名、止云御判、拠是日賜執印友雄教書有義詮花押、三通亦義詮書乎、足利義詮賜執印友雄書曰、島津判官注文、具報功狀、儘好、宜更務立戰功、拠執印久馬文書、此書無名、然有義詮花押、故云義詮教書、夏五月十一日、足利義詮下文、賜　齡岳公在國司入道道超舊邑、賞功勞也、拠齡岳公旧譜、下文止云薩摩島津荘在国司入道道超、名闕、按田代上田屋敷百姓主膳所蔵系図、醍醐帝之曽孫源里用、為薩摩在国司、伝六世至助兼、為大前姓、助兼孫曰道直、為祁答院郡司、子孫世襲其職、入來院主馬家蔵修理亮平朝臣元亨四年十二月十六日下知状、称時吉名総領主在国司入道道雄、時吉、即祁答院忠光法名地、道超、豈其後耶、又下文、使三郎左衛門尉法師道珍法名領知覧院郡司四郎忠世舊邑、亦賞有功也、拠島津支流系図、支流系図云、尊氏下文、然無名及花押、拠上下文有義詮花押、疑亦義詮下文、六月六日、　公使伊地知季匡嗣其父職、領豊後井田郷柴北名半分地頭代官職如故、拠道鑑公旧譜、秋七月九日、足利義詮賜　定山公　齡岳公教書各一通、使擊薩摩凶徒、且言前日官軍不利、越在濃州垂井驛、曽未幾日、勤王之師麕至雲集、當以明日向京師、拠定山公・齡岳公旧譜、太平記、文和二年六月九日、山名右衛門佐師氏、与父左京太夫時氏俱引兵、寇京師、十三日、足利義詮奉後光厳帝、如濃州垂井駅、東山東海北陸之兵、日集於此、参考引毛利家蔵天正本云、十文和二年七月十日、義詮発垂井、向京師、而義詮書云云、互足相証、十日、榆井頼仲率薩摩凶徒、築下大隅木谷城、拠池端平左衛門・根占越右衛門家蔵文書、肝属郡花岡郷、有木谷村、二十七日、足利義詮賜　定山公　齡岳公教書各一通、去去月十四日、注進狀至、具得功狀、儘好、此間凶徒逃遁、昨日寡人已還京師、其俾國人聞知、

益立戰功、（拠定山公・齡岳公旧譜、参考太平記、七月二十五日、山名父子・四条少将等奔本国、園太暦、七月二十六日、義詮還京師、義詮二十七日教書、言昨日已還京師、互足相証、去月十四日注進状、文亡、）冬十月九日、足利義詮賜　公教書曰、幕府屢下御臺所湯沐邑穆佐院及島津院之命矣、而畠山修理亮・伊東下野守拒之、宜討其罪、且以其地、附給主代若林彈正忠年秀、（拠道鑑公旧譜、畠山直顕、奪拠穆佐院島津荘、使公撃之、事見去年四月、而此書云云、豈幕府諭畠山直顕、使還穆佐院・島津院、不聴、故復使公撃之者欤、島津院蓋指新納院、伊東下野守、藤内左衛門尉祐広之子、其説並見前年、）二十六日、齡岳公上禀文、答七月九日、二十七日之教書也、（拠齡岳公旧譜、二十八日、）公與小田伊賀守書曰、近聞凶徒既遁、幕府還京、誠歡誠喜、會國中多難、未可遠離、爰上書札、以充賀儀、伏乞爲謝左右、（拠道鑑公旧譜、）又上書於奉行卿曰、得七月九日教書、承中將殿還京、凶徒逃去、此間凶徒聞之、望風而下、其未下者、遣二子及澁谷氏撃之、合戰之事、尋當注進、（同上、教書不見旧譜、按山名時氏還本国、義詮還京師、皆為是年事、而此書原文曰、得去年七月九日教書、蓋転写者誤増年字云、）十一月、　定山公移書、告薩摩國地頭御家人曰、奉去月九日及二十七日教書、發兵討凶徒、因諭、今月十日内、皆會碇山城、（拠定山公旧譜、十月九日、二十七日教書、不見旧譜、疑指七月九日、二十七日書、是年十一月、公討凶徒、独見於此、別無所考、）

『文和』三年甲午、（南朝正平九年、）春二月六日、足利義詮賜　公教書曰、得注進状、足見盡節之状、近日當討中國鎮西、宜益務立軍功、（拠道鑑公旧譜、）賜　齡岳公教書、亦如之、（拠齡岳公旧譜、）十二日、幕府賜　公及　齡岳公教書各一通、並如義詮六日書、（拠道鑑公・齡岳公旧譜、）榆井頼仲之黨、與南方凶徒、據鹿屋院一谷城、二十二日、禰寝清有・清種・清増等、夜攻之、二十四日、陥之、又攻木谷城、拔之、（拠小松氏・池端平左衛門・根占越右衛門家蔵文書、榆井頼仲築木谷城、在前年、）二十五日、又陥大姶良城、（同上、清成・清増、囲榆井頼仲於大姶良城、見上元年、至是陥之、而頼仲結局不詳、拠後延文二年、清増等又攻頼仲於胡麻崎城、蓋自大姶良、奔胡麻崎、）夏四月十日、　定山公上注進状於奉行所曰、薩州凶徒蜂起、地頭御家人及澁谷氏、奔命不暇、宜各賜教書、以奨勵之、交名注文、具錄別紙、（拠定山公旧譜、此時宅万城已陥、薩州凶徒、会伊集院伊作田城、将攻碇山城、聞畠山匠作等、将入日州真幸院、隅州下大隅各還其邑、蓋欲与匠作合兵、来寇、具見定山公注進状、又一色少輔孫三郎範親、是年三月晦日注進状、聞日向凶徒畠山直顕等将入真幸、又聞大隅薩摩両国将攻島津上総入道所居城、齡岳公文和四年六月十八日注進状、与球麻一色孫三郎殿俱発兵撃凶徒、以上注進状、皆言三州凶徒事、合而観之、則亦足以見当時騒動之状矣、少輔孫三郎範親、探題道猷之宗人也、時屯球麻宅万城、事不詳、）五月二十五日、一色道猷、使　公領鹿兒島郡司職、中村・郡本村・田上村・及和泉新荘名主職、賞戰功也、（拠道鑑公旧譜、）和泉荘下司政保、與名主知色彦三郎入道行覺合兵、將攻木牟禮城、定山公引軍救之、六月十日、先攻尾崎城、十二日拔之、（拠定山公旧譜、尾崎城、行覚所拠、遺墟在出水別館西北一里十七町下知識村、）二十日、　定山公　齡岳公、上幕府注進状各一通、報討賊状也、（拠定山公・齡岳公旧譜、）秋七月二十四日、　齡岳公以田代七郎權領大隅串良院半分地頭職事、（拠齡岳公旧譜、田代甚右衛門家蔵文書、田代清久応永五年十二月二十五日譲状云、齡岳公賜田代七郎入道道清書二通、則

此云田代七郎、蓋道清、但田代甚右衛門系図、道清始称彦太郎、後称肥前守、不云其称七郎、蓋或逸之、道清、野上田伊予坊之孫也、伊予坊、見上巻建武三年、八月十一日、幕府賜　公教書、褒軍功也、拠道鑑、公旧譜、

初一色道猷以　齡岳公爲北郷地頭職、事見前年、既而、公以北郷者叔父尾張守左衛門尉改称尾張守、資忠之賜邑也、請以他邑易之、二十五日、道猷與　公東郷藏人等舊邑、以易北郷、拠齡岳公旧譜、文和三年八月二十五日沙弥執達状、文和四年三月頼兼目安状、文和元年四月二十五日、幕府賜島津資忠北郷、十二月十二日、資忠如北郷、居安永、二年二月、道猷以自二年二月、至於是年是日、閏十九月、齡岳公為北郷地頭職、至是罷之、豈其間齡岳公果領北郷之地耶、拠旧譜、抑無乃旧譜誤以文和元年十二月十二日為四年十二月十二日乎、別無耶、文和四年十二月十二日賜資忠北郷、豈暫収其地、而更改封之所考、姑舎是、東郷藏人旧邑、地闕、先是、　公老倦于勤、使　定山公領薩摩事、使　齡岳公領大隅事、於是、　定山公居薩摩郡碇山城、　齡岳公居鹿兒島郡東福寺城、拠定山公・齡岳公旧譜、文和元年九月二十八日一色道猷注進状、称齡岳公為大隅国守護人、二年三月五日定山公注進状、白薩州凶徒事、齡岳公注進状、白隅州凶徒事、拠此則定山公領薩摩、齡岳公領大隅、応是文和元年二年之際、而此年畠山直顕、将攻東福寺城、軍於野本原羅、齡岳公与之連戦数日、則此時公既在鹿児島明矣、故書之於此、山田聖栄自記、齡岳公為大隅守護職、而居東福寺城者、因定山公之請也、山田聖栄自記、蓋定山公居碇山城、而鹿児島為薩州咽喉之地、守難其人、故使齡岳公居之、九月、畠山修理亮直顕、將攻東福寺城、分兵爲二路、一軍野本、一軍原羅、　齡岳公出輕卒擊之、連戰數日、多田七郎、挺身而進、大呼曰、嘗聞島津殿有山田彌九郎殿、今日請相見也、彌九郎應聲而出、與七郎短兵接戰、又欲相搏、兩軍鼓譟、就中推隔、軍遂交綏、拠齡岳公旧譜、山田新助系図、山田聖栄自記、野本原羅合戦、旧譜無年月日、山田新助系図、言文和三年九月、今從之、畠山修理亮直顕、旧譜作畠山治部大輔国長、按志布志大慈寺蔵直顕寄進状数通、其中文和五年二月二十八日状、称治部大輔修理亮、文和五年即延文元年也、延文二年二月二十九日状、称治部大輔、閏七月二十日状、八月二十七日状、皆称宮内大輔、三年八月二十二日状、復称治部大輔、今拠文和五年称修理亮、則是年作修理亮為是、又参考太平記巻三十三、引金勝院本云、畠山治部大輔名国久、而旧譜書国長、未詳所拠、姑舎之、山田新助系図、山田氏之先、出自陸奥守平貞盛、伝七世至武蔵三郎左衛門尉有国、有国孫曰式部大輔有貫、有貫始事得仏公、領日置郷山田、因以為氏、弥九郎有貫之五世孫也、名有家、野本原羅、皆属鹿児島郡、野本在府城南一里、原羅在府城西半里、今作原良、三日、幕府賜　定山公教書、褒美尾崎城之捷也、拠定山公旧譜、賜　齡岳公教書、答六月二十日注進状也、拠齡岳公旧譜、十八日、　定山公上書於奉行所曰、聞一色孫三郎殿方與肥後凶徒須惠多良木菊池内河等「是歳酒勾資光属細川式部太夫、後与州、師于播州」戰、先遣敵賊助之、伏乞爲白幕下、拠定山公旧譜、此書首言陷知色城、置兵戍之、其事已見前年、茲不復言、知色城即尾崎城、　齡岳公上注進状、亦如之、拠齡岳公旧譜、十九日、幕府賜　島津道惠書、褒美軍功也、拠伊作家譜、

一文保元年九月十九日、遠江守平朝臣判ニ而、大隅大炊助三郎忠國法師法名道助代忠幸と書出候文書壹通、

一元亨四年八月廿三日、沙弥判ニ而、大隅助三郎忠國申と書出候壹通、

一嘉暦二年六月十日　忠國判

兩名連判請取状壹通　道助判

一嘉暦参年六月十七日、藤原忠國請文

大隅助三郎請文と有之壹通、

一右同年八月廿五日、修理亮〻大隅助三郎忠國と書出候壹通、
一建武元年五月日、薩摩國滿家院内比志嶋彦太郎義範謹言上と書出候中ニ、同國伊集院大隅助三郎忠國（童名犬一丸）と見得候壹通、
一建武四年三月廿三日、薩摩國大隅助三郎忠國と書出候比志嶋忠經披露狀壹通、
一五月十八日、道鑒公御判物、伊集院助三郎云〻見得候壹通、
薩摩國滿家院比志嶋名地頭得分請事、
右、當名地頭職、今年癸巳年より丙申歳の三月三日まて三ヶ年分、名より請申され候上ハ、地頭米并細〻地頭得分以下検断万雑公事を、一向とゝめ候了、名のはからいたる

（本文書八二四六一号島津國史記事中ニ挿入ナリ）

2463

「道鑑公御譜中」
「写有之」
『一色殿御代官加藤左衞門入道請文』

被尋下候畠山修理亮直顯并嶋津上總入道〻（貞久公）鑒忠否間事、匠作者令与同兵衞佐殿、於御臺御領穆佐院并嶋津近江守時久所領新納院、（巳上日向國嶋津庄内）度〻及于合戰、致押領之間、御敵段無子細候、次道鑒者、於御方致忠節候之条、世以無其隠候、若此条偽申候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和二年正月廿八日　　沙弥昌運（連イ）裏判

2464

「仝」
『仝』
『大友刑部大輔代官等請文』

畠山匠作・嶋津上總入道事、如被尋下者、属凶徒哉、爲御方致忠節否、委細可言上云〻、此条去觀應元年、匠作稱奉属左兵衞佐殿、差遣軍勢於嶋津近江守時久城、（日向國新納院）、數月致合戰、被追落彼城候、迄于翌年（觀應元年）、爲御敵之条無相違候、其後匠作進退不存知候、但旧冬進代官於京都、関東被申御教書之由承及候、次上總入道事、爲御方致忠功候、去年以後、上總入道進退雖巨細不存知候、属御敵之条不及承候、此条偽申候者、可罷蒙佛神御罰候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和二年正月廿九日　　沙弥觀恵（源イ）裏判

2465

「氏久公御譜中」

「正文有之」

日向國本郷并大隅國加治木院（加治木郡司跡）、地頭職事、爲勲功之賞、所宛行也、早守先例、可令致沙汰、仍執達如件、

文和二年二月一日　　沙弥（花押）（「一色少輔太郎入道道猷判」）

嶋津又三郎（氏久）殿

2466

「在文庫」

將軍家御臺所御領日向國穆佐院并嶋津院事、度々被仰處、畠山修理亮・伊東下野守等不承引（秀カ）之間、加對治、可沙汰付下地於給主代若林彈正忠年季之旨、所被仰付守護人也、早馳向、可致合力之狀如件、

文和二年二月九日　　御判（義詮カ）

嶋津上總（貞久）入道殿

2467

「師久公御譜中」

「案文在閉本」

「朱カキ」「奉行斎藤藤内左衛門尉　御方并御敵等交名注文」

『徑イ』沙弥聖經裏判

薩州凶徒等蜂起之間、爲退治打立之處、就太宰府浦城合戰難儀、御方軍勢等引歸面々城塁候之間、依爲無勢不成其功候、於于今者、兵衛佐殿宮方令同心、弥蜂起之間、當國難儀候、急速被成下御教書、相觸御方軍勢、可廻合戰之籌策候、仍御方并御敵交名注文一通進覧之、委細之旨、代官貞河（「河異本」）可令言上候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和二年三月五日　　左衛門尉師久上

進上　御奉行所

2468

「朱カキ」「右注文」

一薩摩國凶徒等注文

市來太郎左衛門尉　　東郷藏人

在國司次郎入道同一族　　池山彦四郎入道

寄田李助　　伊作田兵部丞

牛屎左近將監　　羽月彦次郎

山野孫次郎　　篠原（「藤異本」）九郎大夫同一族

和泉下司諸太郎兵衛尉　　上村六郎三郎入道

井口弥太郎　　杉三郎入道

知色三郎入道

右、注文如件、

2469

「氏久公御譜中」

「写有之」

大隅國凶徒蜂起事、畠山修理亮直顯子息、爲大將、引卒日州士卒并隅州寄郡軍勢等、去年七月廿四日打入大隅國之刻、税所介已下國中爲宗仁等、太略爲佐殿方、属于彼手候旱、然而至于兩月、度々致防戰之處、隅州・日州兩國凶徒等、令引合、差塞諸方通路之間、無力打破一方陣、同八月十八日引退于薩州候訖、依之、合戰之次第云、御方敵交名注文、去年度々令注進言上候訖、雖然、彼注文重進覧之、今又宰府合戰事、宮方凶徒等依致後巻、一色殿被引退候之刻、當國弥蜂起以外候、嚴蜜被經御沙汰、被差下大將、可令退治候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和二年三月五日（『癸巳』）　藤原氏久上

進上　御奉行所

2470

「氏久公御譜中」

「写有之」

「朱ニテ」「御感御教書　奉行斎藤藤内左衛門尉」

大隅國凶徒等退治事、注進狀披見旱、尤神妙、相催分國地頭御家人等、弥可廻凶徒退治籌策狀如件、

文和二年三月十日（『南朝正平八年ニアタル』）　御判（義詮カ）

嶋津又三郎（氏久）殿

2471

「仝」

「朱カキ」「御感御教書　奉行斎藤藤内左衛門尉」

大隅國凶徒退治事、氏久所注申也、尤神妙、弥可致忠節之狀如件、

文和二年三月十日　御判（「尊氏」（義詮））

大隅國地頭御家人等中

2472

「道鑑公御譜中」

『写在之』

大隅薩摩兩國凶徒退治事、注進狀披見旱、尤神妙、相催兩國地頭御家人等、弥可廻凶徒退治籌策之狀如件、

文和二年三月十日　御判（義詮カ）

嶋津上總入道（貞久）殿

2473

「仝」

『仝』

『奉行斎藤〻内左衛門尉』

島山修理亮直顯、於御方致忠節之由申之云〻、爲事實否、以起請之詞、可被注申之狀如件、

文和二年三月十日　　「高氏カ」(義詮)御判

一色少(範氏)輔太郎入道殿

2474

『水引執印蔵本』

於薩摩國致忠節之由、嶋津判官所注申也、尤以神妙、弥可抽戰功之狀如件、

文和二年三月十日　　「義詮卿」(花押)

新田宮執印左(友雄)衛門大夫殿

2475

『調所氏譜中敦恒傳』

文和二年癸巳四月、前此大隅目代及惣検校入道尊西等、恣掠主神司所職田畠等、敦恒乃陳所世遵守護旨、以傳領之來由、有以所請、至是十三日、守護代承旨許之、如其所請也、

2476

『仝文書』

大隅國主神司敦恒申所職所帶名田畠□御目代并惣検校入道尊西等、任雅意、令□門重代相傳□道、且守前〻守護人下知狀、□□(遠カ)□乱不見放、可致其沙汰之狀如件、

文和二年四月十三日　　藤□

守護代

2477

『水引執印文書』

薩摩國凶徒誅伐事、相談嶋津判官師久、可被致忠節、其子細可令注進也、仍執達如件、

文和二年四月廿六日　　(一色直氏)右京權大夫(花押)

新田宮執印左(友雄)衛門大夫殿

2478

「北郷資忠譜中」

文和二年癸巳五月九日、被任尾張守、是從太守貞久公、在洛之日如斯、

2479

「氏久公御譜中」

「正文有之」

（義詮）
（花押）

下　嶋津又三郎氏久

可令早領知薩摩國嶋津庄内在國司入道〻超跡事

右、爲勲功賞、所宛行也者、早守先例、可致沙汰之狀如件、

文和二年五月十一日

「右氏久公ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中歴代亀鑑之中ニアリ」

2480

『高氏』
御判

下　嶋津三郎左衛門尉『忠光』法師　法名道珠

可令早領知薩摩國嶋津庄内智覧院郡司四郎忠世跡事

右、爲勲功賞、所宛行也者、早守先例、可致沙汰之狀如件、

文和二年五月十一日

「此文書、佐多氏元祖忠光譜中ニ在リ」

2481

「藤野家文書」

□（御判）

□（下）　□（島津又）三郎□（氏久）

可令早領知薩摩國在國司次郎入道〻超跡事

右、爲勲功之賞、所宛行也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

文和二年五月十二日

2482

薩摩國滿家院比志嶋名地頭得分請事

右、當名地頭職、今年癸巳年より丙申歳の三月三日まで三ヶ年分、名より請申され候上ハ、地頭米并細〻地頭得分以下検断万雑公事を、一向とゝめ候了、名のはからいたるへく候、仍狀如件、

正平八年歳次癸巳五月十八日　沙弥（花押）

「今二通同案、明年丙申歳より己亥歳迄云〻、正平十年歳次乙未十月十九日他文おなし、一通ハ十三年歳次戊戌十二月廿一日トアリ」

2483

「氏久公御譜中」

「写有之」

「朱カキ」
「御施行」

嶋津又三郎氏久申薩摩國在國司次郎入道〻超跡事、早任今月十一日御下文之旨、可沙汰付下地於氏久代之由、可令下知代官給之狀、依仰執達如件、

「御譜ニハ十二日トアリ、十一日是カ」

文和二年『癸巳』五月廿二日　沙弥在判

右京權大夫殿（一色直氏）

2484

「佐多忠光譜中」「写在二三之巻」

薩摩國嶋津庄内智覧院郡司四郎忠世跡事、早任今月十一日御下文之旨、可沙汰付嶋津三郎左衞門入道道珎之由、可令下知代官給之狀、依仰執達如件、

文和二年五月廿二日　　沙弥（在判）

右京權大夫殿（一色直氏）

2485

『正文在伊地知』「縫殿重治」

「伊地知文書」

豊後國井田郷内柴北名半分地頭代官職（伊地知弾正忠季随）跡事、所宛行也、有限年貢濟物以下、任先例、可致其沙汰之狀如件、

文和二年六月六日　　道鑒（花押）

伊地知彦七殿

「道鑑公御譜中ニ在リ」

2486

大隅國小濱十郎氏純已下内凶徒（通脱カ）云々、不日馳向可退治之、次彼跡事、爲兵粮料所、所預置也、令領掌之、可抽軍忠之狀、仍執達如件、

文和二年六月廿一日　　修理亮（畠山直顯）（花押）

2487

「越前島津氏七代忠兼譜中」

嶋津周防守忠兼申相模國山内岩瀬郷并倉田郷等事、飯田七郎左衞門代率多勢、打入當所、致合戰、殺害忠兼代池田右衞門尉以下輩云々、爲事實者、尤以重科、鎭狼籍、無相違之樣、可被致沙汰也、

「朱カキ」「文和二年」六月廿四日　　（尊氏）（花押）

修理大夫殿

2488

「在氏久公御譜中」

「写有之」

「朱カキ」「自濃州垂井宿為斎藤左衞門尉奉行被成下御教書案」

京都合戰難儀之間、一旦雖引退濃州、方々官軍馳加之上、將軍家已御上洛、先陣勢參着之間、明日十日所責上也、其堺事、同心之輩相共可退治凶徒等、且歸洛之時、可着（差カ）下討手之狀如件、

文和二年七月九日　　「朱カキ」『義詮防門殿』御判

『癸巳』

嶋津三郎左衞門尉殿「氏久公也」

2489

京都合戰難儀之間、一旦雖引退云々、

「御同案ニテ末文略ス」

文和二年七月九日　　「義詮」御判

嶋津判官殿「師久公」

「此一通、師久公御譜中写在閉本トアリ、同年同日ノ同文、氏久公宛ト同シ」

2490

「写有之」

「氏久公御譜中」

「朱カキ」「奉行大野兵庫允」

去月十四日注進狀披見了、於國致忠節之条、尤以神妙也、既凶徒没落之間、昨日廿六日令入洛了、早相觸國人等、弥可抽戰功之狀如件、

文和二年七月廿七日「癸巳」　　「義詮」御判

嶋津三郎左衛門尉（氏久）殿

2491

「載于南山巡狩録追加」

去月十四日注進狀披見了、於國致忠節之条、尤以神妙也、既凶徒没落之間、昨日廿六日令入洛了、早相觸國人等、弥可抽戰功之狀如件、

文和二年七月廿七日　　「義詮公ならん」御判

嶋津判官殿「師久公也」

「此一通、師久公御譜中ニ在リ、写在閉本、奉行大野兵庫允ト朱カキアリ」

2492

「載于南山巡狩録追加」

嶋津四郎左衛門尉實（成脱カ）申軍忠事

右、今年文和二六月日、山名豆州以下南方凶徒等乱入洛中之間、同九日、山門東坂本御開後、同十三日、濃州垂井御陣御座之由依承、自攝州馳参、属于當御手、同七月十日、御上洛之間、至于江州清瀧・佐馬替・小野四十九院・武者寺・守山、同御入洛之次、并所々御陣御共仕、致忠節之上者、賜御證判、爲備亀鏡、恐々言上如件、

文和二年七月　日　　「大高重成」（花押）

2493

『種子島家蔵』

日向國凶徒退治事、致軍忠上、尤神妙、弥可抽戰功之狀如件、

文和二年八月廿三日　　「足利義詮公」（花押）

「六代左近将監時充」肥後左近將監殿

2494

「道鑑公御譜中」

『正文在之』

將軍家御臺所御領日向國穆佐院并嶋津院事、度々被仰之處、畠山修理亮・伊東下野守等不承引之間、加退治、可沙汰付下地於給主代若林彈正忠年秀之旨、所被仰守護人也、早馳向、可合力之狀如件、

文和二年十月九日　　（義詮）（花押）

嶋津上總（貞久）入道殿

「按ルニ、穆佐院島津庄トアルハ、穆佐院カ即島津庄ノ意ナリ」

「右ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中歴代亀鑑中ニ在リ」

2495

『入來院氏文書』

（端裏書）「京都御教書案」

將軍家御臺所御領日向國穆佐院并嶋津院事、度々被仰之處、畠山修理亮（直顯）・伊東下野守（祐氏）等不承引之間、加退治、可沙汰付下地於給主代若林彈正忠年秀之旨、所被仰守護人也、早馳向、可合力之狀如件、

文和二年十月九日　　（義詮）御判

澁谷石見權守（重門）殿

2496

『肝屬秋兼譜中』

正平八年癸巳、北朝文和二年、七月十二日、榆井四郎賴仲其弟又四郎賴重、以薩州兵築木谷城、置兵戍之、初

齡岳公自將伐我黨於隅州、畠山直顯既募州兵、多附直冬、鮮附公者、於是、十月二十六日、復上　幕府書、請之賞罰、以奬戰士、

2497

『氏久公御譜中』

「写有之」

『奉行楢原左近大夫殿　大隅殿御注進　尊氏將軍家脚力御中間彦四郎持上云々』

注進　大隅國凶徒等之事

抑畠山修理亮直顯、爲佐殿御方、引卒日州逆徒等、去年七月廿四日、打入大隅國之段、度々注進言上仕候早、仍隅州凶徒等交名注文一通進覽之、將又捨所領、於御方屬于氏久之手、連々致合戰之輩交名注進一通、令進上候、彼凶徒等爲退治馳向候、被成下御教書候者、弥可致忠節候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和二年十月廿六日　　左衞門尉氏久上

進上　御奉行所

2498

『仝』

「写有之」

大隅國於御方致軍忠之輩交名注文（可被成下御感人数之事）

平山左京亮　加治木中務入道　池袋弥五郎（イ孫）

同弥六　木房太郎　同三郎二郎

簗瀬左衛門太郎　小田次郎　同平四郎

別府次郎兵衛尉　菱刈平良彦太郎一族

同重富藤平（今者打死）跡輩　牧右衛門次郎入道　栗野郡司

鎌田藤内兵衛尉　床并宮内左衛門尉

正八幡宮先社務　弥勒寺執當房道慶

同舎弟九郎左衛門尉　同舎弟十郎三郎

正八幡宮神官所司分（調所彦三郎教直ノ事ヲサス）　杉五郎

東郷藤左衛門入道　同荒瀬九郎

吉田左近藏人清忠（但清忠参于御方云々）

右、注進如件、

2499

『仝』

大隅國佐殿御方凶徒等交名注文

税所介一族　加治木彦次郎一族

祢寝郡司一族　修理所弥太郎一族

姫木郡司一族　羽月（坂イ）孫太郎一族

小川郡司一族　蒲生彦太郎一族

小濱十郎一族　敷根村預所

廻村預所　肝付八郎兼重（今者死去跡輩一族）

末次六郎入道（今者死去）跡輩同一族　溝邊孫太郎一族

野邊孫七盛忠（今者死去）跡輩同一族　平山因幡前司入道一族

2500

『仝』

『奉行杉原左近大夫殿　大隅殿御請文』

去七月九日、同廿七日、兩度御教書今月十日到來、謹拜見仕候了、抑隅州凶徒蜂起之事、任被仰下之旨、急速可廻退治之術候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和二年十月廿六日　左衛門尉氏久請文

「末ニ」「文和三年二月六日注進状云々末ニアリ、此注進状ノ次ニ入ルヘシ、参考スヘシ」

2501

「道鑑公御譜中」

『案文在官庫』

『奉行椙原左近太夫』

御上洛之間、凶徒等先立没落之由承候之条、先以目出畏

入候、其間子細、馳参可令言上候之處、分國逆徒等退治最中候間、捧愚狀候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和二　十月廿八日　　沙弥道鑒上

進上　小田伊賀守殿

2502

「仝上」

『仝』

去七月九日御教書謹拜見仕候早、抑御上洛之間、凶徒等先立没落之条、天下大慶目出相存候、就其御敵等降参仕候、其外凶徒等爲退治、差向愚息師久・氏久并澁谷一族等相共候、合戰之次第追可令言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和二　十月廿八日　　沙弥道鑒上

進上　御奉行所

2503

「齡岳公御譜中」

「写有之」

去十日御狀同十三日到來、奉候了、抑御分國退治事目出候、隨而近所凶徒等事、承候了、當郡難閑最中候、御合戰難儀候者、重承候而、軍勢少々可進候、不可有御等閑候、恐々謹言、

『癸巳』文和二年十一月十四日　　源範親在判

嶋津三郎左衛門尉(氏久)殿御返事

2504

「道鑑公御譜中」

『写有之』

「一色右馬権頭殿御狀」

去九月八日白浜治太夫蔵本作去九月十八日、御狀委細悦承候了、抑京都関東之事、弥無爲無事、目出無申計候、爲御不審、將軍家御入洛注文令進候、可有御覧候、始ハ中將殿爲中國西國退治、可有御下國候『向イ』けるか、さ様ニ候てハ、何様兄弟相論ニ、人々かこち申へく候間とて、已將軍家可有御下向之由議定ニ而、被仰下候、兼又大友日向ニ罷着候間、來八日必定可打立之由、申候之間、當年も可差寄候、菊池此間博多ニ候『けイ』つるか、中ニとりこまれ候てハ不叶『可イ』候とて、肥後ニ引歸候、鎮西も如此候へハ、目出度存候、將又、佐殿(直冬)中國ニ『御イ』被座候か、可降参之由於雖被申候、無御承引『イナシ』候之由、申下へく候、此邊退治候者、急速日向へ可被罷下候、其時者、一向御方様可憑存候、事期後信候、恐々謹言、

文和二年十一月十八日　『一色』　右馬權頭範光在判

謹上　嶋津上(貞久)總入道殿御返事

追啓、飯盛城難儀ニ候之間、馳向候て、後攻仕、凶徒追拂、京地無相違候へハ、悦喜無申計候、定御同心候欤、重恐〻謹言、

2505

「師久公御譜中」

「案文在閉本」

「朱カキ」「自判」官殿國人中廻文」

去月九日、同廿七日兩通御教書如此、仍爲凶徒退治、所打立也、早今月十日以前、可被馳寄碇山城、仍執達如件、

文和二年十一月　日　左衛(師久)門少尉在判

薩摩國地頭御家人御中

2506

「氏久公御譜中」

「防門殿奉行楢原左近大夫」「朱書也」

注進狀披見了、忠節之至、尤以神妙、中國并鎭西討手事、所有其沙汰也、弥可抽戰功之狀如件、

『正平九年也』『甲午』

文和三年二月六日　『尊氏』　御判

嶋津三郎(氏久)左衛門尉殿

2507

『写有之』

注進狀披見早、忠節之至、尤以神妙、中國并鎭西討手事、所有其沙汰也、弥可抽戰功之狀如件、

文和三年二月六日　『尊氏カ』　御判

嶋津上總入道殿『道鑑公也』

2508

「道鑑公御譜中」

「写有之」

大隅國於御方致軍忠之輩交名注文(可被成下御感人數事)

平山左京亮　加治木中務入道　池袋弥五郎

同弥六　木房太郎　同三郎

築瀬左衛門太郎　小田次郎　同平四郎

別府次郎兵衛尉　菱苅平良彦太郎一族

同重富藤平(今者討死)跡輩　栗野郡司

鎌田藤内兵衛門尉「本ヽ」　床并宮内左衛門尉

牧右衛門次郎入道

右、注進如件、

2509

大隅國佐殿御方凶徒等交名注文

税所介一族　加治木彦次郎一族

祢寝郡司一族　羽坂孫太郎一族
小河郡司一族　蒲生彦太郎一族
小濱十郎一族　肝付八郎兼重今者死去跡輩同一族
末次六郎入道今者死去跡輩同一族
溝部孫太郎　野邊孫七盛忠今者死去跡輩同一族
平山因幡前司入道同一族　正八幡宮先社務
弥勒寺執當房道慶　同舎弟九郎左衛門尉
同舎弟十郎三郎
正八幡宮神官所司分　杉五郎
東郷藤左衛門入道　同荒瀬九郎
吉田左近藏人清忠但清忠参御方云々
右、注進如件、

「右ノ交名注文、氏久公御譜中ト少々異同有之、参照ノ為、更ニ御譜中之通写載置もの也」

2510

「写有之」

「坊門殿奉行椙原左近大夫」

（本文書ハ、二五〇七号文書ト同文ニツキ省略ス）

2511

「道鑑公御譜中」

「正文在渋谷如兵衛重増」

一昨日東郷藏人城被追落候之由、判官馳申候之間、就善悪、可見継申候条勿論候、但惣合戦事、先日會合之時、再三沙汰候て發向、右所まて治定候間、判官成廻文候之處ニ、一人も無吳儀領掌申候了、重差日限、可成廻文候之處、如此私御合戦、難儀次第候、仍以私御合戦、公方合戦ニとりなし候ハんする事、世無隠候へハ、いかゝあるへく候らん、能々御了見も候て、無爲ニも候者、惣合戦のためも、目出たかるへく候、就中、先立て参州ニ申談候しことく、鹿兒嶋も可爲難儀候条、不及子細候、就彼等か先日振舞、御所存是まてにてとこそ存候へ、参州ニも御談合候て、無爲なるやうに御計候者、公私目出たかるへく候、以使者山田弥九郎令申候、委細可承候、心事期後信候、恐々謹言、

「文和三年」二月十一日　沙弥道鑒御判

謹上　車内殿

2512

「齢岳公御譜中」

「写有之」

「朱カキ」「自尊氏将軍家御返事　奉行椙原」

注進狀披見了、忠節之至、尤以神妙、九州之凶徒討手之「イ」事、所有其沙汰也、致用意、弥可抽戰功之狀如件、

文和三年二月十二日　「尊氏」御判

嶋津上總三郎左衞門尉殿

「師久公也」〈氏久〉

2513

『道鑑公御譜中』

注進狀披見畢、忠節之至、尤以神妙、中國鎮西凶徒等退治事、所有(致)其沙汰也、相催一族并分國軍勢等、致用意、弥可抽戰功之狀如件、

文和三年二月十二日　『尊氏ナル〈シ』御判

嶋津上(貞久)總入道殿

2514

「正文在樺山源三郎久清」

嶋津三郎右衞門尉資久申勲功配分地安堵所望事、申狀謹進上之、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年二月十六日　沙弥道猷(花押)「此判裏ニ有之」

進上　御奉行所

「上包」進上　御奉行所　沙弥

2515

『肝属兵庫助秋兼譜中』

九年甲午、北朝文和三年、榆井四郎頼仲、使其黨平岡四郎・風早十郎・薩人蓑和新次郎等戍壹谷城、在鹿屋院、二月二十二日、畠山直顯使野本藤二、以禰寢道種等、夜圍壹谷城、二十四日、奮進攻之、斬其將平岡等數人、前此十六年、入部七郎斬平岡首見上興國元年、而此亦曰、平岡四郎死于一谷疑必有誤、俟考爾、陷之、又攻木谷城拔之、二十五日、又陷大姶良城、得丸良世等先登有功、

2516

『鹿屋譜』

鹿屋周防守兼雄傳云、兼雄年十七、未加冠、時與平岡某戰于鹿屋一谷長谷山城、斬其首、蒙數創云、

「一谷城ノ辺ニ地名長谷山ト云所今アリ」

2517

『高山士入部氏古系図　今子孫入部次郎兵衞』

兼衆、興國元年號入部七郎鹿屋矢亀丸、十七歳而長谷山之合戰時、敵方平岡之四郎云者有、矢亀丸取押、既頸取、其時肝付秋兼・入部七郎落合、敵打伏頸取、其時忠節依無比類、家字被成訖、『秋兼矢亀丸及ヒ七郎等ヲ率ヒテ、楡井ガ党平岡等ト長谷山ニ戰フ、矢亀丸進ンテ四郎ニ接シ、圧ヘラレ殆ト死ス、秋兼及七郎馳続テ之ヲ救、七郎終ニ四郎ヲ斬テ其首級ヲ獲タリ、秋兼乃チ七郎カ功ヲ賞シ、兼ノ字ヲ畀フ、由テ入部氏世々兼ヲ名クト云々』

「家也」『此入部系図為興国元年事必追書可誤』

2518

『写見于旧記』

大隅國祢寢又五郎清増恐々謹言上

欲早被經急速御沙汰、預御一見狀、凶徒楡井四郎賴仲・同舍弟又四郎賴重、薩州凶徒等楯籠當院大姶良城、同國下大隅郡木谷城・鹿屋院壹谷城攻落致軍忠事、

右、去觀應三年十二月三日夜、賴仲以下之凶徒等、忍取大姶良城之間、同四日押卷彼城、連日致合戰之刻、賴仲引率薩州凶徒等、去年文和貳七月十日、木谷構城塀、去月廿二日、同國鹿屋院壹谷楯籠之間、同廿四日攻入彼城、致散々合戰、賴仲与黨人平岡四郎・風早十郎、薩州凶徒蓑和新次郎以下數輩討取之、攻落訖、將又、同日攻入木谷大姶良城、令對治所々城等之条、軍御奉行人野本藤二見知之上者、爲預御一見狀、粗言上如件、

文和三年三月　日

承了『直顯』判

2519

「池端文書」

大隅國祢寢弥次郎入道々種恐々謹言上

欲早被經急速御沙汰、預御一見狀、御敵楡井四郎賴仲・同又四郎賴重、薩州凶徒楯籠當院大姶良城、同國下大隅郡木谷城・同鹿屋院壹谷城攻落致軍忠事、

右、去觀應參年十二月三日夜、賴仲引率薩州之凶徒等、忍取大姶良城之間、同四日押卷彼城、連日致合戰之刻、賴仲引合薩州凶徒等、去年文和弐年七月十二日、木谷構城塀、去月廿二日壹谷楯籠之間、同廿四日攻入彼城、致散々合戰、賴仲与黨人平岡四郎・風早十郎、薩州凶徒蓑和新次郎以下數輩討取之、攻落訖、將又、同日攻入木谷大姶良城、令對治所々城々訖、仍軍御奉行人野本藤二見知之上者、爲預御一見狀、粗言上如件、

文和參年三月　日

「西国探題兵衛佐直冬旗下直顯」

承了（花押）

2520

『川上直左衛門家蔵』

楡井四郎賴仲并薩摩南郡御敵等□候、大隅國鹿野屋長谷城并大姶良木谷城□没落之時、殊致先懸之忠節、則御敵等數輩打取、令追落候旡、合戰之次第、爲侍所御見知□上者、不能委細注進候、隨而手負死人勘文□進上之候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年三月　日　　平良□

（畠山直顯）

承了（花押）

2521

『廣済寺文書』

伊集院寺脇内圓福寺阿弥陀堂免薗壹所并小山下田二反事、件薗苧桑代地利物公事検断加徴米等、阿弥陀堂仁所奉免除也、但於大犯者除之、仍状如件、

『文欠』天和三年三月十五日　　沙弥判

2522

「伊地知文書」

山門院西方内了元作・六反廿太郎三郎給相下・壹反給侍従房黒鳥川・一反卅跡鶴給、木牟礼之城警固之程、所宛行也、有限御公事以下者、任先例、可致沙汰之狀如件、

文和三年三月廿六日　　道鑒御判

伊地知生一丸

「此文書、道鑑公御譜中ニ在リ」

2523

「道鑑公御譜中」

『写有之』

「一色少輔孫三郎殿御注進」

畏注進言上

抑日向國凶徒畠山直顯以下輩、近日可寄來眞幸院之由、其聞得候之間、致用意、馳越可致合戦候、次大隅薩摩兩國凶徒等令蜂起、嶋津上総入道(貞久)城可寄來之由、馳申候之間、差遣軍勢等、可令後攻候、彼兩國御方仁等、任道鑒之注進狀之旨、面々被成下御教書候者、尤可目出候、委細之旨、守護人可申上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年三月晦日　　『一色少輔孫三郎殿』源範親上在判

進上　御奉行所

2524

「師久公御譜中」

「写在閉本」

「朱カキ入」「判官殿一色殿被注進」

就宅万城没落事、薩州凶徒等馳集市來院伊作田城、可寄來當所碇山城之由、相巧候之間、差向所々通路、致合戦用意候之刻、畠山匠作(直顯)以下逆徒等、當可打入日向國眞幸院并大隅國下大隅郡之由、其聞得之間、當國賊徒等依相待、直顯打立時分候欤、引歸面々城塁候訖、隨而寄來眞幸院候者、定孫三郎殿可有御發向候之間、其時者早々馳参可致合戦候、急打入下大隅郡候者、可致後攻之間、可預御合力之由、令申彼御方候畢、如此凶賊等令蜂起候之間、難儀無極候、所詮、澁谷一族并地頭御家人等之、師

久相共致合戰之忠節者、可有抽賞之旨、被成下御教書候之者(ママ)、可宜候、仍御方之仁等交名注文(別紙在之)、令進覧、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年四月十日　　左衛門少尉師久

進上　御奉行所

2525

「道鑑公御譜中」

「写有之」

『奉行佐々木四郎左衛門尉入道殿　文和四三十五上之　官途吹挙』

愚息三郎左衛門尉氏久孫子忠光以下一族等官途事、自最初致忠節候之間、當時不退合戰仕候之間、任譜代之例、蒙御免候者、弥可成武略之勇候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年卯月廿五日　　沙弥道鑒

進上　御奉行所

2526

「道鑑公御譜中」

「写有之」

薩摩國鹿兒嶋郡〻司職、同郡内中村・郡本・田上村(各郡司庶子等)跡、同國和泉新庄名主職等事、爲勲功之賞、所宛行也、早守先例、可被致沙汰、仍執達如件、

文和三年五月廿五日　　【一色入道殿(範氏)】沙弥(花押)

嶋津上(貞久)總入道殿

2527

「氏久公御譜中」

「写有之」

「朱カキ」

「奉行斎藤四郎兵衛尉　文和三八十一到」

「大隅殿御注進　将軍家御返事弥六持下　九月廿日」

今年二月十二日御教書五月廿五日到來、謹拜見仕候畢、任被仰下之旨、致用意、可抽戰功候、

一薩摩國和泉庄御敵等、「下司政保等ヲ云ヘリ」擬可寄來于老父道鑒之居住山門院木牟禮城之由聞候間、舍兄師久押寄和泉庄知色彦三郎入道行覺以下凶徒等所楯籠尾崎城、去(自カ)六月十日迄于同十二日、致散〻合戰、追「落ニ作ル」籠彼城、凶徒等數輩討捕候之處ニ、重所〻御敵等馳寄、致合戰最中候、

一畠山修理亮直顯、爲後攻、相催日向大隅兩國凶徒等、寄來候由、承候之間、氏久馳向要害、相待候、合戰始候者、追可令注進言上候、凡云宮方、云佐殿御方、御敵等蜂起之条、度〻令注進候、急速可被經御沙汰候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年六月廿日　　左衞門尉氏久

進上　御奉行所

2528

「載于南山巡狩録追加」

「案文」

就宅万城没落事、薩州凶徒等馳集市來院伊作田城、可寄來當所碇山城之由、相巧候之間、差向所々通路、致合戰用意候之刻、畠山匠作以下逆徒等、當可打入日向國眞幸院并大隅國下大隅郡之由、其聞得候之間、當國賊徒等依相待、直顯打立時分候欤、引歸面々城塚候訖、隨而寄來眞幸院候者、定孫三郎殿可有御發向候之間、其時分者、早々馳參可致合戰候、急打入下大隅郡候者、【木谷城ニ係ルカ】可致後攻之間、可預御合力之由、令申彼御方候旱、如此凶徒等令蜂起候之間、難儀至極候、所詮、澁谷一揆并地頭御家人等、師久相共致合戰之忠節者、可有抽賞之旨、被成下御教書候之者、可宜候、仍御方之仁等交名注文別紙有之、令進覧、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年六月廿日　　左衞門少尉師久上

進上　御奉行所

（本文書ハ二五二四号文書ト同文、恐ラク月日誤レルモノナラン）

2529

「北郷資忠譜中」

文和三年六月、薩州和泉庄下司竝名主等、寄來于　太守上總介入道道鑑公之御陣同國山門院木牟禮城、御子判官師久公聞此由、發向和泉、押寄于知色彦三郎入道行覺所楯籠尾崎城、從同月十日到同十二日、晝夜被遂合戰、殺戮凶徒數輩、陷彼城、此時資忠先衆馳參和泉、加　師久公之御陣、有戰功、依之　師久公記忠節之輩交名、以資忠爲最初、被進覧　尊氏公、證書左記之、

2530

「師久公御譜中」

「案文在閉本」

「朱カキ」

「奉行斎藤四郎兵衞尉　文和三年八十一到来　乗阿弥陀仏弥六上洛之時持上御注進」

注進

薩摩國凶徒和泉庄下司并名主等、可寄來老父道鑒之陣山門院木牟禮之城由、承及候之間、師久押寄和泉知色彦三郎入道行覺所楯籠尾崎城、自今月十日迄于同十二日、晝夜致散々合戰、凶徒等數輩討取、責落彼城、入替【異本無之】御方軍勢候之處、同國牛屎左近將監高元、同一族等并肥後國葦北之凶徒等相加和泉御敵等、到來師久陣之間、不廻時尅、

澁谷一族并當國地頭御家人等馳來、致合戰最中候、戰功之次第追可令言上候、隨而尾崎城先懸分捕手負等勘文一卷、將又最前馳來致忠節之輩等交名注文一通、進覽之、被成下御感御教書候者、弥可抽戰功候、同着到一卷進上之候、若此条僞申候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年六月廿日　　左衞門少尉師久上

進上　御奉行所

2531

「全御譜中」

「写在閉本」

「朱カキ」「将軍家御感御教書弥六持下　同三年九月廿日ニ下国云々」

知色城攻落時手負分捕注文

大隅四郎忠資分捕頸一　同三郎次郎若黨宮里紀三政杉（ママ）分捕頸一

否笠孫六政平右指射疵分捕頸一　酒勾左衞門四郎忠胤分捕頸一

山田弥九郎貞有右同上切疵　中村左衞門四郎知景分捕頸一

篠原新五郎秀久「ヲトカヒ」分捕頸一射疵　蔦野太郎「次郎」「ナシ」宗泰分捕頸一

永利中務丞兼光分捕頸一　酒勾次郎左衞門中間四郎右肩射疵

大隅四郎若黨稲本三郎兵衞氏泰左射疵

否笠孫六若黨久富九郎友泰左股同

酒勾左衞門三郎景頼左足同　本田中務丞泰久右股射疵

小田原孫次郎景郷頸一　宮里郡司孫九郎久保右肘射疵

中條次郎左衞門尉政安右膝同　飛彈弥四郎教幸右目上射疵

山門彦太郎秀直右股同

右、注文如件、

文和三年六月　日

2532

「全御譜中」

「案文在閉本」

薩摩國知色城責落之時、最前馳來、依致忠節、可被成「ナシ」下御感御教書人々事、

下野尾張守　上總弥三郎　下野又四郎

同彦四郎　大野三郎次郎　同七郎三郎

同七郎　同六郎二郎　同孫太郎

同八郎五郎　澁谷参河守　同河内權守

同次郎左衞門尉　同五郎左衞門尉　同太郎左衞門尉

同九郎左衞門尉　同五郎四郎　同平太郎左衞門尉

同太郎左衞門尉「異本無之」　同平三　同五郎

同八郎三郎　莫祢彦太郎入道一族

山門弥次郎入道一族　薩摩郡司弥太郎一族

國分平次郎　　新田宮執印左衛門大夫
遠屋次郎太郎入道　山門彦四郎
莫祢遠屋孫太郎　　同小太郎
本田次郎左衛門入道　　別符次郎兵衛門尉
永利又太郎　　酒勾次郎左衛門尉
石塚平七入道　　若松孫太郎
武光三郎一族　　野田孫太郎（又次）
同次郎　　吉松孫三郎（永）
多田彦六　　石塚平六（異本ナシ）
市來崎次郎太郎　　三嶋儀平
右、注文如件、

文和三年六月　日

「此文書、二通共北郷資忠譜中ニ在リ」

2533

「師久公御譜中」

「写在閉本」

「朱カキ」「一色入道殿御注進状　愛甲殿関屋殿御脚力持上　文和三年十一八到」

畠山修理亮直顯事、就京都御教書忠節之由、度々令申之間、相存其旨之處、去年二月針磨原合戰以後、又令同心凶徒等之間、少輔三郎範親・嶋津判官師久等注進状、謹進上之、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年六月廿三日　　沙弥道猷在判

進上　御奉行所

2534

「在于伊作下野守親忠譜」「正文在巻本トアリ」

ゆつりわたすそりやうさつまのくにいさくのしやうかわみなみ・同へきのしやう

右、件そりやうハ、たうゑ（道恵）ちうたいさうてんのそりやうたるあひた、ちやくしそう（宗）四らうに（親忠）、したいさうそくのもんしよあひそへて、ゆつりわたすところ也、但このうち、次男彦二（久氏）らうにゆつるところさかい、もんしよに見えたり、同女子にゆつるところ、ゆのうらの田地さかい、もんしよに見えたり、わつらいなくもたせらるへく候、もし、かやうにはからいおき候ところに、いらんわつらいなさんものハ、たうゑしそんのきあるましく候、よてのちのためにゆつり状如件、

たうゑ（花押）

「朱カキ」「正平九年六月廿三日、案文ニ有之」

2535

「在于伊作親忠譜」「写在巻本トアリ」

さたむるをき文の事

右、たうゑ(道恵)かそりやう、をの〳〵わかちゆつる、そしら、そうりやうのめいをそむかん時ハ、ゆつるところのそりやうを、そうりやうちきやうすへきなり、但そう四郎(親忠)か子ども、しせんの事あらん時ハ、ひこ次郎(久氏)と、まつ壽丸(忠貞)か中ニ、そりやうをゆつるへし、又ひこ次郎とまつ壽丸子なくハ、そう四郎か子孫ニゆつるへし、仍爲後日、をき文如件、

正平九年六月廿三日　　たうゑ在判

2536 「在文庫伊作家文書中」

（本文書ハ二五三四号文書ト同文ニツキ省略ス）

2537 「文庫中伊作家文書」

（本文書ハ二五三五号文書ト同文ニツキ省略ス）

2538 「越前島津氏七代忠兼譜中」

嶋津周防守忠兼申相模國山内岩瀬郷并倉田郷等事、飯田七郎左衞門尉率多勢打入當所、致合戰、殺害忠兼代池田右衞門以下輩云々、爲事實者、尤招重科欤、鎭狼籍、如元可沙汰付忠兼代申也、

「朱カキ」「文和三年」六月廿四日　　（尊氏）（花押）

河越彈正少弼殿

2539 「道鑑公御譜中」

『写有之』

『一色入道殿御吹挙状』

嶋津上總入道々鑒申勲功配分地安堵所望事、申狀謹言上之、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

『一色少輔太郎入道』沙弥道猷在判

文和三年六月廿五日

進上　御奉行所

2540 「道鑑公御譜中」

『写有之』

『一色殿代官御賀本五郎左衞門尉同年八月十一日鎭西持下云々』

参于御方於致忠節輩者、本知行地、不可相違(有脱カ)、有殊功者、可令抽賞也、可存知此旨之狀如件、

文和三年六月晦日　　御判(尊氏)

一色右京大夫(直氏)殿

2541 「道鑑公御譜中」
『写有之』
参于御方致忠節者、本知行之地、不可有相違、有殊功者、
可抽賞之狀如件、
文和三年七月三日　『尊氏カ』御判
「御譜ニハ二日トアリ、イ三日ト朱カキアリ」
面々名字同前

2542 『執印文書』
薩摩國凶徒退治事、令合力之由、嶋津上總入道所注申也、
忠節尤神妙、可令注進、仍執達如件、
文和三年七月十日　(一色範氏)沙弥(花押)
新田宮執印(友雄)左衛門太夫殿

2543 「田代七郎入道道清譜中」
文和三年甲午七月廿四日、　齡岳公賜七郎書、授串良院
半分地頭職、褒奬其忠也、

2544 大隅國串良院半分地頭職事、所預置也、可被致忠節之狀
如件、
「南朝正平九年」文和三年七月廿四日　(氏久)左衛門尉

田代「入道道清」七郎殿
「右次目裏判」『氏久公』(元久)(花押)
「此文書、氏久公御譜中写在田代縫殿清長トアリ」

2545 「道鑑公御譜中」
『写有之』
注進之狀披見了、爲中國凶徒退治、既所發向也、且九州
事、以泉筑前入道(「和泉入道ト御譜ニアリ」)被仰之狀如件、
文和三年七月廿八日　『尊氏カ』(義詮)御判
(一色氏)(範氏)少輔太郎入道殿
(家譜ニハ「坊門殿御教書」トアリ)

2546 「師久公御譜中」
「写在閉本」
「朱カキ」「奉行松田八郎左衛門尉文和三年七月三日」(二イ)
一被成召御教書凶徒等注文
薩摩國分
谷山五郎　同新左衛門尉　鮫嶋彦次郎入道
知覧郡司四郎　顯娃三郎　伊集院八郎三郎入道
伊集院助三郎入道　市來新左衛尉(「本マヽ」)　牛屎左近將監

泉諸太郎兵衛尉、彼等三人者、自觀應三年、爲佐殿御方、
畠山匠作同心之凶徒等、

大隅國分

祢寢郡司　　税所介　　蒲生彦次郎
姫木郡司　　修理所弥太郎　　羽坂弥太郎
小河郡司　　吉田左近藏人

文和三年八月一日

「朱カキ」
「薄葉入道殿鎭西持下也」

2547

「師久公御譜中」
「正文在肝付伴兵衛兼屋」

下　薦野太郎次郎宗泰

和泉庄久重名内水田参町薗三ヶ所地頭職事

右、爲賜分、所宛行也、任先例、可知行之狀如件、

八月一日　　師久(花押)

2548

「正文在土持孫兵衛家」

九州凶徒退治之事、早相催一族、属一色右京權太夫(直氏)、可抽忠節之狀如件、

文和三年甲午八月七日　　御在判(尊氏)

土持冠者殿

2549

「道鑑公御譜中」
「写有之」

『一色殿御代官御賀本五郎左衛門尉申沙汰云々』
『文和三八月廿三日遁世者礼阿弥下向之時進上之云々』

凶徒退治之事、於鎭西度々致軍忠云々、尤神妙、弥可抽戰功也、

文和三年八月十一日　　尊氏御判

嶋津上總入道(貞久)殿

2550

「越前島津氏七代忠兼譜中」

嶋津周防忠兼申、相模國山内岩瀨郷并倉田郷等事、任去六月廿四日京都御書之旨、先可被沙汰付下地於忠兼代狀如件、

文和三年八月十二日　　直重(花押)

河越上野介殿

2551

「仝上」

嶋津周防守(忠兼)申、相模國所領事、先度如令申候、任理非、

急速可有御沙汰候、謹言、

「朱カキ「文和三年」八月廿四日　　尊氏（花押）

左馬頭（基氏）殿

2552

「國分宮内澤氏蔵」

文和三年甲午八月十三日、上井富福丸解謝御馬毛付事、

於敷祢假屋（于時道乗之家）、遂之、御使權惣検校兼舜、奉行人田所検校永琮、覆勘使兵衛次郎定與、（于時厩別當）、小使（乙所弥五郎検校・太郎弁官御供）案所（麦太郎検校）等、同日申剋着于當假屋、會頭方因幡八郎（富福丸之従父兄弟）、有對合天酒肴行之、五獻之後、覆勘使立天、馬ノ毛於検見ッ、口付ノ名字ヲ申ス、同十四日午剋、百疋ノ御馬毛付、次第仁自社頭池縁、至于辻堂之鳥居邊仁引立之、口付面々持御榊於、兼舜・永琮等者、中間左右仁座ス、祝部柒嶋則弘着束帯、中門ノ階際仁座ス、中門前仁三間ノ竹棚樒祭物等於積、但散供米籾并清濁酒等者、棚下仁置之、御馬八疋者中門ノ東面仁引立、祝部則弘棚南前仁御寶殿仁向天荒薦於敷着ッ、蒔散供於致清祓天、於同薦上申宣命於、御幣者彦王（富福丸之従父兄弟）、於之（ママ）乎棚上、祭物等者稱政所得分、長所請取之、散供米以下并膝突布者、祝得分、御幣紙（三帖金紙）當番ノ宮主得分、四手、樒ノ刀者當番殿守得分、仍請取之、同日御馬以下祭馬等引進、大公文所奉行人永琮、任先例、支配早、

一御馬八疋准銭事、

任心淨横川解謝之例、被定三十貫文早、

一公文所分祭馬九疋佳（ママ）銭事、

任借馬之例、合三百文宛請之、

一四所若宮政所祭馬事、

姶良・栗野・蒲生之分三疋者、定使等請取之、荒田庄分者、依不相從神役等、被留奉行方早、

一御使得分事、

准二疋御馬分五貫文、所爲先例也、

一小使得分事、

任正和例、可爲十貫文之由注申之、依役人等歎申、爲小使等之計、被直沙汰之、

一支配餘残之祭馬者、任先例、稱奉行得分、永琮被請取之、

一借馬准銭各三百文宛、

参詣之講衆、成禦入寺・阿闍梨成觀法眼・山上執行法橋・御前寺主・當番宮主宗白、

爲後記大概如此、

2553

「都城本田某文書」

ちうたいのよろい・たち、兼阿かあとの事、かな大郎をちやくしとして、ゆつるへく候、御心へのために申候、あなかしく、

「文和三」八月十六日　兼阿（花押）

（葉成）ミなり河とのゝ御方へ

「右ノウラニ」

兼阿自筆之間、爲後證、所加判形也、

延文五年九月六日　左衛門少尉（氏久）（花押）

2554

「氏久公御譜中」

「写有之」

「朱カキ」

「一色殿大隅殿御配分状案、薄葉入道殿被持上　文和四三十八到」

薩摩國東郷藏人跡同一族等跡地頭職事、爲勲功地、日向國北郷之替、所宛行也、早守先例、可致沙汰、仍執達如件、

文和三年八月廿五日　沙弥在判

嶋津三郎左衛門尉（氏久）殿

「続目裏判」（渋川満頼）（花押）「同」（今川了俊）（花押）

2555

『執印文書』

薩摩國知色城凶徒退治合戰事、致忠節之由、嶋津判官（師久）所注申也、尤神妙、可注進京都、仍執達如件、

文和三年八月廿九日　右京權（一色直氏）太夫（花押）

執印左衛門『友雄』太夫殿

2556

『水引執印文書』

凶徒對治事、致忠節之由、嶋津判官師久所注申也、尤以神妙、弥可抽戰功之状如件、

文和三年九月三日　『尊氏卿』（花押）

新田宮執印左衛門『友雄』太夫殿

2557

「師久公御譜中」

「写在閉本」

「朱カキ」

「官領佐竹右馬権頭　奉行斎藤四郎兵衛尉御脚力弥六持上御注進」

「将軍家御教書　御返事」

去六月廿日注進之状披見了、追落尾崎城凶徒等、致忠節之条、尤以神妙也、弥可抽戰功之状如件、

文和三年九月三日　御判（尊氏）

島津判官（師久）殿

2558

「師久公御譜中」

「写在閉本」

「奉行斎藤四郎兵衛尉　将軍家御感和泉荘知色城被責之時、分捕人中江御感御教書」

凶徒退治事、致分捕同忠節之由、嶋津判官(師久)所注申也、尤神妙也、弥可抽戰功之狀如件、

文和三年九月三日　御判(尊氏)

御内外様國人仁、以面々名字被成旱、

返事」

「将軍家御教書」

去六月廿日注進狀披見旱、凶徒對治事、致忠節之条、尤以神妙也、弥可抽戰功之狀如件、

文和三年九月三日　御判(尊氏)

嶋津三郎(氏久)左衛門尉殿

2559

「仝御譜中」

「写在閉本」

「朱カキ」「和泉荘知色城被責之時、分捕人中江将軍家御感御教書」

凶徒對治事、被疵致忠節之由、嶋津判官(師久)所注申也、尤神妙也、弥可抽戰功之狀如件、

文和三年九月三日　御判

名字同前

2560

「氏久公御譜中」

「写有之」

「朱カキ」「官領佐竹左(右)馬権頭　奉行斎藤四郎兵衛尉御脚力弥六持上　御注進御

2561

「越前島津氏七代忠兼譜中」

嶋津周防守(忠兼)申、相模國山内庄岩瀬郷代官等宇子御乳(局カ)代官殺害事、委細可有尋注進候、謹言、

九月十二日　義詮(花押)

左馬頭(基氏)殿

2562

『氏久公御譜中』

「写有之」

「朱カキ」「愛甲関屋両人御脚力持上　大隅殿御注進」

畠山修理亮直顯(直顯)以下、爲佐殿方乱入大隅國之段并國不審事、先日度々言上仕候訖、爰球磨郡凶徒須恵、多良木、以下之輩、引合肥後國凶徒等、對于一色少輔孫三郎殿、致合戰候之間、爲合力馳参候之刻、畠山匠作得此折、可寄來當城東

福寺并隅州下大隅城・眞幸院之由、自方々依告申、致用意最中候、合戰之後重可令言上、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

『当正平九年』『甲午』
文和三年九月十八日　　左衞門尉氏久上

進上　御奉行所

2563

「載于南山巡狩録追加」

薩摩國凶徒和泉庄名主知色彦三郎入道行覺之城塚於追落、入替御方軍勢、於彼城踏之候段、以去六月十三日、令注進言上候訖、定令參着候哉、仍賊徒等寄來當所之城之由、承及候之間、去月廿二日師久馳越、令在城候、將又、當庄合戰之時分、同國宮方凶徒等、以之外蜂起之間、舍弟三郎左衞門尉夸、鹿兒島郡東福寺城向合彼御敵等、致忠節候、且委細之旨、氏久令言上候訖、爰肥後國救摩郡凶徒須惠・多良木仁、同國凶徒菊地・内河以下致合力、一色少輔孫三郎殿、所被楯籠城塚寄來、合戰最中之由申候之間、薩州凶徒蜂起雖難儀時分候、先差進軍勢候訖、合戰之次第、定孫三郎殿可有注進候哉、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年九月十八日　　左衞門尉(少脱カ)師久上

進上　御奉行所

「此文書、師久公御譜中案文在閉本トアリ」

「朱カキ」「愛甲殿関屋殿脚力持上　文和三年十一八到　判官殿和泉知色城被落御注進」

2564

「伊作宗久譜中」

「写在閉本」

「朱カキ」「奉行斎藤四郎兵衞尉弥六持下　将軍家」

凶徒對治事、被忠節之由、嶋津上總入道所注申也、尤以神妙也、弥可抽戰功之狀如件、

文和三年九月十九日(三カ)　　御判(尊氏)

嶋津左京(宗久)進入道殿

2565

「伊作宗久譜中」

「正文在手鏡」

（本文書ハ二二二七号文書ト同文ニツキ省略ス）

2566

「仝譜中ノ末ニ」

○法號花嚴榮公大禪定門

2567

「指宿文書」

嶋津庄日向方富山七郎左衛門尉義道申、嶋津院住人五年(ママ)致追捕處、貞下狼籍由事、訴状副具書、如此、早土持掃部左衛門入道相共、莅彼所、且遂検見、且企参上、可明申間、相觸之、可致執進請文、若令難澁者、載起請之詞、可被明申也、仍執達如件、

文和三年十月十三日　　沙弥御判

指宿郡司入道殿

2568

「越前島津氏七代忠兼譜中」

嶋津周防守申、相模國山内岩瀬郷代官殺害事、任被仰下之旨、相尋實否候之處、宇子局代官飯田七郎左衛門尉、令殺害嶋津周防守代官池田右衛門尉以下輩之条、無其隠候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年十月廿七日　　彈正少弼直重「朱カキ」「右名乗之下裏ニ有之」(花押)

進上　御奉行所

2569

『入來本田氏文書』

ゆつりわたす兼阿かあとの所〻ほんりやうならひにちうたいのよろい・たち・かたなの事

さつまのくにやまとのゐんの内、はりハらのみやうてん・よこミねのむら・うちのゝむら・たかハらまち・ひさきた、

ちくせんのくにこたへのかうのうちの田地つほつけとちやうハ、へつしにあり、

右の所りやうハ、兼阿ちうたいのしりやうなり、しかるに、かな太郎をちやくしとして、一所ものこさすゆつりわたすところなり、たのさまたけなく、ちきやうすへきしやう如件、

文和三年十一月十五日　　兼阿(花押)

2570

「載于南山巡狩録追加」「越前島津氏七代忠兼譜中ニ在リ」

嶋津周防守忠兼申、相模國山内岩瀬御代官殺害事、任被仰下之旨、相尋實否候之處、去文和三六月九日、宇子局代官飯田七郎左衛門尉不知実名、打入當郷、令殺害忠兼代官池田右衛門尉以下之輩之条、無其隠候、若此条僞申候者、神佛御罰於可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和三年十一月廿日　　彈正少弼直重「右名乗之下裏有之」(花押)

進上　御奉行所

奉寄進

大隅國曽野郡三郎丸名内井手山新開山野等事

右、志趣者、爲比丘尼賢勝現當二世悉地成就圓滿、山内安穩、上下諸人福貴豊饒也、但此役者、山王御寶前正月朔日御鏡十枚分米黒壱斗弐升、御酒分米弐斗者、御鏡十枚内、日吉別當分三枚、四枚餘別當一枚宛、申口一枚、二枚者當参衆徒御肴析也、所詮、於下地者、永代爲賢勝相續之跡、智聖可奉備之、末代知行之輩、若令緩怠彼役之時者、可爲衆徒御沙汰也、仍爲後代、寄進狀如件、

文和三年甲午十二月廿四日　　比丘尼賢勝（花押）

『ロ裏』
「山王御寶正月朔日御節供寄進狀正文」

「右ノ原書ハ、旧御番所御文書二番箱中一巻ニアリ」

（表紙）

貞久公
師久公　自文和四年
氏久公　至延文元年

前編　舊記雜錄　巻廿五

2572

「國史道鑑公」

文和四年乙未、南朝正平十年、二月六日、酒勾資光從細川豫州戰于攝州櫻井山先駈有功、下大隅人肥後彦太郎種顯、與其弟彦次郎種久等共納畠山直顯之黨於崎山城、　齡岳公將兵攻之、夏四月十二日、拔之、拠齡岳公旧譜、垂水海潟村有一高岡、相伝為崎山城遺墟、二十日、上注進狀、報崎山城之捷也、同上、牛屎高元・市來氏家・東郷道義、與和泉莊下司政保及肥後葦北黨通謀、二十六日、夜襲木牟禮城、　定山公自知識城來救、獲諜二人、賊徒引去、拠定山公旧譜、知識城即知色城、去年六月定山公拔之、在國司次郎道久道久即道超之孫、應足利直冬、與菊池肥後守及内河等賊徒通謀、將攻知識城、聞直冬敗、其謀遂寢、同上、　六月朔日、　定山公代公、上禀文云、三月十二日、教書到、使誅佐殿、謹聞命矣、家翁有采薪之病、某代謝、　同上、参考太平記云、文和四年正月二十二日、山名伊豆守時氏、奉足利直冬、入京師、二十五日、次于東寺・實相寺、三月十二日合戦、十三日直冬夜奔、又引園太暦云、三月十二日会戦、雌雄未決、十三日晩寅刻、東寺敵軍敗走、又引東寺長者補任云、三月十二日終日合戦、翌朝直冬亡走西国、拠此諸説、則三月十二日合戦、雌雄未決、直冬未奔、而賜公教書、使誅直冬者、蓋当日也、有破竹之勢云、又上國中凶徒蜂起注進狀、同上、足利直冬之入京師也、國中方有畠山直顯之難、　定山公戒嚴、是以不赴東寺之戰、二日、贈仁木殿書以謝之、同上、原書無年号、然其文云、伏承佐殿敗於東寺、則其為是年之狀明矣、仁木殿謂幕府執事仁木左京大夫頼章、十八日、　齡岳公上禀文、如定山公辭、又上凶徒注進狀、拠齡岳公旧譜、秋八月十八日、幕府賜　定山公　齡岳公教書各一通云、國中凶徒蜂起、宜與一色入道共圖之、足利義詮賜　二公教書各一通、亦如幕府書、拠定山公・齡岳公旧譜、九月二日、市來氏家・鮫島蓮道・知覧忠世・左當彦次郎入道、從三條泰季攻櫛木野城、　定山公自知色城引兵來救、連戰五日、破走之、拠定山公旧譜、櫛木野、今作串木野、故城在上名村、即今地頭館地、「九月酒勾資光從細川与州師于土佐」「十二日資光戰于土州」猿渡信重戰死、拠猿渡喜右衛門系図、冬十月二十二日、「酒勾九郎資継資光家僧塩田彦八等被疵有功」和泉莊名主等、與牛屎高元・在國司道超共攻知色城、　定山公還兵救之、　公及尾張守資忠被創、士卒被創者百餘人、酒勾兵衛四郎・左衛門四郎・愛甲彌四郎・土田五郎・阿曽谷三郎右衛門尉・堀源五戰死、拠定山公旧譜、

十一月五日、　定山公上注進狀、言櫛木野城・知色城有寇事也、同上、七日、足利義詮賜　公教書曰、東國喪亂既平、將討鎭西凶徒、宜據要害自守以俟官軍之至、拠道鑑公旧譜、又賜公族書亦如之、同上、十日、幕府賜　公教書、如義詮書、同上、又賜薩摩・大隅地頭御家人教書亦如之、同上、十二月二十八日、幕府賜　定山公教書、褒美知色城之戰功也、拠定山公旧譜、義詮賜　定山公及尾張守資忠教書亦如之、拠定山公旧譜、島津支流系図、

延文元年丙申、是年三月改元延文、自二月以前猶是文和五年、南朝正平十一年、春三月二十八日改元、拠和光・酒勾孫七等戰于土州被疵有功」事始、初幕府下文、賜大夫判官宗久信濃太田莊大藏郷、事見上巻建武五年、宗久無嗣、使　公領大藏郷、授以下文及讓狀、宗久薨、　公遂領大藏郷、秋八月六日、足利義詮下文、使　公領大藏郷如宗久狀、拠道鑑公旧譜、又使領薩摩大隅守護職其餘諸地頭職等、如關東累代下文・解題安堵・建武元年綸旨・三年下文・觀應二年下文、同上、畠山直顯復卽幕府、　齡岳公應南朝、冬十月二十五日、與三條泰季共攻加治木岩屋城、直顯遣禰寢重種・清增救之、久木崎五郎三郎久春、踰牆入城遂拔之、伊集院大隅前司久氏・本田新兵衞尉親春・比志島範平・野田刑部左衞門尉・帖佐太郎左衞門尉等有戰功、拠齡岳公旧譜、比志島隼人・平田監物・根占越右衞門家蔵文書、久氏□國之子也、拠島津支流系図、十一月十日、加治木本城出兵、攻三條泰季營、伊集院久氏・久木崎久春邀擊之、拠平田監物家蔵文書、加治木本城遺墟在島津兵庫別館北十三町余段土村、初　公謁信濃諏方社、歸而建諏方社於山門院、其後　齡岳公徙諸鹿兒島、拠道鑑公旧譜、公・齡岳栄自記・諏方亦作諏訪、或作洲羽、或作州羽、或作須波、見旧事本紀・日本紀・続日本紀・延喜式・神皇正統紀等書、齡岳公徙諏方社於鹿兒島、不詳何年、疑是居東福寺城後事、居東福寺城見上、　十二月十八日、　齡岳公以寄郡田四町・園四所、爲諏訪社領、拠齡岳公旧譜、寄進狀、書正平十一年十二月十八日、此時公応南朝、故用正平年号、

二年丁酉、南朝正平十二年、春正月二十一日、　齡岳公・三條泰季、與加治木軍戰、二十五日、復戰、拠比志島隼人家蔵文書、二十七日、禰寢重種・清増、攻榆井頼仲・頼重於救仁郷胡麻崎城、拠根占越右衞門家蔵文書、救仁郷或作求二郷、即今大崎郷、胡麻崎城故墟、在大崎地頭館東十五町余仮宿村、初幕府爲　定山公、請叙留於　朝、事見定山公旧譜延文元年十二月、二十八日、宣旨、　定山公叙從五位下、検非違使如故、拠定山公旧譜、叙留見職原抄、定山公時為左衞門少尉、相当六位、今遷五位、是為叙、検非違使如故、是為留、旧譜本作鈒留、蓋以字形略似而誤写之耳、検非違使唐名廷尉、公為廷尉、見上觀應二年、晦日、禰寢清増・重種等陷胡麻崎、殺頼仲・頼重、拠根占越右衞門家蔵文書、初榆井頼仲領志布志、畠山直顯取之、見上觀應二年八月十二日、而文和三年六月一日、志布志大慈寺新鐘銘云、本寺檀那畠山修理亮源直顯、又大慈寺蔵有直顯觀應二年八月十八日・延文三年十月七日寄進狀、蓋文和・延文之際、直顯領志布志矣、其間、榆井頼仲居大姶良城、後徙救仁郷、至是、復還志布志而亡、齡岳公旧譜云、畠山治部大輔攻頼仲於志布志松尾城、頼仲棄城走、而亡所帰、乃入大慈寺宝池庵、遂自殺、拠此則頼仲逃自胡麻崎、復拠松尾城矣、寺社記、大慈寺末寺有宝地庵、疑即宝池庵、然大慈寺今無宝地庵、

又無宝池庵、蓋庵廃已久矣、寺社記、徒載其名焉爾、三月二十日、　齡岳公夜與加治木軍戰、拠齡岳公旧譜、平田監物・比志島隼人家蔵文書、夏四月二十日、　齡岳公使田代次郎領串良院・鹿屋院辨分之地、拠齡岳公旧譜、弁分依原文、疑指弁済使所獲田禄、使田代七郎入道領串良院半分地頭職、同上、公使田代七郎権領串良院半分地頭職、見上文和三年、至是、遂為地頭職、二十八日、　齡岳公使比志島太郎彦一丸改称太郎、範平領大隅肝属郡木志良村地頭辨分及羽見村地頭職、拠齡岳公旧譜、比志島隼人系図、郡村高辻帳、高山郷有岸良村・波見村、蓋岸良旧作木志良、波見旧作羽見、岸良村今属内之浦郷、五月二日、久木崎久春與餅田城兵戰、拠平田監物家蔵文書、郡村高辻帳、帖佐郷有餅田村、三年戊戌、南朝正平十三年、春、　公與菊池武光連和、武光擊筑紫探題一色直氏、道猷敗之、直氏與弟範光奔京師、武光軍勢大振、筑紫城邑望風應之、獨畠山直顯據六笠城、不下、武光將兵欲攻之、先攻其子重隆於三俣城、遂下之、畠山父子逃竄、拠道鑑公旧譜、太平記、前此幕府賜定山公・齡岳公書云、国中凶徒蜂起、宜与一色入道共図之、見上文和四年、蓋其後直氏代道猷為探題云、太平記以此為延文四年事、今従参考、而参考又以為是時、畠山唯有六笠一城、而太平記既言武光將攻六笠城、又言、先攻直顯子民部太輔於三俣城、下之、豈六笠一名三俣耶、今拠郡村高辻帳、諸県郡高城郷・山口郷・勝岡郷号為三俣院、而六笠之為三俣、則無所見、参考未確、按道鑑公旧譜、康安二年公上幕府書云、観應二年畠山礼部叛、比至文和四年不服、延文元年以後聴命、由是、授以日向守護職、直顯既為日向守護職矣、則已居六笠城、使其子居三俣城、亦不可知、未必唯有一城也、六笠即穆佐、和名類聚、日向諸県郡有穆佐、方言読曰武加佐、因訛作六笠耳、夏四月十四日、柿木原左衛門太郎隆實、擊中津河勘解由左衛門尉國□小太郎等於加治木院、拠柿木原齡岳公一見状、初　齡岳公禱戰鹿兒島諏訪社、二十八日、以鹿兒島伊敷村國引田一町、為諏訪社領、是為酬愿、拠齡岳公旧譜、二十九日、征夷大將軍足利尊氏薨、稱等持院、或稱長壽院、法名仁山妙義、拠大日本史、五月一日、齡岳公以島津忠經忠能改名忠経、為鹿兒島郡上伊敷村地頭職、拠島津支流系図、秋七月一日、復賜上伊敷村・下田村地頭得分三分之二、同上、謂地頭得分依原文、蓋地頭所得租入云、八月十二日、　公以永利又太郎友秀為觀童村・永利村地頭職、拠道鑑公旧譜、観童或作火同、郡村高辻帳頭書、二村属薩摩郡山田郷有観童・永利二村、見古文書、山田郷今無二村、蓋其名亡、不詳其地所在、冬十二月、足利義詮任征夷大將軍、拠將軍家譜、初　公賜尾張守資忠莊内北郷三百町、事見上文和元年、後喪其地、拠齡岳公旧譜、球麻領主相良氏系図、鎌倉幕府封相良三郎長頼於肥後球麻郡、伝五世至兵庫允貞頼、延文中、幕府賜貞頼日州莊内都城、資忠喪北郷地、蓋在是時云、取日州莊内之地、拓境漸広、尽四年己亥、南朝正平十四年、夏四月五日、復賜資忠大隅本莊財部院、拠島津支流系図、前年春、公与菊池武光連和、応南朝、故秋八月賜永利友秀観童・永利二村、状書正平十三年、至是、賜資忠財部院、状書延文四年卯月五日、蓋已与南朝絶矣、和俗謂四月為卯月、言卯花方開之月也、和漢三才図会、楊櫨、和名宇豆木、四月開小白花、俗称卯乃花、然卯乃花云者、宇豆木乃花之略、訛用卯字、十九日、　齡岳公使野崎太郎左衛門尉權領柏原保東方、拠齡岳公旧譜、郡村高辻帳、串良郷有柏原村、今名川東村、野崎、肝付氏之支庶、秋七月十九日、　公與小貳軍於筑後大原、八月十六日、與菊池武光戰不克、小貳歸太宰府、武光軍多死傷、亦歸肥後、拠道鑑公旧譜・太平記、旧譜・太平記、以此為延文五年事、今従参考、按文和初、公老倦于勤、已使定山公・齡岳公並領国明書事、至於是年年適九十矣、又得痿痺病久在牀蓐、乃能引兵越境、与菊池戰耶、然太平記曰、島津上

総入道云云、則雖欲断之以為必無之事、亦無所拠、且是時公已絶南朝応足利氏、而小弐方与菊池相拒両筑、不応、坐観成敗、必有遣将士助小弐者矣、而太平記、得諸伝聞、遂誤為公、亦未可知也、公得痿痺病、見定山公文和四年上幕府書、　晦日、　齡岳公以求二郷永吉東方比志田之宅二区・園三所、為鹿兒島諏方大明神社領、　拠齡岳公旧譜、今大崎郷有永吉村、其東面有菱田村、初相良氏封於肥後球麻郡、傳五世、　至兵庫允貞頼、拓境漸廣、盡取日州「大皮武鑑延文二年貞頼事南帝有功、賜日州庄内地云、至是三年也、又其子近江守前頼、則文中二年補肥前国守護職、易日州庄内地云、」荘内之地、　拠相良氏系図、冬十月五日、　齡岳公自將擊荘内、與相良氏軍、戰于國合、我軍敗績、佐多左馬助忠直及弟彦四郎戰歿、　公狼狽歸鹿兒島、拠齡岳公旧譜、旧譜、公将帰志布志、而道路不通、乃如鹿兒島、似云此時、公居志布志、按康安・貞治之際、公自鹿兒島徙大姶良、其後又徙志布志、其説見後康安元年、則是年公尚在鹿兒島矣、旧譜恐謬、国合在末吉郷南之郷村、日向・大隅接界之処、故名、又有地名曰本堂、土人相伝、以為国合、古戦場也、其処在地頭館西北一里十町余、　忠直・彦四郎皆忠光之子也、拠島津支流系図、國合之敗、　公求救於手取城主岩川某、某懐兩端、觀望、又請於蓬原城主救仁郷某、某亦不肯、　公已歸鹿兒島、旋復擧兵北征、先攻蓬原城、下之、又攻手取城下之、　拠齡岳公旧譜、末吉郷有五十町村・中之内村・岩崎村、総名岩川岩川氏豈以地為氏者耶、肝付甚兵衛系図、肝付氏別族、有救仁郷氏、手取城遺墟、在末吉地頭館西南一里二十余町中之内村、蓬原城遺墟在志布志地頭館西二十一月十五日、　齡岳公使得丸左近將監領大隅之小原別府西方・柏原東方・日向救仁院之野與倉條、同上、郡村高辻帳、串良郷有小原村、救仁院有野井倉村、　二十七日、　齡岳公以田代新左衛門尉、為大隅鹿屋院地頭及辨濟使職、同上、五年庚子、南朝正平十五年、幕府賜　齡岳公教書、勸歸北朝、　公聽命、夏六月十三日、畠山直顯贈　公書曰、近聞服事幕下、自是以後、兩除舊怨、戮力討賊、請指佛神為誓、拠齡岳公旧譜、教阿蘇筑後守鈔略井田郷、賴兼代　公、上訴牒於幕府、冬十一月一日、相模守命大友刑部大輔禁之、使　公領井田郷、如下文旨、拠道鑑、公旧譜、旧譜、教文亡、康安元年辛丑、是年三月改元康安、自二月以前猶是延文六年、南朝正平十六年、春二月二十四日、　齡岳公以串良院岩廣名半分、為大慈寺領、拠齡岳公旧譜、郡村高辻帳、串良郷有岩広村、三月二十九日改元、拠和事始、夏四月十日、大慈寺在志布志郷、得貴為　公、上訴牒於幕府、請食寺社邑・領家邑半祿如故、蓋　得佛公以來、實封之外、得食三州寺社邑・領家邑半祿、比及四世如故、至是、幕府使筑紫探題斯波左京太夫氏經食之、得貴是以代　公乞之、　拠道鑑、公旧譜、酒勾利兵衛文書、兵衛入道称阿・左衛門久景入道得貴・兵衛入道阿忍・次郎左衛門貞資入道貞阿等、或為家老、或為守護代、左衛門久景即平久景、得貴蓋其法名、平久景為守護代見上巻暦應元年、半祿俗云半地、唐六典凡致仕之官、五品已上、及解官充侍者、各給半祿、斯波氏経蓋代一色直氏為筑紫探題、直氏奔京師、見上延文三年、五月二十八日、　定山公賜□野太郎次郎宗泰時吉名水田三町、拠定山公旧譜、秋八月二十四日、　齡岳公以求二郷益丸名之田四町、為鹿兒島諏方大明神社領、拠齡岳公旧譜、郡村高辻帳、救仁郷有益丸村、　探題斯波氏經與大友刑部大輔氏時共保豊後高崎城、九月二十三日、氏經遣子松王丸、擊菊池武光於筑前長者原、為所敗、　拠太平記、太平記、以此為康安二年事、按延文六年辛丑改元康安、康安二年壬寅改元貞

治、而山田聖栄自記、定山公貞治二年五月二日申状言、先是二年、聞探題与武光戦、率兵救之、拠此則氏経為武光所敗、事在康安元年明矣、故置於此、二十六日、　定山公帥衆救之、路出肥後、和泉下司政保・牛屎高元・馬越藤四郎行家及肥後葦北七浦黨拒之、　公戰不利、軍多死傷、乃反、既復召募兵衆、將救探題、而地頭御家人莫有應者、會和泉下司政保等蜂起、國中騒動、　公遂引兵擊之、三年不克、拠山田聖栄自記、定山公貞治二年五月二日申状、馬越氏出自菱刈氏、　冬十月十六日、斯波氏經遺三郎右衛門尉資久書、　使擊菊池武光曰、　宜自肥後球麻郡逕趣菊池壘、拠島津支流系図、十二月五日、　齢岳公使禰寝郡司權領大禰寝院永吉郡本地頭得分、　拠齢岳公旧譜、清有死、小松氏古系図、康安元年六月二十日、子久清嗣、然則此云祢寝郡司者即久清也、但正撰系図云、文和二年、久清受郡司職於清有、其後應安五年清有死、則是年清有未死也、然文和二年久清已受郡司職於清有矣、則是年雖清有未死、而為祢寝郡司者、乃久清也、祢寝大根占郷神之川村有地名永吉、清有見上文和元年、此是歳、　齢岳公陥大姶良城及末次城、　同上、齢岳公陥大姶良城・末次城、旧譜無年、二城並在隅州、而山田聖栄自記、載定山公貞治二年申状云、前此二年、舎弟某与敵軍戦於隅州、至今未止、蓋謂攻二城、而貞治二年、歳在癸卯、前此二年、歳在辛丑、即是年也、故置於此、然旧譜言陥二城、申状言戦於隅州、至今未止、頗不合、豈既陥二城、又擊其余寇者乎、闕疑俟考、楡井頼仲攻肝付氏党於大姶良城下之、使其党大姶良新兵衛・横山彦三郎守之、觀應二年四月、畠山直顕党下之、七月、頼仲党細山田三郎等復下之、八月、直顕党復下之、文和元年十二月、頼仲党復下之、三年二月、直顕党復下之、皆見于上、以是観之、則是時拠大姶良城者、蓋畠山直顕之党也、姶良郡下名村有末次門、使島津忠經居末次城、使本田信濃守重親居西俣、其後自鹿兒島徙大姶良、又徙志布志、拠齢岳公旧譜、山田聖栄自記、三州地図西俣村在大姶良村東、拠本田信次郎系図、本田貞親見第一巻文治二年、本田氏系図多残欠、世次不詳、故云後世、　初畠山直顕使野本藤次秀安守帖佐萩峰城、　齢岳公遣兵攻之、而畠山軍團本田重親於溝邊城、既而　公與直顕講和、直顕又屯加治木土器園、　公夜遣精兵破走之、直顕引兵而北、屯志布志、攻新納越後守實久於松尾城、　公自鹿兒島引兵救之、直顕走櫛間及飫肥、求援於伊東氏、伊東氏不應、乃奔豊後、及　公徙志布志、因直顕故壘爲城、名曰内城、拠齢岳公旧譜、山田聖栄自記、畠山直顕軍奉行野本藤二行秀、見上文和元年、此書野本藤次秀安、疑是行秀、更名秀安、公自鹿児島徙大姶良、又徙志布志、而云直顕攻実久於松尾城、公自鹿児島引兵救之、則其事蓋在公居鹿児島之日矣、萩峯城遺墟在帖佐地頭館西南十七町余餅田村、溝辺城遺墟在溝辺郷麓村、加治木有黒川嶽、破瓦頽垣、猶有存者、相伝以為土器園遺墟、其後復居鹿兒島、　島津系図、嘉慶元年齢岳公薨於鹿児島、拠此則齢岳公復居鹿児島矣、　實久、時久之子也、拠島津支流系図、

2573

「師久公御譜中」

「正文在入來院石見重頼」

凶徒國分平次郎友重・同永利又太郎入道祖性兩人跡田薗事、善悪共令中分、半分所去申候也、迄于御子々孫々、聊不可成違乱之煩候、此上者、於公方可擧申候、恐々謹言、

二月十九日　　左衛門少尉師久御判

謹上　澁谷美濃五郎左衛門尉殿（重継）

「此一通年付ナシ、御譜中文和四年ニ入ル、次ノ廿三日モ同断、後考ヲ俟ツ」

2574

「師久公御譜中」

「正文在渋谷如兵衛重増」

凶徒莫祢彦太郎入道成因跡除散在知行分、山門院之内多田名〻主職・同宮里郷内長崎寺并莫祢院除遠矢入道知行分、事、澁谷河内權守殿与兩人所去申候也、善悪共御中分候而、半分宛可有御知行候、迄于御子〻孫〻、不可成違乱之煩候、此上者、於公方可擧申候、恐〻謹言、

二月廿三日　　左衛門少尉師久御判

謹上　東郷左京亮殿

2575

「越前島津氏七代忠兼譜中」

一揆条〻事

一此人數、いさゝかも相互に吳儀を存、各別の所存候ハ、、面〻けうくんをくわふへし、若猶もちゐ候はすハ、此一揆をはなッへき事、

一此人數の中に、馬にもはなれ、一騎もとゝまり候ハ、、ともに見はなッへからさる事、

一此人數ハ、大少事いかなる事も候へ、あいたかいに各〻身、同事に存候て、就内外、見はなッ事あるへからさる事、

右、件意趣者、此三ヶ条、若令違犯者、日本國中大小佛神、別者八幡大菩薩　天滿天神の御罰を、此連判の人數罷蒙候へく候、仍起請文之狀如件、

文和四年二月廿五日

かすやの越前了義（花押）
はん四郎助長（花押）
こまさハの新蔵人義員（花押）
嶋津薩摩守忠春（花押）
いつみの五郎さへもん師忠（花押）
さすのさへもんの大夫道幸（花押）
松岡弾正さ衛門尉盛時（花押）
三浦越中二郎左衛門尉忠平（花押）
ふくのへ氏重（花押）
むらかミかゝ守貞頼（花押）
しまつ忠兼（花押）
やまと氏政（花押）
うつき師重（花押）
大くさ持継（花押）
むらかミのかもんのすけ氏頼（花押）
山口のたんしやう氏衡（花押）
山下のさきやうのすけ氏秀（花押）
うちかしま泰連（花押）
小笠原のミんふのせう氏長（花押）
嶋津二郎さへもん範忠（花押）
ふくのへしやうけん貞治（花押）
もりもと顯景（花押）

にへとみ 政元（花押）
山口のかけゆさへもん 高衡（花押）
やまとの弥太郎 政行（花押）
たけたの兵庫助 信春（花押）
小林五郎二郎 久信（花押）
おう屋三郎入道 性善（花押）
たさきの三郎さ衛門尉 頼重（花押）
いち 行明（花押）
かけひのひやうこ 通保（花押）
山下四郎さへもん 氏郷（花押）
いちのたんしやう 朝明（花押）
いち四郎さへもん 信明（花押）
市の九郎さへもん 春明（花押）
市の太郎左衛門尉 氏明（花押）
薬師寺かけゆさへもん 義治（花押）
三村まこ七 爲成（花押）
薬師寺ノしゆりのしん 義□（花押）
きたそのさこんの大夫 守忠（花押）
くらさへの三郎さへもん尉 盛氏（花押）
井上 清廣（花押）

かさわらの新さへもん 氏匡（花押）
松浦十郎左衛門尉 源持（花押）
山下左衛門大夫 政秀（花押）
とうミふの五郎さゑもん 盛幸（花押）
こりやうの龍五郎 經光（花押）
とうミふの新さゑもん 盛信（花押）
志水 光寶（花押）
中村 時光（花押）
向井雅正左衛門尉 行胤（花押）
笠原中務入道 匡蓮（花押）
佐貫 宗綱欠

2576

「市來崎文書」

ゆつりあたふ

さつまのくに山とのゐんひんかしかた、たかハしのミやうてんちの事、

合　今新開参段定、但さかいにハやなきをうふる、

右、てんちハ、家高しんふ道惠のゆつりをゑて、たうちきやうさういなし、しかるに、いちくさきのひこ七郎殿あひしたしきうゑ、心さしあさからさるニよて、ゑいたい

をかきて、ゆつりたてまつるところなり、かのところハ、もとより御くうしかゝらさるうゑハ、まんさうくうし、りんしのくわやくにをいてハ、一かうとゝめて、しゝそん〳〵にいたるまて、ゑいたいさういなく、ちきやうあるへく候、仍爲後日、ゆつり狀如件、

文和四年二月廿九日　　家高（花押）

家重（花押）

2577

「氏久公御譜」

「写有之」

「朱書」「自一色殿御配分狀付于御下文　申目安案　奉行斎藤左衞門入道　文和四年四月八日上之」

目安

嶋津上總三郎左衞門尉氏久代頼兼申

右、於氏久、大隅薩摩兩國不退致合戰、自身數ヶ度被疵之条、親父道鑒（貞久）依令注進、達于上聞者哉、而去觀應二年九月廿三日、筑前國金隈合戰之時、屬于一色右馬權頭（範光）殿手、致忠節之間、若黨數輩令討死、氏久數ヶ所就于被疵、一色宮内少輔（範氏）殿右京權大夫御注進早、然間、爲勲功之賞、所令拜領嶋津庄之内日向方北郷、先立爲勲功之賞、伯父尾張守資忠下給御下文之間、爲此替、同庄之内薩摩方東郷藏人跡、同一族等之跡、自一色殿令拜領之上者、任彼配分之狀旨、依「給御譜ニ」御下文、弥爲抽戰功之勇、仍目安言上如件、

文和四年三月　日『正平十年也『乙未』』

2578

『水引執印文書』

一色殿并大友刑部大輔（氏時）攻入肥後國、被始合戰畢、仍爲合力、所打立也、來十五日以前、可被馳寄和泉城・同山門院間、依執達如件、

文和四年三月三日　　『師久公』左衞門少尉（花押）

執印左衞門大夫『友雄』殿

2579

『入來院氏文書』

（端裏書）「小五郎譲狀」

薩摩國入來院清色名内南方祖父致重跡所〻所領、平五郎重継仁所譲与悉皆也、雖然、當院之惣領清色郷与令申之間、南方内本村弥藤四郎入道在家於清色云也、此村爲惣領名字間、弥藤四郎入道居住屋敷より上ノ小薗・副田渡瀬乃口道兩方畠、南ハ道覺給分のくねをすくに切、河上ハ塚をつきて廟を立タル所より河へよこさまに切、河ハ

上のきしのまゝ、坂の上あかりを小薗へすくに切、水田ハ清色前田内屋腰山作の田壹段廿、河より東、屋腰山の古の道口上下水田参段、まて野と云也、此外山野ハ南方也、仍重勝重代相傳之所領也、當所爲惣領之間、（南字ノ裏ニ）南方の内（重勝ノ花押アリ）をぬきて、限永代、子息將重所讓与也、爲後證讓狀如件、

文和三年乙未四月八日　　美濃守重勝（花押）

2580

「氏久公御譜中」

「写有之」

「大隅殿御注進礼阿弥陀持上　文和四七廿二到」（朱カキ）

大隅國下大隅郡肥後彦太郎種顯・同舍弟彦次郎種久等、令同心畠山匠作（直顯）、去五日巳刻引入凶徒於郡内崎山城候間、不移時剋馳向彼城、同十二日攻落候訖、爰薩摩國伊集院八郎三郎久孝・谷山五郎良香等参御方之条、先日就于注進、被成下御教書候旱、隨而今属于氏久手、馳越隅州令致忠節候、若此条偽申候者、八幡大菩薩御罰可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和四年四月廿日（乙未）　　左衛門尉氏久

進上　御奉行所

2581

「道鑑公御譜中」

『写有之』

『奉行佐々木四郎左衛門入道殿　文和四年卯月十四日言上』

「大隅殿御官途申狀案」

嶋津上總入道ゝ鑒代賴兼謹言上

欲早被優軍忠勞、愚息三郎左衛門尉氏久官途事、任先度御沙汰、落居篇蒙御免、同孫子弥三郎忠光以下一族等官途所望事、面ゝ蒙芳免間事、

副進

一通　系圖

一通　氏久并一族等官途所望注文

右、氏久宮内大輔所望事、爲二階堂大藏少輔御奉行、捧申狀之間、去ゝ年文和二二月御披露之處、如御返答者、御免之段雖不可有子細、爲舍兄師久六位判官之上者、爭爲舍弟氏久之身、八省符可望申哉、道鑒可尋下之由、就（「于」被）被仰ゝゝ書出、即捧請文（「注ニ作ル」）之處、大藏少輔云ゝ、御奉行上表旱、仍爲攝津右近大夫將監御奉行、雖令言上、去年依濃州下向、于今被閣之条、不便之至也、就其雖爲非（「中ニ作ル」）重代之仁、依戰功之勞、官途蒙御免之輩等繁多也、何況道鑒并一族等官途事、自右大將家以來、云廷尉、云名國司、相續于今無

相違之處、氏久官途令延引之条、失面目者也、所詮、任先度御沙汰落居之篇、氏久宮内大輔可蒙御免者哉、次孫子弥三郎忠光以下庶子等官途事、注文別紙進覧之、彼仁等當時不退合戰之間、軍忠依異于他、吹擧所令申也、急速任譜代之例并軍功之忠、面々官途蒙恩免、向後弥爲抽無二忠節、粗言上如件、

文和四年卯月　日

望申官途事

嶋津三郎左衞門尉藤原氏久　宮内大輔

同上總弥三郎藤原忠光（佐多）　修理亮

同下野彦三郎藤原泰久　左衞門尉

同下野三郎四郎藤原忠継　中務允

同大隅宗四郎藤原親忠（伊作三代）　掃部助

同大炊弥四郎藤原忠助　大炊助

以上

2582

「師久公御譜中」

「案文在閉本」

「両御所注進文章同前　判官殿御注進文和四七十八到」（朱カキ）

薩摩國凶徒退治事、相催御方軍勢、既令打立候之處、兵衞佐殿（直冬）依御入洛之聞得候、薩州御家人市來太郎左衞門尉氏家同一族・東郷三郎藏人道義同一族・牛屎左近將監高元同一族・和泉下司諸太郎兵衞尉政保同一族、彼仁等者、先日降参之由、雖令申候、又以令變改候訖、於在國司次郎道久者、属申于佐殿御手、於祖父道超者、爲宮方、楯籠頴娃三郎入道城候、彼凶徒等、引合于菊池肥守後并内河以下賊徒等、可寄來于師久居住知色城之由、其聞候之間、致要意候之刻、京都御合戰。被（仁イ）追落東寺宮方、同御退治之由、依被成下御教書候、一色入道殿（道猷）御施行訖、就其凶徒等引退面々城郭了、雖然、彼政保以下凶徒等、去四月廿六日丑刻、忍入于老父居住山門院木牟禮城之間、（覃）憚合戰、忍二人（四郎三郎孫二郎）打留、自余追返了、隨而郎徒市來崎次郎秀幸被疵候了、左肘、仍爲彼等對治、相催御方軍勢之最中候、澁谷一族、同當國地頭御家人等中仁、守護人相共可令誅伐政保以下逆徒等之旨、可被成下御教書候、次御方御敵等交名注文一通（別紙在之）、令進覧候、且其間之子細、代官貞阿可言上候、若此条偽申候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和四年六月一日　左衞門尉師久

進上　御奉行所

「師久公御譜中」

「写在日當山之土谷山右近」

御感　綸旨所望輩

野依三位房　道玄

小木彦三郎入道　覺淨　子息討死

同弥三郎入道　覺忍　子息討死

同弥五郎入道　淨圓　親父討死

光富又五郎入道　道惠

上益山孫七　末純

下益山四郎　忠清

島津三郎左衞門尉　直久

佐竹彈正左衞門尉　忠景

同新左衞門尉　忠秀

同掃部允　家住

野本布袋丸　親父討死

牛屎大藏丞　貞信

小提藤五　貞國

入來新三郎　廣純

澁谷下野權守　重純

小木孫王丸　親父討死

一持一城輩并親類手物注文

鮫島彦次郎入道　蓮道

谷山五郎左衞門入道澄(隆)信

島津長門入道　道忍

矢上参河權守　高純

指宿彦二郎入道　成榮　子息討死

穎娃左近大夫入道　通願　去三月参御方

智覧讃岐介　忠元

別符右馬權助　忠香

一属鮫島又二郎入道蓮宗　(手一族以下輩脱カ)

同駿河權守　家政

同掃部助　家業

同初王丸

同孫石丸　親父討死

同三郎左衞門入道　蓮性

同三郎兵衞尉　家俊

同松王丸

同太郎兵衞尉　家武

同八郎右衞門尉　家近

同右衞門五郎　家雄

同宮内丞　家直
同杢允　家行
同彦太郎　家香
同左衞門六郎　家氏
生馬隼人佐　家重
同藤左衞門尉　家廣
足立彈正忠　家兼
赤崎左京進　秀世
河俣主殿允　政直
島崎左近五郎入道　眞乘
松山大膳進　通秀
安東新兵衞入道　蓮迎
同少監物允　政光
同左衞門太郎入道　妙心
平塚采女佑　維家
脇木兵衞二郎　通純
同兵衞五郎　通久
同兵衞六郎　通實
安部野又六入道　定用
同修理進　政季

長野左衞門二郎　久長
信夫八郎左衞門尉　行秀
河邊大舍人允　家通
橋口又次郎　忠吉
肥留右衞門四郎　安宗
鰺坂新兵衞尉　家好
吉次又四郎入道　賴惠
鮫島平太郎入道　蓮教
一屬谷山隆信手一族以下輩
谷山隼人入道牒信跡討死
同新五郎入道　教信
同越前介　忠里
同平兵衞尉　忠名
同五郎兵衞尉　忠永
同杢助　忠雄
土持三郎左衞門尉　綱氏
用松五郎二郎入道　淨西
伊佐智佐弥太郎入道々譽
同小三郎入道　道妙
同小二郎入道　道覺

同太郎左衛門尉　家香
同太郎兵衛尉　家俊
同宮内丞　家純
同兵庫允　家治
有馬治部左衛門尉　冬純
同左衛門三郎　春純
山口弥太郎入道　妙一
同弥三郎入道　玄一
同三郎兵衛尉　重純
佐枝隼人佐　泰純
山角平三郎　秀澄
大浦平右衛門尉　良澄　子息討死
一属智覧忠元手一族以下輩
智覧長門介　泰清
木佐木三郎左衛門入道善阿
同新左衛門尉　忠光
同三郎兵衛尉　忠貞
浮島四郎左衛門尉　忠資
同三郎左衛門尉　忠息
同彈正正（ママ）　忠國

同御房丸　親父討死
青木六郎左衛門尉　忠藤
厚地二郎入道　嚴覺
深見弥二郎入道　行慶
蒲生藤内左衛門尉　重直
同杢允　清房
那古屋三郎左衛門尉貞遠
平田九郎忠弘跡　討死
河崎兵衛太郎貞氏跡　討死
同大炊左衛門尉　忠宗
石塚宮内左衛門尉　胤氏
深見彦四郎入道　行妙
生馬孫三郎　家實
堀又二郎入道　道金
久富五郎兵衛尉　清貞
富田兵部丞　盛信
加藤宮内丞　景實
田中八郎入道　道意
同子息九郎　忠行　討死
同橘左衛尉　行純

同兵庫允　忠純
藤崎掃部助入道　覺性
同孫六　忠平
蒲生兵部房　祐清
同八郎三郎　清長
同左衛門五郎忠清跡　討死
光富石増丸
青木孫十郎　忠政
那古屋左衛門三郎　兼行
田中平五郎　支秀（友カ）　討死
一智覧出羽入道覺善、去年夏比死去畢、然覺善之跡出河（於カ）
邊郡三分二并本領智覧院半分者、譲与嫡子讃岐忠元（了カ）一、
相残分河邊三分（一脱カ）、智覧半分者、譲与女子平氏女字御畢、
隨与令扶持一族以下軍勢、致忠節候、仍御感綸旨所望
仕候、充彼女子無相違之様、可有申御沙汰候、
一属別符忠香手一族以下輩
谷山五郎左衛門尉　忠俊
同炊三郎兵衛尉　忠津
同大炊助　忠幸
同左京進　忠清

同彈正忠　忠純
加世田別符郡司三郎左衛門入道法西
同兵庫允　景家
同三郎兵衛尉　景綱
同平六　景宗
同平五　景純
一属指宿成榮手一族以下輩
原田彦五郎入道　妙榮
赤崎左衛門三郎入道光一
吉田長門介　清忠
山崎新左衛門尉　忠末
同四郎左衛門尉　忠遠
原田小次郎左衛門　兼忠
野間九郎兵衛　忠純
同八郎兵衛尉　忠近
岩本太郎左衛門入道蓮覺
神野平三郎　忠兼
松岡大炊助入道　善眞
島間七郎跡
同五郎兵衛尉　忠有

山口藤左衞門尉　純綱
行平五郎左衞門尉　忠經
廻山弥平太入道　良一
箕輪新兵衞尉　忠元
一属矢上高純手一族以下輩
矢上四郎左衞門尉　宗純
同彦五郎入道　覺澄
同彈正左衞門尉　秀純
同兵庫允　政純
同左京進　兼純
同鶴熊丸
漆池六郎左衞門入道蓮池
同彦五郎　重近
吾平藤九郎入道　蓮道
久米又次郎　光純
尾上新兵衞尉　泰實
同四郎左衞門尉　高實
内田七郎　助實
同九郎　英實
河邊縫殿允　重通

上野平八　貞通
小木彦三郎　家秀
智覧平三郎　惟幸
大浦犬童丸
一属島津道忍手一族以下輩
島津兵衞三郎　久實
同彦三郎　久末
兒島伊豫房　行明
同四郎左衞門入道　々高
鳥山二郎左衞門入道成阿
村田輔阿闍梨　如玄
原田又太郎入道　經道
桑波田八郎　宗考
野田左衞門四郎　昌考
大田八郎左衞門入道蓮義
近竈彦六入道　本阿
以上百八十三人
一御祈禱御感所望輩
中納言律師　道叡
伊勢律師　堯慶

助律師　　「本ノマヽ」円俊

大和阿闍梨　　円空

大和房　　房圓

輔房　　眞慶

右、交名注文如此、

林鐘吉日

（本文書文和四年ノモノニ非ズ、或ハ興国三年カ）

2584

「師久公御譜中」

「写在閉本」

『載南山巡狩録追加』

「朱カキ」「判官殿御請文両御所文章同前　文和四七十八到来　片瀬孫三郎殿光阿弥陀佛持上之也」

案文

去三月十二日御教書、五月十九日到來、謹拜見仕候訖、抑被追（落脱カ）東寺凶徒等悉退治之条、天下大慶此事候、仍佐殿（直冬）鎮西御下向候者、致要意可對治之由事、任被仰下之旨、可令存知候、老父（貞久）所勞之間、師久捧請文、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和四年六月一日　　左衛門少尉師久請文

2585

『仝』

雖無何事、細〻可令啓案内之由存候之處、遼遠之間、乍存罷過候之条、背本意候、抑兵衛佐殿以下凶徒等、京都乱入之由承候之間、即可馳参候之處、畠山修理亮直顯以下凶徒等、引合當國凶徒等、可寄來老父道鑒城之由其聞候間、相待時分候程ニ、無其儀候之處、佐殿始申（ママ）候東寺没落之由、下給御教書候之条、先以目出畏入候、仍爲凶徒退治打立最中候、合戰之次第、追可令言上候、在京之時者、細〻被懸御目候之条、于今畏入候、何様當國少靜謐候者、早〻参上可仕候、諸事期後信候、恐〻謹言、

六月二日　　左衛門少尉師久

謹上　御宿所

「此文書、師久公御譜中ニ在リ、案文在閉本、仁木殿自判官殿御状ト朱カキアリ」

2586

『水引執印文書』

此境合戰事、今時分大綱候之間憑存候、御同心候者、日來可爲本望候、尚〻憑存候、委細御返事可承候、恐〻謹言、

（貞治六年カ）六月十七日　　修理亮氏久（花押）

謹上　執印殿

2587

「氏久公御譜中」

『写有之』

「朱カキ」「二イ」「片瀬孫太郎殿持上　文和四七十八到」

薩摩國凶徒牛屎左近將監高元・市來新左衛門尉氏家・東郷藏人道義・肥後國葦北庄宮方凶徒、引合于當國凶賊和泉庄下司諸太郎兵衛尉政保以下、去四月廿六日夜丑刻、老父居住忍入于山門院木牟禮城、及合戰次第、舍兄師久注進之間、不及巨細候、次日州畠山匠作(直顯)并伊東一族於佐殿(直冬)方打出候之間、土持薩摩守貞綱同一族等、参御方可始合戰之由馳申候、彼書狀進覧之、仍令談合球磨一色孫三郎殿、既打立候合戰之次第、追可注進言上候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

「当正平十年」「乙未」文和四年六月十八日　　左衛門尉氏久上

進上　御奉行所

2588

「氏久公御譜中」

「写有之」

去三月十二日御教書五月十九日到來、謹而拜見仕了、抑被追落東寺凶徒等、悉御退治之条、天下大慶此事ニ候、仍佐殿鎮西御下向候者、致要意可對治之由事、任被仰下之旨、可存其之旨候、老父所勞之間、氏久捧請文候、以此之旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和四年六月十八日　　左衛門尉氏久

2589

「道鑑公御譜中」

『写有之』

『奉行中澤掃部允』

注進狀披見訖、畠山修理亮直顯事、所与同凶賊云々、事實者、就令現形、相談合力仁等、不日可加退治之狀如件、

文和四年七月九日　　『尊氏カ』御判

一色(範氏)入道殿

2590

「氏久公御譜中」

「写有之」

「朱カキ」「防門殿御返事奉行中澤掃部允　光阿弥陀佛持下　文和四八廿五下國畢」

去四月廿日・六月十八日兩度注進狀披見訖、肥後彦太郎種顯・舍弟彦二郎種久・諸太郎兵衛尉政保已下、与同凶徒云々、早相催當國地頭御家人等、且相談一色入道、不

日可加退治、次國人等忠否有無、可注申之狀如件、

文和四年八月十八日　「尊氏」御判

嶋津三郎(氏久)左衞門尉殿

2591

「氏久公御譜中」

「写有之」

「朱カキ」「将軍家之御返事奉行中澤掃部允　光阿弥陀佛持下　文和四八廿五下國」

注進狀披見訖、當國凶徒肥後彦太郎種顯・舍弟彦次郎種久・諸太郎兵衞尉政保已下事、早相催一色入道、不日加退治、弥可致忠節之狀如件、

文和四年八月十八日　「尊氏」御判

嶋津三郎(氏久)左衞門尉殿

2592

「師久公御譜中」

「写在閉本」

「朱カキ」「奉行中澤掃部允　片瀬孫二郎光阿弥陀佛便宜御注進　文和四八廿五下國了　同光阿弥陀佛持下」

注進狀披見訖、當國凶徒鮫嶋彦次郎入道・市來太郎左衞門尉并在國司次郎入道等事、早相談一色入道、不日加退治、(ママ)可弥可致忠節之狀如件、

文和四年八月十八日　(尊氏)御判

嶋津判官(師久)殿

2593

「仝御譜中」

「写在閉本」

「朱カキ」「奉行同前　防門殿御返事　光阿弥陀佛持下　文和四八廿五下國」

去六月一日注進狀披見訖、鮫嶋彦次郎入道・市來太郎左衞門尉并在國司次郎入道已下凶徒等事、早相催國中地頭御家人、且相談一色入道、不日可加退治、次國人等忠否、可被注申之狀如件、

文和四年八月十八日　(尊氏)御判

嶋津判官(師久)殿

2594

「見于本田信濃守重親傳」

一文和四年乙未八月二十二日、自　太守氏久公、下大隅郡河北方益弘名内、以水田四町七反并薗三ヶ所、加御判記坪付於別紙、賜之、

2595

下大隅郡河北方益弘名内水田肆町柒反并薗参ヶ所事付坪別紙在之、

右、爲給恩所宛行也、於御公事已下者、任先例、致其沙汰、可令領知之狀如件、

文和四年八月廿二日　　氏久（花押）

本田小太郎（重親）殿

2596

文和四年乙未

九月三日、猿渡藤三郎信重（定山公市來氏家等か櫛木野城を攻るを聞かせられ、知色城より続て攻給ふ、連戰五日の間に、從ひ戰て死之、）

十月廿二日、酒勾兵衞四郎（定山公、和泉莊の名主等、牛尿高元等と知色城を攻ると聞て、兵を救玉ひ、道鑑公及ひ公弟尾張守資忠等、創を被るもの百余人に及ぶ時き、戰て死す、下五人も皆同し、）・酒勾左衞門四郎・愛甲弥四郎（或ハ弥二郎ともあり）・土田五郎・阿曽谷三郎右衞門尉（右を或ハ左に作る）・堀源五、

「道鑑公御譜中」

『写有之』

「朱カキ」「就天龍寺長老被申之　被成下御教書案文　此事等以山門僧下向之時書付被申訖　文和四九廿七」

致忠節之由、去四月廿五日注進狀披見了、其堺事、相談一色入道〻猷、向後可勵戰功之狀如件、

文和四年九月廿五日　　「尊氏カ」御判

畠山修理亮（直顯）殿

2598

「道鑑公御譜中」

「正文有之」

嶋津上總（貞久）入道〻鑒申讃岐國櫛無保地頭職事、道鑒於鎭西、近日殊抽軍忠之處、譜代舊領違乱出來之由、所歎申也、不便事候欤、無相違之様、可令計沙汰哉、謹言、

「文和四押札ニ有之」十一月二日

細河右馬頭（頼之）殿　　（義詮）（花押）

「右ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中歴代亀鑑之中ニ在リ」

2599

「北郷氏元祖資忠譜中」

文和四年乙未十月二十二日、薩州之凶徒和泉庄名主及牛屎左近將監、在國司入道等、引率多勢、襲來太守判官師久公之知色城、資忠馳向、一日一夜力戰、數回被疵、右肱、抽戰功、師久公達之於大樹義詮公、由是賜感賞、其寫並證書左記之、

2600

「在道鑑公御譜中」「案文在閉本　奉行中澤掃部允ト朱カキアリ」

『載南山巡狩録追加』

老父道鑒所領薩摩國櫛木野城塚宮方大將三條侍從并市來太郎左衞門尉・鮫島彦次郎入道・知覧四郎・左當彦次郎入道以下賊徒等、去九月二日當城寄來之間、師久馳向、五ヶ日致合戰、御敵等數輩討捕之、追落訖、同御方打死手負注文、先立令言上、隨而一色殿注進令申者也、次依九州宮方蜂起、大友式部太輔・宇都宮常陸前司・千葉之二郎以下輩、凶徒同心之由、其聞候之上、一色殿長州御越之段、就之、承及、當國凶徒和泉庄名主等并牛屎左近(高元)將監・在國司入道以下、率多勢、去十月廿二日寄來師久城郭間、馳向、一日一夜致合戰之刻、師久三ヶ所被疵、左ウテ右引合左足、同伯父尾張守資忠被疵右肱早、仍當國守護代酒勾兵衞四郎・同左衞門四郎・愛甲弥四郎・土田五郎・阿曽谷三郎右衞門尉・堀源五打死畢、其外手負百余人有之、注文路次難儀之間、追可令進上候、仍兩御所之御間、御發向御延引候者、師久捨國、可令參洛候、將又老父道鑒中風之身難儀之上、合戰最中之間、不能委細、若此条僞申候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰候、此旨可有御披露候、恐惶謹言、

文和四年十一月五日　　左衞門少尉師久

進上　御奉行所

2601

「道鑑公御譜中」

「写有之」

「朱カキ」「防門」殿奉行斎藤左衞門」入道依鎮西難儀被成御教書案　正文澁谷參州代官吉岡入道持下之　十二月十九日」

鎮西凶徒蜂起之由、有其聞之間、爲退治可令發向也、全要害、可待申也、且東國無爲之間、召上官軍等、近日既可進發、其子細連々可被仰下也、將又、此間抽忠節条、殊被感思食候、弥可致戰功之狀如件、

文和四年十一月七日　　『尊氏カ』御判

嶋津上總入道殿(貞久)　『道鑑公ニ当ル、公ハ貞治二年御逝去也』

2602

「仝上」

「写有之」

「朱カキ」「正文澁谷殿代官十二月十九日持下之」

鎮西凶徒蜂起之由、有其聞之間、爲退治可令發向也、全要害、可待申也、且東國無爲之間、召上官軍等、近日既可進發、其子細連々可被仰下也、將又、此間抽忠節之条、殊被感思食候、弥可致戰功之狀如件、

文和四年十一月七日　　『尊氏カ』御判

嶋津一族中

2603

「道鑑公御譜中」

『写有之』

「朱カキ」「将軍家御判　奉行斎藤入道依鎮西難儀被成御教書案　正文澁谷参州代官十二月十九日持下之」

鎮西凶徒蜂起之由、有其聞之間、一所所發向也、全要害、可待申着國、且其堺事、連々可有注進之狀如件、

文和四年十一月十日　「尊氏カ」御判

嶋津上總(貞久)入道殿

2604

「仝上」

「写有之」

「朱カキ」「将軍家御教書　奉行斎藤左衛門入道　澁谷三河守代官禅門持下之十二月廿六日下國云々」

鎮西凶徒蜂起之由、有其聞之間、爲退治可令發向也、相談守護人嶋津上總入道、全要害、可待申也、且東國無爲之間、召上官軍等、既可進發、其子細連々可被仰下、將又、此間抽忠節之条、殊被感思食也、且就于守護人之注進、可有其沙汰之狀如件、

文和四年十一月十日　「尊氏」御判

薩摩國地頭御家人等中

大隅國地頭御家人等中

2605

「見本田重親譜」

本田家之事、爲當家之父母、依其分國之諸侍不可本田上、(脱字アラン)古殿(故カ)代々置文如此、非新儀之狀如件、

文和四年霜月十一日　氏久(花押)

本田(重親)殿

「此文書、氏久公御譜中正文在本田甚兵衛ト記セリ」

2606

『写在官庫』

(端裏書)「御教書案」

鎮西凶徒蜂起之由、有其聞之間、爲退治可令發向也、全要害、可待申候、且東國無爲之間、召上官軍等、近日既可進發、其子細連々可被仰下也、將又、此間抽忠節之条、殊被感思食候、弥可致戰功狀如件、

文和四年十一月廿日　(尊氏)御判

嶋津一族中

2607

「道鑑公御譜中」

『正文在島津安藝守久雄』

令對治大隅薩摩凶徒等、上洛之条、殊神妙也、急可馳參之狀如件、

『文和年中欠』「御譜ニハ延文元欠トアリ」

八月二日　（花押）

嶋津上總（貞久）入道殿

「上包」嶋津上總入道殿　『上書』尊氏

2608

『長谷場氏文書』

契約

日向國飫肥北郷山西辨分方内水田事

合拾町者

右、水田者、所宛賜一乘院家御下文於鶴一丸也、而千代熊丸仁有契約、被避与候上者、成水魚之思令知行、御年貢以下臨時課役御公事等、隨分限、鶴一丸方仁可沙汰申候、若又敵方出來時者、一味同心可退治之候、仍契狀如件、

正平十年十二月廿七日

藤原千代熊代實純（花押）

2609

「在師久公御譜中　写在閉本」

『載南山巡狩録追加』

「將軍家御返事文章同前　奉行中澤掃部允　防門殿御返事　与阿弥陀佛持下ト朱カキアリ」

去月五日注進狀披見了、知色城合戰之時、被疵之由被聞召、令忠功（「畢異本」）異他之条、尤以神妙、凡鎮西事、嚴蜜沙汰最中也、其間全要害、可相待左右、且地頭御家人已下同心之輩等、就忠否注進、可有其沙汰、次討死跡輩等事、所被下御感也、向後弥可廻籌策之狀如件、

『正平十年也』文和四年十二月廿八日　御判

嶋津判官（師久）殿

2610

「資忠譜中ニアリ」

「朱カキ入」「防門」殿御感　奉行中澤掃部允

去十月廿二日、薩州知色城合戰之時、「被疵之由イ」被蒙之由、島津判官師久所注申也、尤以神妙也、弥可抽（「イナシ」）戰功之狀如件、

文和四年十二月廿八日　御判（「義詮公」（尊氏））

島津尾張（「資忠」）守殿

2611

討死之人々

酒勾兵衞四郎跡　酒勾左衞門四郎跡　土田五郎跡

愛甲弥四郎跡　堀源五跡　阿曽谷三郎左衞門跡

討死之御感御教書文章同前

2612

「氏久公御譜中」

「写有之」

下御所御的　文和五　二　十三

御鎧以下

小笠原民部少輔　●●●すいかんかうしのおり物

同前

安東平次左衛門尉　●●●すいかんきよれう

物部小次郎左衛門尉　●●●すいかんすわう色

同前

諏訪次郎左衛門尉　●●●すいかんきよれう

武田對馬守　●●●すいかんねり色

同前

小柳左衛門尉　●●●すいかんくち葉

（本文書後出ノ二六二三号文書ト同文ナルベシ）

2613

『岸良氏文書』

（口裏）「姫松丸譲状」

一僧耀源譲与　姫松丸

所帯已下所從等事

一大隅國鹿屋院下村圖師職

一觀音寺内居薗吹上并寺田壹段三杖、同帯田壹段、姫松丸譲所實正也、有限天長地久之御祈禱、無懈怠、其沙汰いたすへく候、代々のかきくたしあいそゑて譲有、仍爲後證譲狀如件、

文和伍年二月廿一日　僧耀源（花押）

2614

『權執印文書』

去年十一月十日將軍家御教書如此、早任被仰下之旨、構要害、可被相待申御發向也、仍執達如件、

文和五年二月廿二日　沙弥（貞久）（花押）

新田宮執印左衛門『友雄』太夫殿

2615

『執印文書』

和泉庄名主等、引合于菊池、來朔日可寄來當所之城之由、其聞候、彼日限以前、被馳寄候者悦入候、當國之案否、此時ニ候欤、尚々此狀到來候者、不替時御打越候者喜入候、恐々謹言、

九月廿七日　師久（花押）

執印左衛門『友雄』大夫殿

（底本九月十七日トアルモ、原文書ニヨリ訂正ス）

2616

『仝』

高城郡内重豊領分半分事、御知行不可有相違候、此段且
廷尉方可申談候、恐々謹言、
『年間不考』七月十六日　氏久御判
執印左衞門大夫(友雄)入道殿

2617

「正文在吉利祢寝丹羽家臣角内蔵左衞門」

(花押)

正八幡宮領大隅國上小河村弁濟使職事、以宗道・宗継可
令相傳之由、任領家代々御契狀之旨、同子息宗久令知行
之、於有限御年貢者、可令弁濟之由、依領家之仰、執達
如件、
文和五年三月十一日　沙弥通賢奉
上小川五郎殿

2618

「市來崎文書之内」

去五月十日・同十六日兩度注進狀披見了、其堺事、嚴蜜
沙汰最中之上、既於中國ハ、細川右馬頭頼之發向訖、次
大隅薩摩兩國地頭御家人等、一向不参云々、重可致催促、
若尚不承引者、就注進、可有殊沙汰之狀如件、
延文元年七月十日　(尊氏)御判
嶋津上總(貞久)入道殿

2619

「道鑑公御譜中」

『正文有之』

(義詮)
(花押)

下　嶋津前上總介貞久法師(法名道鑒)
可令早領知信濃國太田庄内大藏郷(貞頭跡)地頭職事
右、子息宗久先亡之間、依無一子、相副建武五年正月廿
四日御下文、讓附云々者、早任彼狀、領掌不可有相違之
狀如件、
延文元年八月六日

2620

「仝上」

『正文有之』

(義詮)
(花押)

下　嶋津前上總介貞久法師(法名道鑒)
可令早領知薩摩國守護職、薩摩郡地頭職、山門院・市
來院地頭職、鹿兒嶋郡・同永吉・十二嶋地頭職、宮里
郷参分壹地頭職、讃岐國櫛無保(上村、下村)、同公文名・光成

名、信濃國太田庄内南郷、豊前國副田庄（副田三郎次郎種信跡）、下
總國相馬郡内（符河村、押手村、下黒崎村、発戸村、甲斐御房村）、同郡内古志木村、
河内國西嶋村、日向國高知尾庄、以上本領、
薩摩國河邊郡市來院名主職、豊後國井田郷、大隅國守
護職、同國本庄内（多禰島、深河院、岩河村、財部院、筒羽野村）、同國寄郡内（下大隅郡、鹿
屋院、串良院、大禰寝院、曽小河院、西俣村、以上新恩）等事、
右所々、任関東代々下文并外題安堵及建武元年綸旨、同
三年三月十七日・觀應二年八月十五日御下文等、領掌不
可有相違之状如件、

延文元年八月六日

「右八月六日二通ノ正文、旧御番所御文書二番箱中歴代亀鑑中ニ在リ」

2621

「ロ切レテナシ　守護代酒勾資光訴陳状也ト見ヘタリ」

欤、不便次第也、彼支證状悉預置御下□間、同令紛失
了、然而被成下御下文之奉行人性運當参之上者、有御尋、
不可有其隠、次資光軍功者、不限一身之忠、老父酒勾二
郎左衛門入道貞阿、建武以來依戰功、可浴恩賞之由、爲
雑賀隼人入道西義奉行、去康永年中再三被經御沙汰、至
所付注申闕所之刻、或号先給、或亦寺社造營料所之条、
不可被行恩賞之由、依被定法、不賜之、乍含愁訴送年月、
爰資光都鄙所々軍忠勵涯分之處、適爲一族之名字、心應
成御敵之間、以彼跡募父子之賞令拜領了、件御下文以下
文書等、數通紛失（ママ）之云、奉行當参之上者、何可有御不審
哉、縱父子各別可浴恩澤之旨、雖令言上、可背理致欤、
其故者、資光先度（「本マヽ」）御下文拜領以後之忠節者、自去文和三
年属細与州（「細川与州」）于時式部太夫、手、参播州、隨而去年二月六日攝州櫻
井山合戰之時、爲先陣捨身命致軍忠之条、一見状分明也、
依一度之戰功被抽賞者、古今流例也、況多年軍忠哉、況
父子忠功哉、加之、自去年（「文和四年」）九月、属同大將（「佐々」）手、令發向土
州、朝夕致合戰、同十月（「文和四年」）十二日合戰、親類酒勾九郎資
継、若黨塩田彦八以下被疵了、次今年三月三日合戰及太
刀打、身（自）身數ヶ所被疵、親類酒勾孫七以下被疵、至于今
令在陣、勵戰功者也、然早云軍忠、無其隠之上者、任
傍例、賜紛失御下文、弥爲成弓箭之勇、恐々言上如件、

延文元年十月　日

2622

「市來崎氏文書」

南方凶徒等、引合于和泉・牛屎賊徒、可寄來當城之由、
有其聞、剰去七月十日將軍家御教書如此、早任被仰下之
旨、馳寄于當城、可被致合戰也、仍執達如件、

延文元年十月九日　　沙弥(貞久)(花押)

市來崎彦七郎殿

2623

下御所御的　文和五『丙申』二　十二

御釵以下
小笠原民部少輔　すいかんかうしのおり物

同前
安東平次左衛門尉　すいかんきよれう

物部小次郎左衛門尉　すいかんすわう色

同前
諏訪次郎左衛門尉　すいかんきよれう

同前
武田對馬守　すいかんねり色

同前
小柳左衛門尉　すいかんくち葉

（本文書二六一二号文書ト同文ナルベシ）

「写有之」

『藤野氏文書』

嶋津修理亮氏久代頼兼申、山城國木幡庄内大田以下田畠等事、薩摩國在國司次郎入道道超跡云々、任去文和二年五月十二日御下文并同月廿二日御施行之旨、沙汰付當所於氏久代、可執進請取之状、依仰執達如件、

延文元年十二月四日　　沙弥在判(石橋和義)

佐竹右馬權守(義篤)殿

2624

「師久公御譜中」

「写在山田七郎右衛門久通」

叙留所望事、所學申公家也、可令存知之状如件、

延文元年十二月三日　　御判

嶋津上總判官(師久)殿

2625

「氏久公御譜中」

2626

「氏久公御譜中」

「正文在安養院」

奉寄進

諏方上下

右、以寄郡内田地四町・薗四ヶ所奉寄也、天下泰平我門繁昌、殊爲遂弓箭素懐、所願如件、

「延文元年」正平十一年『丙申』十二月十八日　　左衛門尉氏久(花押)